

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第162集

花
屋
敷
遺
跡
Ⅱ

東大阪市

花 屋 敷 遺 跡 Ⅱ

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇七年三月

財団法人
大阪府文化財センター

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター



1. 06-2-2 調査区第3面全景 (西より)



2. 06-2-1 調査区 第3面全景 (東より)



3. 06-2-3 調査区 第1-2面全景 (東より)

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第162集

東大阪市

花 屋 敷 遺 跡 Ⅱ

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

花屋敷遺跡は全国高校ラグビーのあこがれ東大阪市の「花園」に所在し、近鉄奈良線の花園駅に隣接しています。現在、近畿日本鉄道株式会社では、奈良線連続立体交差化工事を進められているところであり、平成11年よりそれに伴う埋蔵文化財調査を随時行なってきました。

当該地については平成17年に確認調査をしましたところ、東西方向の中世の溝が確認されました。今回の調査におきましても、中世の建物と溝が検出されました。溝は建物の北側と東西両側に位置し、建物を囲んでいたようです。出土した遺物より13世紀後半から15世紀と考えられます。

周辺の同時代の遺構としましては、南西に約1.6km離れて若江城跡があります。城の周辺地域において、溝に囲まれた数軒の建物からなる屋敷が集まって集落が構成される、そのような村が散在している風景が想像されます。

大和川が江戸時代の宝永元（1704）年に付け替えられる以前は、西側に長瀬川、東側に玉串川と分かれて北流していました。玉串川は、更に菱江川と吉田川に分岐して流れていました。花屋敷遺跡の中世集落は、ちょうどこの分岐する所に当たります。花園駅の南側には、旧字名に「市場」が残されており、舟運の盛んな時代には、交易の中継点としてにぎわったと思われます。大和川付け替え後は、菱江川は菱屋東新田、吉田川は川中新田、玉串川は玉井新田として開発されました。

最後になりましたが、調査に当たり近畿日本鉄道株式会社、大阪府教育委員会などの関係各位に多大なご協力、ご指導を頂きました。記して感謝の意を表します。今後とも文化財の保護に、より一層ご支援を賜りますようお願い致します。

平成19年 3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府東大阪市吉田1丁目地内に所在する花屋敷遺跡06-2の発掘調査報告書である。
2. 調査は近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴い近畿日本鉄道株式会社から平成18年5月1日～平成19年3月30日の間、委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は平成18年5月12日～平成18年7月31日まで行った。平成18年8月1日～平成19年3月30日まで遺物整理作業を行い、平成19年3月30日、本書刊行を以って終了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。

調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘
中部調査事務所長 小野久隆 調査第二係長 森屋美佐子
主任技師 岡本圭司 技師 湯本整 専門調査員 影山美智与
4. 遺物の撮影は中部調査事務所主査片山彰一が、木製品・金属製品ほかの保存処理と樹種の同定については同主査山口誠治、専門調査員岩立美香が行った。動物遺体の鑑定については班長宮崎泰史が行った。

木製品の器種の判別については黒須亜希子が行った。
5. 調査の実施に当たっては近畿日本鉄道株式会社、東大阪市教育委員会、大阪府教育委員会をはじめとし、下記の方々にご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

【調査協力】（順不同、敬称略）
福永信雄、菅原章太（以上、東大阪市教育委員会）
6. 調査の実施に当たって、自然科学分野の分析として、「花粉・珪藻・植物珪酸体分析」をパリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。その報告は第5章「花屋敷遺跡06-2発掘調査における花粉・珪藻・植物珪酸体分析」として掲載している。
7. 本報告書は第1章、第2章、第3章、第6章を岡本が、第4章を岡本・影山が、第5章をパリノ・サーヴェイ株式会社（田中義文・馬場健司・伊藤良永）が執筆した。
8. 本報告書の編集は岡本・影山があたった。
9. 本調査に関わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 実測図の基準高は東京湾平均海面（T.P.）を使用する。
2. 座標の単位はすべてmである。座標は世界測地系である。
3. 全体図・遺構実測図の方位は座標北である。なお真北を基準とした場合、調査区周辺の磁北は7°01′00″、座標北は0°12′57″西に偏位する。
4. 発掘調査や遺物整理は当センターの「遺跡調査基本マニュアル」（2003年版）に準拠して行った。
5. 調査名は上記のマニュアルにのっとり「花屋敷遺跡06-2」と命名した。また各調査区はさらに枝番号をつけて標記した。（例）第1調査区の場合：花屋敷遺跡06-2-1
これらの名称は遺物の取り上げ、注記などに用いている。
6. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
7. 遺構番号は基本的には調査時に付けたものを使用した。
8. 遺構面全体図が1/200、1/300、1/500、1/600、遺構の平・断面図には1/10、1/20、1/40を使用している。そのほか各図にスケールを用いて表記してある。
9. 遺構番号は調査区、遺構面、遺構の性格に関係なく、通しのアラビア数字の後に遺構の種類を示す名称が続く。（例）14溝、16井戸、117ピット
10. 遺物実測図の縮尺は1/4を基調とするが、一部、金属製品および小形の土器が1/2、大形の木製品が1/8である。縮尺は各挿図にスケールにて示した。写真図版については遺物のスケールは統一していない。
11. 遺構図の断面の位置は、「L」によってその位置を明記した。
12. 掲載した遺物の番号は掲載順に通しの番号を与えている。
13. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
14. 図1の「花屋敷遺跡位置図」は国土地理院発行平成10年度版大阪東北部・平成7年度版大阪東南部1/50,000、図2の「調査区位置図」・図52の「調査区周辺の字名と主要遺構模式図」は東大阪市都市開発課発行平成13年度版（H-6-3-23）1/25,000、図4の「河内低地地形分類図」は原1987年『河内低地の地形分類』、図5の「花屋敷遺跡周辺土地条件図」は国土地理院平成14年度発行大阪府東北部・平成14年度発行大阪府東南部・平成18年度発行生駒山・平成13年度発行信貴山の各1/25,000、図6の「花屋敷遺跡周辺遺跡分布図」は大阪府文化財分布図2001年度版をそれぞれ一部改変して使用した。
15. 土器の記述は主に下記の文献を参考にした。
中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
森島康雄1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会
石井啓、福本浩子編2005備前歴史フォーラム資料集『備前焼研究最前線』Ⅱ ～備前焼、その歴史、今まで何がわかって、何がわからないのか～ 備前市歴史民族資料館・備前市教育委員会
勝田邦夫・阿部嗣治1983『若江遺跡発掘調査報告書』Ⅰ遺構編 東大阪市遺跡保護調査会
福永信雄1993『若江遺跡第38次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会
千喜良淳2002「中・南河内における土師器皿の変遷」『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会

目 次

巻頭カラー図版

1. 06-2-2 調査区第3面全景（西より）
2. 06-2-1 調査区 第3面全景（東より）
3. 06-2-3 調査区 第1-2面全景（東より）

序文

例言

凡例

第1章 調査の経緯と方法

- 第1節 発掘調査にいたる経緯 1
- 第2節 発掘調査の方法 2

第2章 遺跡の位置と環境 4

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境

第3章 基本層序 9

第4章 調査の成果

遺構と遺物

06-2-1 調査区 11

1. 第1層・第2層

2. 第3面

3. 第4面

4. 第5面

5. 小結

06-2-2 調査区 17

1. 第1層・第2層

2. 第3面

3. 第4面

4. 小結

06-2-3 調査区 35

1. 第1-1面

2. 第1-2面

3. 第1-3面

4. 第2面

5. 小結

第5章 花屋敷遺跡06-2発掘調査における花粉・珪藻・植物珪酸体分析 46

第6章 まとめ 60

挿図図版目次

図1	花屋敷遺跡位置図	1
図2	調査区位置図	2
図3	各調査区地区割図	3
図4	河内低地地形分類図	5
図5	花屋敷遺跡周辺土地条件図	5
図6	花屋敷遺跡周辺遺跡分布図	6
図7	基本層序柱状模式図	10
図8	06-2-1 調査区第3面平面図	11
図9	第3面遺構断面図	12
図10	14溝漆器椀出土状況	12
図11	06-2-1 調査区第4・5面平面図	14
図12	第4・5面遺構断面図	15
図13	06-2-1 調査区出土遺物	16
図14	06-2-2 調査区第3面平面図	17
図15	11・12・13溝平・断面図	18
図16	11・12・13溝出土遺物	19
図17	掘立柱建物A、B、Cおよび杭列A位置図	21
図18	杭列A断面図	21
図19	掘立柱建物A、B、C平・断面図	22
図20	柱穴出土遺物	23
図21	第3面遺構断面図	24
図22	第3面遺構出土土器(1)	25
図23	第3面遺構出土土器(2)	26
図24	142・148井戸平面図	28
図25	142井戸断面図	28
図26	148井戸隅柱実測図	28
図27	142・148井戸出土遺物	29
図28	06-2-2 調査区第4面遺構平面図	31
図29	20溝・30流路(上段)、146土坑および上層の11・12・14溝断面図(下段)	31
図30	第4面遺構出土遺物	32
図31	06-2-2 調査区包含層出土遺物	33
図32	06-2-3 調査区第1-1面平面図	35
図33	第1層出土遺物	35
図34	06-2-3 調査区第1-2面平面図	36
図35	第1-2面遺構断面図	36

図36	第1 - 2層出土遺物	37
図37	06 - 2 - 3調査区第1 - 3面平面図	38
図38	第1 - 3面遺構断面図	38
図39	2溝平・断面図	39
図40	2溝出土遺物(1)	40
図41	2溝出土遺物(2)	41
図42	第1 - 3面直上および	42
図43	06 - 2 - 3調査区第2'面遺構平面図	44
図44	第2'層遺構および精査時出土遺物	44
図45	花屋敷遺跡の位置	46
図46	花屋敷遺跡の周辺の地形起伏と考古遺跡	46
図47	河内平野とその周辺の地形	47
図48	12溝分析資料採取位置	48
図49	主要珪藻化石群集の層位分布	52
図50	花粉化石群集の層位分布	52
図51	植物珪酸体群集の層位分布	53
図52	調査区周辺の字名と主要遺構模式図	61

写真目次

写真1	珪藻化石	57
写真2	花粉化石	58
写真3	植物珪酸体	59

表目次

表1	珪藻化石の生態性区分および環境指標種群の説明	49
表2	珪藻分析結果(1)	50
表3	珪藻分析結果(2)	51
表4	花粉分析結果	53
表5	植物珪酸体含量	54
表6	遺物集計表	62

写真図版目次

- 図版1 06-2-1 調査区
1. 調査区全景（東から）
2. 調査区全景（西から）
- 図版2 06-2-1 調査区 第3面
1. 14溝断面
2. 14溝漆器椀出土状況
3. 1溝断面（南から）
- 図版3 06-2-2 調査区 第3面
1. 第3面全景（東から）
2. 第3面全景（西から）
- 図版4 06-2-2 調査区 第3面
1. 30流路断面（北から）
2. 67ピット根石検出状況
3. 123ピット遺物出土状況（貨銭・瓦器椀）
- 図版5 06-2-3 調査区 第1-2面
1. 調査区全景（東から）
2. 調査区全景（西から）
- 図版6 06-2-3 調査区 第1-2面
1. 2溝断面（北から）
2. 19土坑遺物出土状況
3. 15ピット柱痕検出状況
- 図版7 06-2-1 調査区 出土遺物
調査区内出土遺物
- 図版8 06-2-2 調査区 出土遺物1
10溝・11溝（第3面）出土遺物
- 図版9 06-2-2 調査区 出土遺物2
第3面遺構出土遺物
- 図版10 06-2-2 調査区 出土遺物3
第1・2・3層出土遺物
- 図版11 06-2-2 調査区 出土遺物4
1. 142井戸（第3面）出土遺物
2. 調査区内出土青磁・白磁
- 図版12 06-2-2 調査区 出土遺物5
1. 第1・2層出土瓦
2. 調査区内出土金属製品
- 図版13 06-2-2 調査区 出土遺物6
調査区内出土木製品
- 図版14 06-2-3 調査区 出土遺物1
第1・1-2・1-3・2層出土遺物
- 図版15 06-2-3 調査区 出土遺物2
1. 2溝（第1-2・3面）出土遺物1
2. 2溝（第1-2・3面）出土遺物2
- 図版16 06-2-3 調査区 出土遺物3
1. 2溝（第1-2・3面）出土遺物3
2. 第1・1-3層出土瓦

第1章 調査の経緯と方法

第1節 発掘調査にいたる経緯

近鉄奈良線は、近鉄の前身である大阪電気軌道の最初の路線として大正3（1914）年に上本町駅～奈良駅間が開通した。以後、1世紀近くもの間、大阪と奈良を結ぶ重要な公共交通機関として今日まで地域の発展に寄与している。

しかし、最近、東大阪市域、とりわけ大阪中央環状線から大阪外環状線の間では、踏切部における交通渋滞の蔓延や鉄道による市街地の分断など、都市の均衡の取れた発展が阻害されるなどの影響が見られるようになってきた。そこで、これらの問題を解消し、周辺地域の新たなまちづくりに向けた都市交通の充実を図るべく、大阪府が都市計画事業による近鉄奈良線連続立体交差化事業として近鉄八戸ノ里駅と瓢箪山駅間の鉄道高架化を推進することとなった。

当事業の区域は瓜生堂遺跡、岩田遺跡の範囲にあたるため、大阪府八尾土木事務所は財団法人大阪府文化財センターへ発掘調査を委託し、平成11（1999）年度から瓜生堂遺跡の調査が開始された。

この発掘調査以後、当センターは八戸ノ里駅から東花園駅の線路北側、東西約2kmの間にて、近鉄奈良線連続立体交差化事業に伴う瓜生堂遺跡、岩田遺跡の発掘調査および、遺跡の範囲を確かめるための確認調査を岩田遺跡隣接地、花園遺跡隣接地として実施してきた。当報告における発掘調査は、平成17年度に花園遺跡隣接地として実施した確認調査の成果をもとに行った。

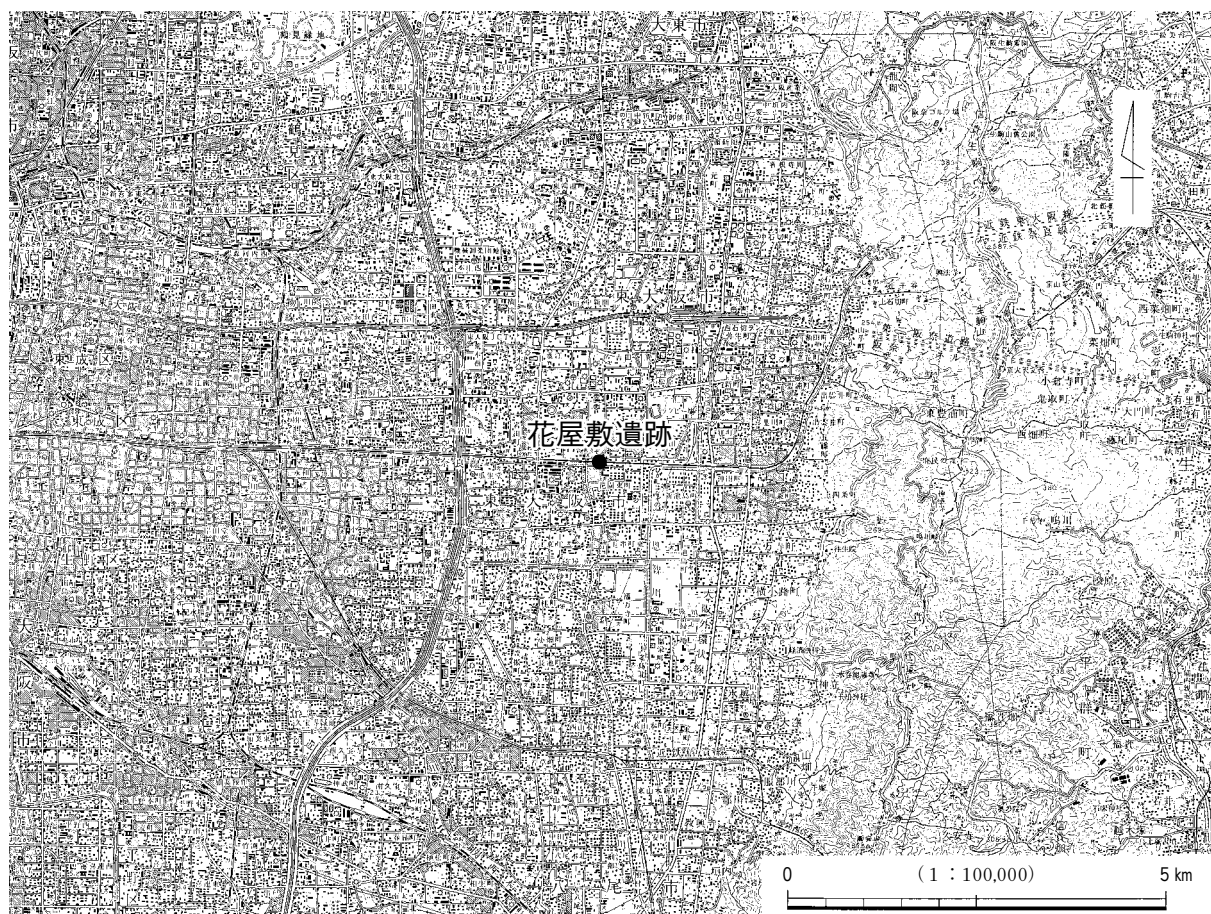


図1 花屋敷遺跡位置図

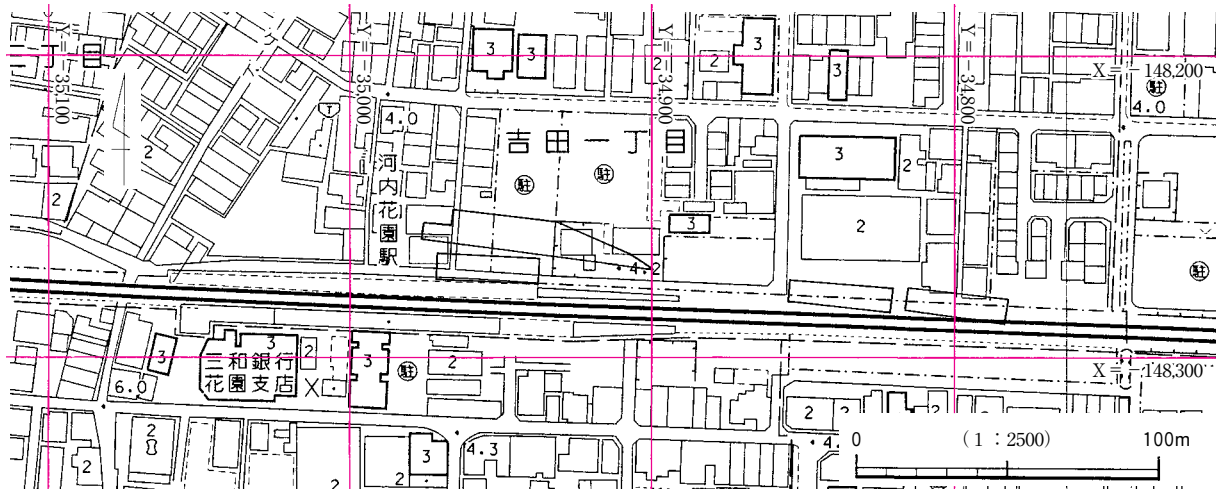


図2 調査区位置図

なお、当地は今まで埋蔵文化財の包蔵地として周知されていなかった。そこで、新たに遺跡名がつけられることになり、東大阪市教育委員会において、当地の字名により花屋敷遺跡と命名された。

当センターは近畿日本鉄道株式会社と「近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡発掘調査」の委託契約を締結し、平成18年5月12日、花屋敷遺跡の調査に着手し、平成18年7月31日に終了した。

遺物整理及び報告書作成は発掘調査終了後も引き続き行い、平成19年3月30日に終了した。

また、当センターでは本調査と同時に、河内花園駅前市街地再開発組合と「河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う花屋敷遺跡発掘調査」(「花屋敷遺跡06-1」)の委託契約を締結し、本書が報告する調査区近接地の発掘調査を行い、同様に整理の後、報告書『花屋敷遺跡』Iを刊行した。

第2節 発掘調査の方法

近鉄奈良線河内花園駅北側駅裏から東側へ、約150mが調査の範囲である。調査は近鉄奈良線の高架工事の橋脚部分に対して行なった。調査区は平面形が長方形をとる3箇所のトレンチに分かれている。

これらのトレンチを当センターのマニュアルにのっとり、東側から順に06-2-1調査区、06-2-2調査区、06-2-3調査区と呼称した。平面の規模は06-2-1調査区が8m×33m、06-2-2調査区が8m×33m、06-2-3調査区が8m×33mである。調査区の配置は図3のとおりである。なお、当報告では調査区ごとに分けて本文の記述を行った。

調査にあたっては、本体工事でそのまま使用することとなる綱矢板の打設を四周に行った。それに続き、現地表から1.0m前後の盛り土及び近世の耕作土にあたる部分を、機械によって掘削した。機械掘削終了後は各調査区の設定深度をもとに、包含層、遺構面に応じて、人力掘削を行った。

調査地全体の土の堆積状況を把握するためのアゼは、調査区の幅が狭いこともあり、南側の東西方向に設け、それ以外は必要に応じて設定することとした。

測量については、同時に平行して調査した、河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う花屋敷遺跡発掘調査で打設した3級基準点を利用し、調査区場内に4級基準点を設けた。これらの基準点をもとに、標定点測量を行い、数回のクレーン撮影と高所作業車による撮影を行った。測量の基準は世界測地系によった。また、航空測量以外にも必要に応じてこれらの基準点をもとに平板などの測量作業を行った。

遺物の取り上げの際の地区名称は、国土座標系を基に作成した当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に明記された地区割りの名称を使用している。

遺構番号は現地調査の際に付与した番号をそのまま使用している。遺構番号の付け方は凡例に示したとおりである。

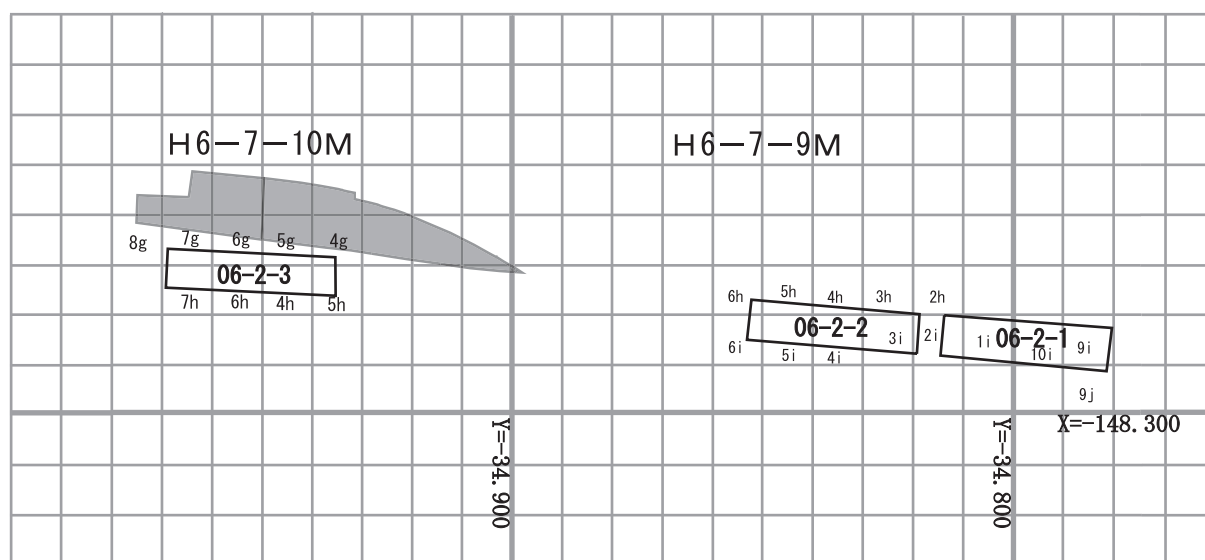


図3 各調査区地区割図 (S = 1/1500)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

花屋敷遺跡は大阪府東部、東大阪市のほぼ中央部に位置する吉田に所在する。

当遺跡は平成11年度から開始された当センターによる近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業に伴う確認調査によって平成17年に新たに周知された。

埋蔵文化財包蔵地の密度が比較的高い東大阪市域ではあるが、市の東部、生駒山地西麓に展開する遺跡群と、瓜生堂遺跡はじめ市の中心部やや西寄りに位置する、通称瓜生堂遺跡群の間に挟まれた当地域は、遺跡の空白地帯となっていた。それが今回少し大仰に言うならば、ようやく地域史に寄与する考古学的な資料を得ることができたといえよう。

当遺跡の所在する河内平野は、縄文海進によって最大となった河内湾が、旧大和川や旧淀川の水系による土砂の運搬、堆積によりしだいに陸化が進み、河内潟、河内湖を経て平野が形成されたことは良く知られている。最近の研究では、当遺跡周辺は河内平野の中でも、特に沖積平野面三角州帯Ibと地形分類され、主に弥生時代後期末から古墳時代初頭に堆積した地域と考えられている。

遺跡は近畿日本鉄道奈良線河内花園駅の北側に隣接し、商店や住宅の立ち並ぶ河内花園駅前の市街地として活況を呈している。現地表面は標高でT.P.+4.0m前後を測り、平坦な地形である。

遺跡の西端部は旧大和川の流路の一つである玉串川が、吉田川と菱江川とに分岐する箇所にあたる。今は両河川とも小さな用水路や暗渠に姿を変え、宝永元（1704）年の大和川の付け替え以前に河内平野に洪水を幾度となくもたらした大河としての面影はないが、これらの部位は旧河道の跡及び自然堤防として、現在においても周辺部より1m～2m程高くなっている。

第2節 歴史的環境

周辺の遺跡に目を向けると、弥生時代から古墳時代前期にかけての著名な遺跡を多く認めることができる。花屋敷遺跡の西約2.0kmには、マウンドを残す弥生時代中期の良好な方形周溝墓が検出されたことで有名な瓜生堂遺跡、その東側には隣接するように位置する、弥生時代前期の集落・水田遺構が検出された若江・若江北遺跡が存在する。

また、当遺跡の東南約1.7kmには、弥生時代前期から近現代まで、幾重にも水田遺構がおり重なることで有名な池島・福万寺遺跡がある。

真北約0.6kmには弥生時代前期の稲葉遺跡もあり、弥生時代に存在した河内潟やそこに注ぐ河川周辺を生活の場とした当時の人々の足跡をたどることができる。

縄文時代前期の海進によってできた河内湾は、そこへ流れ込む河川による土砂の堆積で次第に埋まり、安定した平野へと変遷を遂げることとなる。縄文時代は日下遺跡・神並遺跡など、生駒山地西麓域が人々の生活の拠点であったが、この平野部へ生活域や生産域を展開させるようになり、弥生時代中期の遺跡が増加することになる。

弥生時代の後期には洪水の影響などによりこれらの遺跡は縮小し、古墳時代を迎える。古墳時代の集落は洪水を避けるべく、河川の自然堤防上に展開する様相を見せる。

意岐部遺跡からは古墳時代後期の遺物が出土しており、西岩田遺跡では、古墳時代初めから後期の集

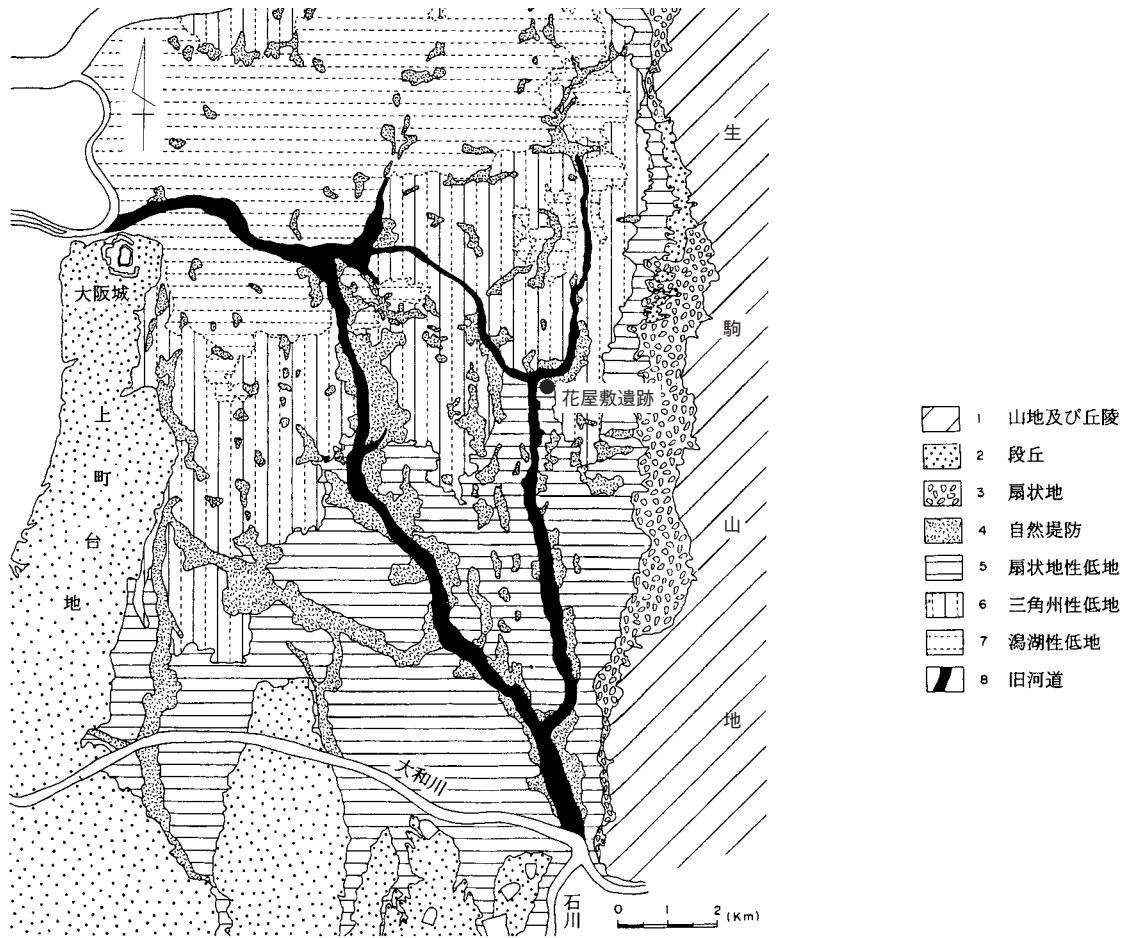


図4 河内低地地形分類図

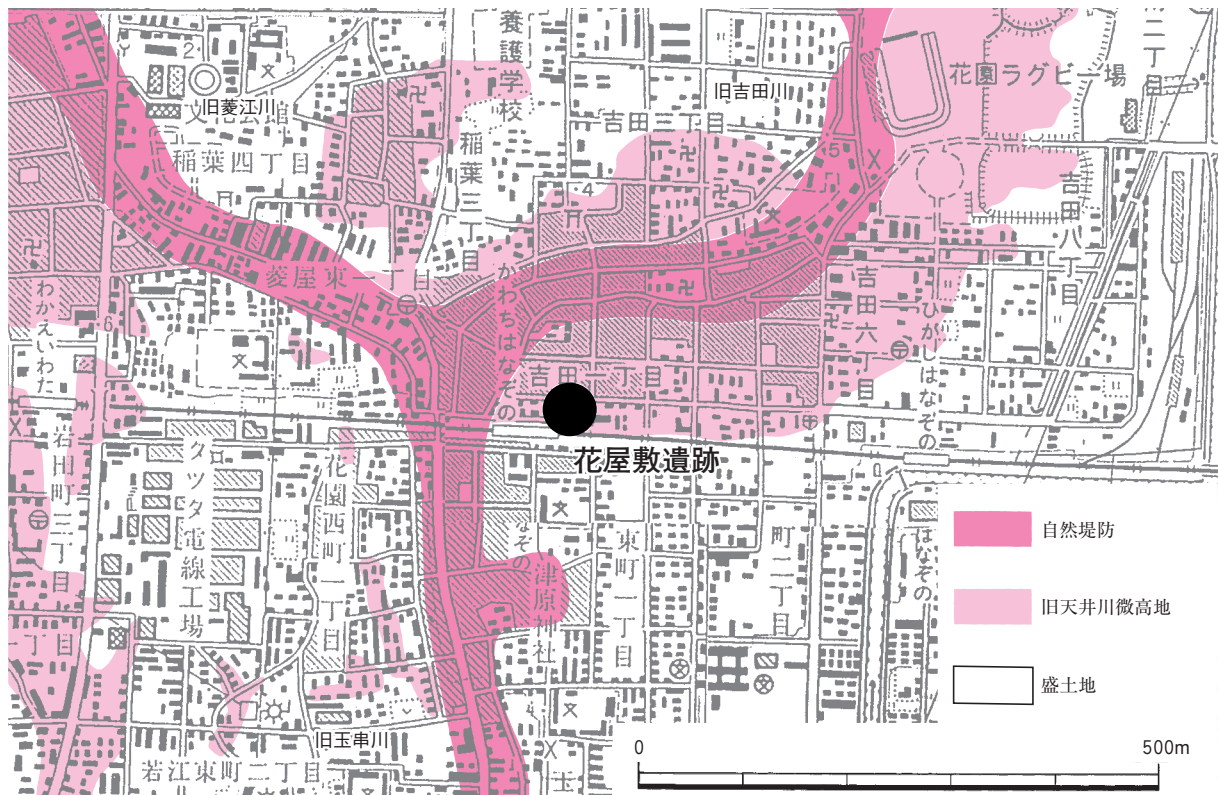
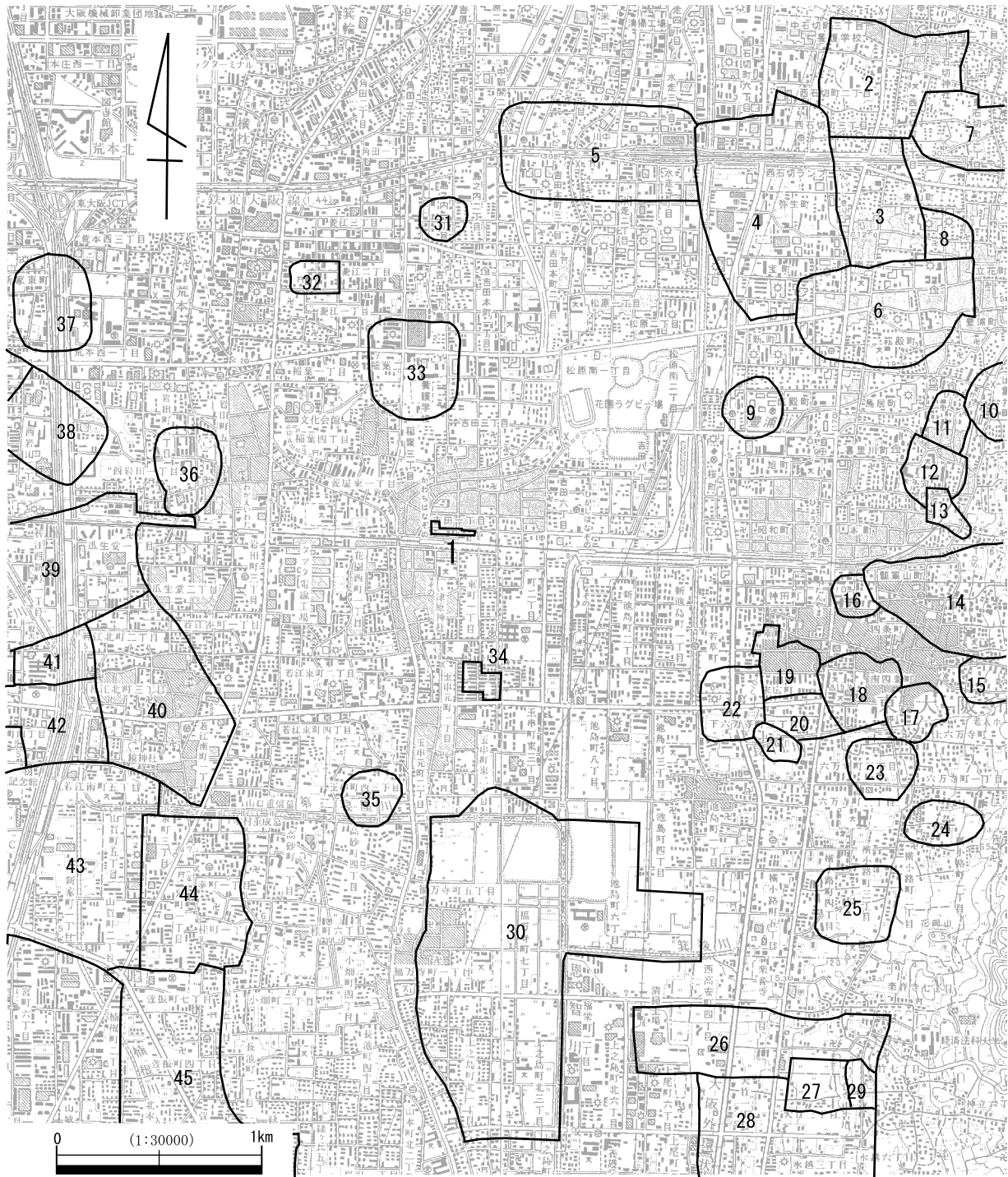


図5 花屋敷遺跡周辺土地条件図



- | | | | | | | | |
|----|--------|----|--------|----|-------------|----|--------|
| 1 | 花屋敷遺跡 | 13 | 河内寺跡 | 25 | 馬場川遺跡 | 37 | 新家遺跡 |
| 2 | 植附遺跡 | 14 | 山畑古墳群 | 26 | 大竹西遺跡 | 38 | 西岩田遺跡 |
| 3 | 西ノ辻遺跡 | 15 | 花草山古墳群 | 27 | 心合寺跡 | 39 | 瓜生堂遺跡 |
| 4 | 鬼虎川遺跡 | 16 | 市尻遺跡 | 28 | 太田川遺跡 | 40 | 若江遺跡 |
| 5 | 水走遺跡 | 17 | 上六万寺遺跡 | 29 | [国]史 心合寺山古墳 | 41 | 巨摩廃寺遺跡 |
| 6 | 鬼塚遺跡 | 18 | 縄手遺跡 | 30 | 池島・福万寺遺跡 | 42 | 若江北遺跡 |
| 7 | 神並遺跡 | 19 | 五合田遺跡 | 31 | 吉田遺跡 | 43 | 山賀遺跡 |
| 8 | 瀬田廃寺 | 20 | 段上遺跡 | 32 | 菱江寺跡 | 44 | 西郡廃寺遺跡 |
| 9 | 鶴立遺跡 | 21 | 下六万寺遺跡 | 33 | 稲葉遺跡 | 45 | 萱振遺跡 |
| 10 | 出雲井遺跡群 | 22 | 北鳥池遺跡 | 34 | 花園遺跡 | | |
| 11 | 狐塚遺跡 | 23 | 船山遺跡 | 35 | 玉櫛遺跡 | | |
| 12 | 皿池遺跡 | 24 | 半堂遺跡 | 36 | 岩田遺跡 | | |

図6 花屋敷遺跡周辺遺跡分布図

落を検出している。また、池島・福万寺遺跡においても5世紀から6世紀の集落が調査されている。古墳時代の河内平野部は河川による堆積活動の影響を受け、たえず洪水の危険にさらされ河道の位置も変化するため、居住地、耕作地いずれにおいても、基盤とするには不安定な土地であったようである。そのためか当地周辺の平野部には大型の古墳は築かれず、目立った群集墳も営まれていない。生駒山地西麓において、山畑古墳群、客坊・花草山古墳群のような後期群集墳が、6世紀から7世紀にかけて形成されるのとは対照的である。ただし最近の調査では、平野部においても巨摩廃寺遺跡にて古墳が検出され、人物埴輪・水鳥形埴輪などが出土し、岩田遺跡では円筒埴輪が出土している。また、石田神社境内付近に古墳があったという伝承もあり、埋没古墳の存在を示唆する。今後の調査の進展によって、当地周辺平野部の古墳造営の状況が明らかになる可能性がある。

古代には瓜生堂遺跡の中央部で8世紀を主とした集落跡が、西部や北東部で9世紀以降の集落が確認されている。また、岩田遺跡では8世紀中頃から10世紀にかけての集落が検出されている。当地からは、施釉陶器、製塩土器、円面硯、貨銭、帯金具（巡方）、墨書土器、製塩土器などのほか、唐草文軒平瓦が出土するが、この瓦が遺跡の南東約1kmに位置する若江遺跡の出土瓦に類似することを根拠に、この集落は若江寺あるいは若江遺跡と関係のある官人の居住した集落と考えられている。

若江寺は出土する素弁蓮華文軒丸瓦から、飛鳥時代後期頃の創建と考えられている。周辺では、最も古い寺院である。遺構は確認されていないが、川原寺式に類似する瓦の存在、後の奈良時代の瓦に「足得」「中臣」のスタンプが押された恭仁京式文字瓦、平城京、恭仁京との同範の軒平瓦の存在により、中央政権との強力な関係を示唆する向きもある。平安時代には宇治平等院の末寺となっている。

このように、古代の若江周辺は当地の政治的な中核を担ったと注目されており、以降中世の若江城に引き継がれて行く。他に、主な古代寺院には生駒西麓にて、河内の郡寺と考えられる河内寺、物部氏の氏寺とも考えられる法通寺がある。

古代後半から中世に目を向けると、花屋敷遺跡の西へ約1.2kmに位置する瓜生堂遺跡の東端では13世紀を最盛期とする12世紀から15世紀にかけての集落跡が見つまっている。その瓜生堂遺跡の北に接する岩田遺跡においても、12世紀前半から15世紀中頃まで存続したと考えられる集落跡を検出している。当集落は13世紀の中・後半頃から溝で区画されはじめるという。ただし、瓜生堂遺跡と岩田遺跡の中世集落は隣接するが、区画溝の変遷など細部において齟齬をきたすきらいがあり、今後の検討を要する。

その他周辺では、12世紀後半から15世紀にかけての集落が、巨摩廃寺遺跡にて見つまっている。

水走遺跡は、花屋敷遺跡の北東約2.0kmに位置する。旧玉串川の支流、旧吉田川沿いの遺跡である。発掘された旧吉田川では、12世紀後半の堤防、13世紀の祭祀遺構、およびそれを管理したであろう人々の集落が見つまっている。当集落は中世前期において中河内地方一円に力を持った水走氏みずはしが、開発に係わったと考えられている遺跡である。同氏は中臣氏の末裔である平岡連を祖とし、周辺の在地の武士団を束ねた氏族である。河内一宮平（枚）岡神社の神職を兼ね、近在の観音寺の別当となった。また皇領である大江御厨の管理と警護も受け持ち、当地域の社寺に影響を与え、旧大和川の支流の河川や深野池などの湖沼における水運権や漁業権を掌握した有力な在地領主であった。南北朝時代の内乱で楠木正成に従い南朝方となるが後に降伏し、河内国守護となった畠山氏の臣下として中世を生き延びている。

生駒山西麓部には、鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡・鬼塚遺跡・神並遺跡など中世の集落跡が集中する。当地は南北に走る東高野街道や暗峠ほか、奈良・大坂を結ぶ諸街道の交差する地で、先の水走遺跡の地と同様、旧大和川分流や深野池を利用した水上交通の発達した場所でもあったと考えられ、おのずと集落

が形成され、発展していったものと考えられる。これらの遺跡はほぼ連続する遺跡群であり、奈良・平安時代から集落が認められる地域である。これらの地域では神並遺跡・西ノ辻遺跡の地を中心に集落が断続的に展開し、場所を移動させながら中世さらに一部は近世へ続くものと思われる。

南北朝の内乱をへて、畠山氏は守護職として河内に権勢を振るうことになるが、河内国支配における政治的な拠点として築かれたのが若江城である。14世紀末、畠山義深もしくは畠山基国が守護代遊佐氏に築かせた城とされるが、詳細は不明である。しばらくは河内国守護所として機能するが、文明9(1477)年に遊佐氏は畠山義就により同城を追放され、河内国守護所も義就により高屋城へ移される。

さらに空白期間を経て、織田信長は永禄11(1568)年に入洛の後、河内国北半国とともに同城を三好義継に与えたものの、天正元(1573)年には義継を滅ぼし、新たに義継の家臣らに城を預けている。さらに信長は大坂の石山本願寺攻めの拠点として当城を用いている。本願寺との和解後はその役目を終え、天正8年頃に廃城となったようである。

発掘調査では、数地点で信長時代であろうと思われる城の関係遺構として土塁・堀跡・井戸・礎石建物などが見ついている。堀の中には敵兵の進入を防ぐ逆茂木を配する箇所も検出されている。若江城の廃絶後、中河内の中心は八尾に移り、当地の政治的な求心性は弱まることとなる。

江戸時代に入ると、玉串川など旧大和川の分流を利用した水運が発達し、剣先船による物資の運搬が頻繁に行われた。当花屋敷遺跡の北に接していた近世の旧吉田村は、吉田川を挟み南北に分かれて位置する村であるが、市場という字名が残り、古い町並みの中に、現在も大念仏寺の末寺である西昌寺や春日社がある。また、遺跡の0.3km程南に位置する玉串の地には式内社津原神社が鎮座するが、当地も近世に旧市場村として登場している。これらの地が河川を利用した物資の集積地として繁栄したことを容易に推察できる。もっとも玉串周辺は平安時代には宇治平等院の領地、玉串庄であった可能性が高く、鎌倉時代には楠木氏が活躍する拠点の一つであったと考えられている。当地は、古代・中世から交通の要衝で商業も盛んであったことが窺える。

近代に入ると、大正3(1914)年には近鉄奈良線が開通する。花屋敷遺跡の地も花園駅の駅前として商店街が発達し今日に至るが、今後も近鉄奈良線の高架及びそれに伴う再開発により、新たな発展を遂げていこうとしている。

※河内平野の形成過程および上述の遺跡についての解説・報告は枚挙に暇なく、下記の参考文献のほか各遺跡に関する発掘調査報告書などを参照した。

【参考文献】

高橋学1991「河内平野の地形環境分析Ⅰ－河内平野の環境分析に関する基礎考察－」『池島・福万寺遺跡発掘調査概報』－89－1～6 調査区の概要－ 財団法人大阪文化財センター

原秀禎1987「河内低地の地形分類」『河内平野遺跡群の動態』Ⅰ 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－プロローグ編－ 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

布施市史編纂委員会編1962『布施市史』第1巻 布施市役所

東大阪市教育委員会2003『東大阪市の歴史と文化財』－わが街再発見－改訂版

藤井直正1983『東大阪の歴史』松籟社

福永信雄2006『若江寺・若江集落と若江城』(1617会2006年10月例会資料)

第3章 基本層序

06-2-1 調査区

第0層：現地表面（第0面とした）は、T.P.+約3.9m前後を測る。第0層は近現代の盛土および攪乱で形成される、現地表面の基盤となる層である。厚みは0.5mである。

第1層：第0層を除去後の層、T.P.+2.8～3.4m前後に堆積し、厚みは0.6m前後である。灰色7.5YR4/1シルト混粘土で、上面を第1面とする。廃土より近世の磁器（染付）の細片が出土した。

第2層：T.P.+2.1～2.8m前後に堆積し、厚みは0.7m前後である。褐灰色7.5YR4/2シルト混粘土で、調査区東半では粗砂が混じる。上面を第2面とする。廃土には遺物はほとんど含まず、中世の青磁の細片が出土した。

第3層：第2層を除去した面が第3面である。当面では溝などの遺構および東半部より東へ広がる16落ち込みが検出された。以下の第4層の項にて記述するが、この16落ち込みの埋土の上層が、第3層である。T.P.+2.05～2.10m前後に堆積し、厚みは0.05m程度を測る。オリーブ黒色5Y3/1細砂混シルトで形成される。なお、当落ち込みの埋土直上の面も第3面になるが、当面から切り込む遺構は確認していない。

第4層：調査区西半分では第3面以下は遺物、遺構が認められなかった。東側半分全体に広がる16落ち込みの埋土をもって調査、掘削対象となる第3層以下の土とした。当層は大きく2層に分かれた。上層が上述の第3層であり、下層が第4層である。第4層では、層の上下の面ともに遺構が確認されている。上の面が第4面、下の面が第5面である。T.P.+2.0～2.05m前後に堆積し、厚みは0.05m前後である。暗緑灰色10GY4/1細砂混シルトで形成される。

第5層：当調査区の最終遺構面（第5面）の基盤となる層である。無遺物層である。オリーブ灰色2.5GY3/1シルト混粘土である。

06-2-2 調査区

第0層：現地表面はT.P.+約4.2mを測り、06-2-1調査区よりやや高い。第0層は近現代の盛土および攪乱で形成される、現地表面の基盤となる層である。厚みは0.6～0.9mである。

第1層：第0層を除去後の層で、T.P.+2.6～3.5m前後に堆積する。厚み約0.4～0.9mを測る。黒色7.5Y2/1細砂混シルトである。上面を第1面としたが、調査区西端では近代の線路等の鉄道施設敷設による攪乱が、第2層の中位まで及ぶ状況であり、全面的に削平を受けていることがわかった。

第2層：T.P.+2.4～2.6m前後に堆積する。厚み0.2～0.4m前後を測る。緑灰色7.5GY6/1粘土混シルトである。上面を第2面とする。

第3層：T.P.+2.2～2.6m前後に堆積する。厚み0.2m前後を測る。暗緑灰色10GY3/1細砂混シルトである。上面を第3面とする。当面からは中世の溝、土坑、ピットなどを多数検出している。

第4層：T.P.+2.1～2.4m前後に堆積する。厚み0.1～0.3mを測る。その上面を第4面とする。暗緑灰色7.5GY3/1シルトである。中世の溝、土坑、ピットなどを検出した。

第5層以下は無遺物層であり、暗緑灰色7.5GY3/1粘土混シルト、暗緑灰色10GY3/1粘土混シルトの順で堆積する。なお06-2-2調査区において第0層、第1層を確認したのは部分的である。そのため破線部分は、それぞれ隣り合った柱状図の中間の計測値を採用している。

06-2-3 調査区

第0層：現地表面はT.P.+約2.9～4.2m前後を測る。06-2-2調査区より西に向かってやや下降する。

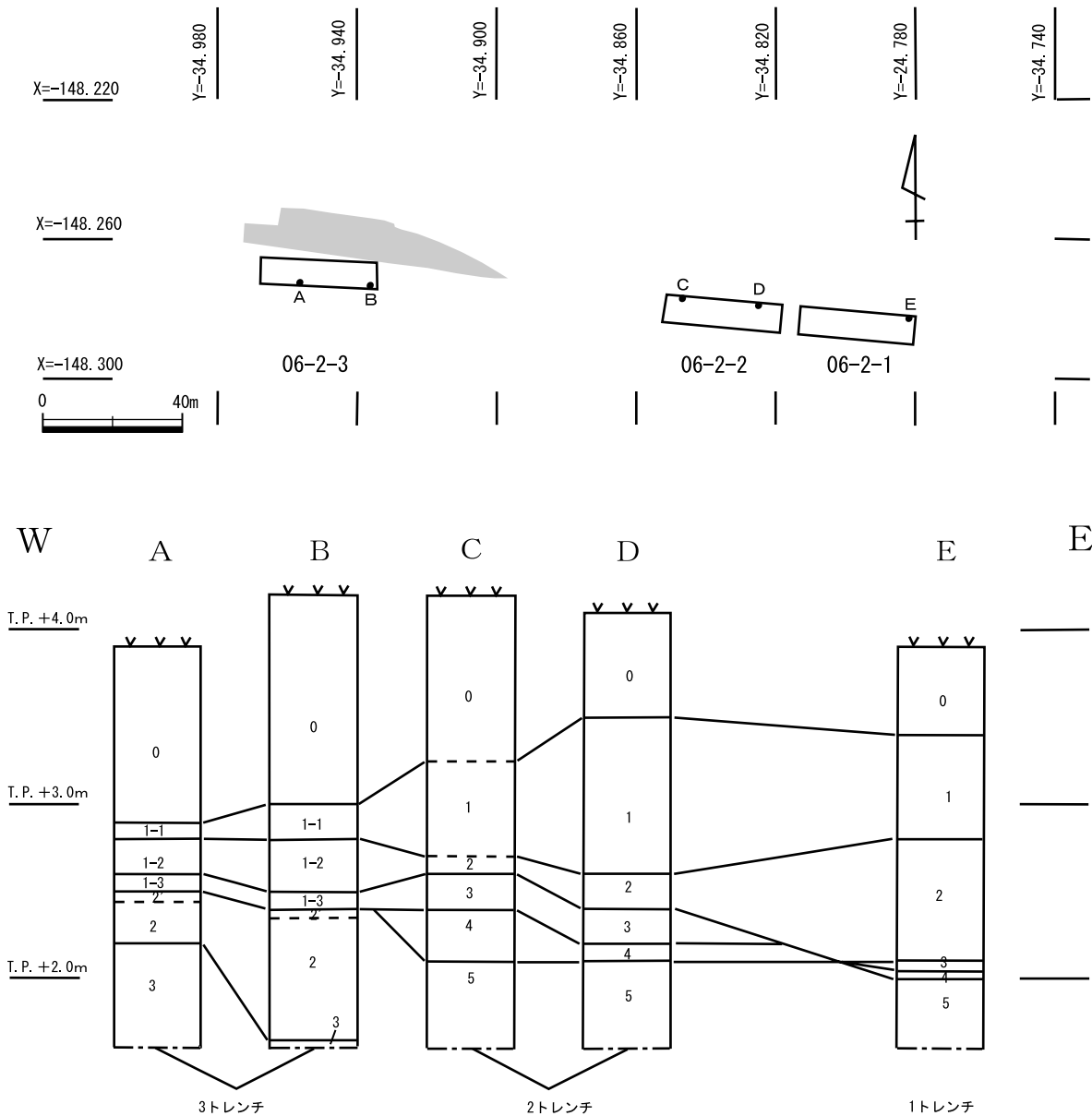


図7 基本層序柱状模式図

現地表面からT.P.+3.0mまでは近現代の産業廃棄物が堆積する攪乱（第0層）を被っている。

第1-1層：第0層を除去後の層で、T.P.+2.8~3.0m前後に堆積する。厚み0.1~0.2m前後を測る。暗灰色7.5Y3/1粗砂が堆積する。この上面を第1-1面とする。

第1-2層：T.P.+2.5~2.8m前後に堆積する。厚み0.2~0.3mを測る。灰オリーブ色7.5Y4/1細~粗砂他以形成される。その上面を第1-2面とする。

第1-3層：T.P.+2.4~2.6m前後に堆積する。厚み0.1mを測る。灰色5Y4/1粗砂他以形成される。その上面を第1-3面とする。当面からは中世の溝、土坑、ピットなどを多数検出している。

第2'層：2層上部において第1-3層の攪拌層が存在する。第2'層とした。数点の遺物が出土した。

第2層：T.P.+1.75~2.5m前後に堆積する。東に向かって急激に層厚が増す。7.5Y6/1灰色細砂で形成される。厚み0.3~0.7cmを測る。その上面を第2面とする。無遺物層である。

第3層：上面はT.P.+1.75~2.2mを測り、東に向かって低くなる。5Y5/2灰オリーブ色シルト~粗砂混シルト他以形成される。無遺物層である。第2・第3層は砂で構成されており、洪水砂層と思われる。

第4章 調査の成果

遺構と遺物

06-2-1 調査区

1. 第1層、第2層

第1層には遺物をほとんど含まない。廃土からは染付など近世以降の遺物が若干出土しているのみである。6は国産の染付である。残幅が3cm程度の小片である。外面には草花文を描く。呉須は濃い青紫色を呈する。18世紀以降の波佐見焼碗であろう。第2層も同じく遺物をほとんど含まない。7の陶器甕は、残高6.6cm、口縁端部を欠いているが、38cm程度の口縁部を有すると思われる。体部には自然釉がかかり、ゴマ状に白みを帯びている。胎土はやや粗い。中世の信楽焼であろう。第1、第2層の直上を各々第1、第2面としたが、いずれも遺構は確認されていない。

2. 第3面〔図8 図版1〕

第3面はT.P.+2.1~2.3mを測る。主な遺構は南北に走る溝2条と、落ち込みである。

1溝〔図9 図版2〕

当調査区のちょうど中央を南北にまっすぐ走る溝である。幅1.7m、長さ8.0m、深さ0.3mを測る。溝の南北の端は両側ともに調査区外へ伸びる。埋土にはオリブ黒色7.5Y3/1シルト混粘土が入る。埋土が粒子の粗い砂質を中心に構成されることから考え、一挙に埋まったものと思われる。遺物は出土していない。この溝はもう1条の14溝とは異なり、耕作に対する用水の機能を有する溝と考えたい。

14溝〔図9・10 図版2〕

当調査区の西端を南北に走る溝である。溝の南北の端は両側ともに調査区外へ伸びる。残幅3.0m、長さ8.0m、深さ0.5mを測る。

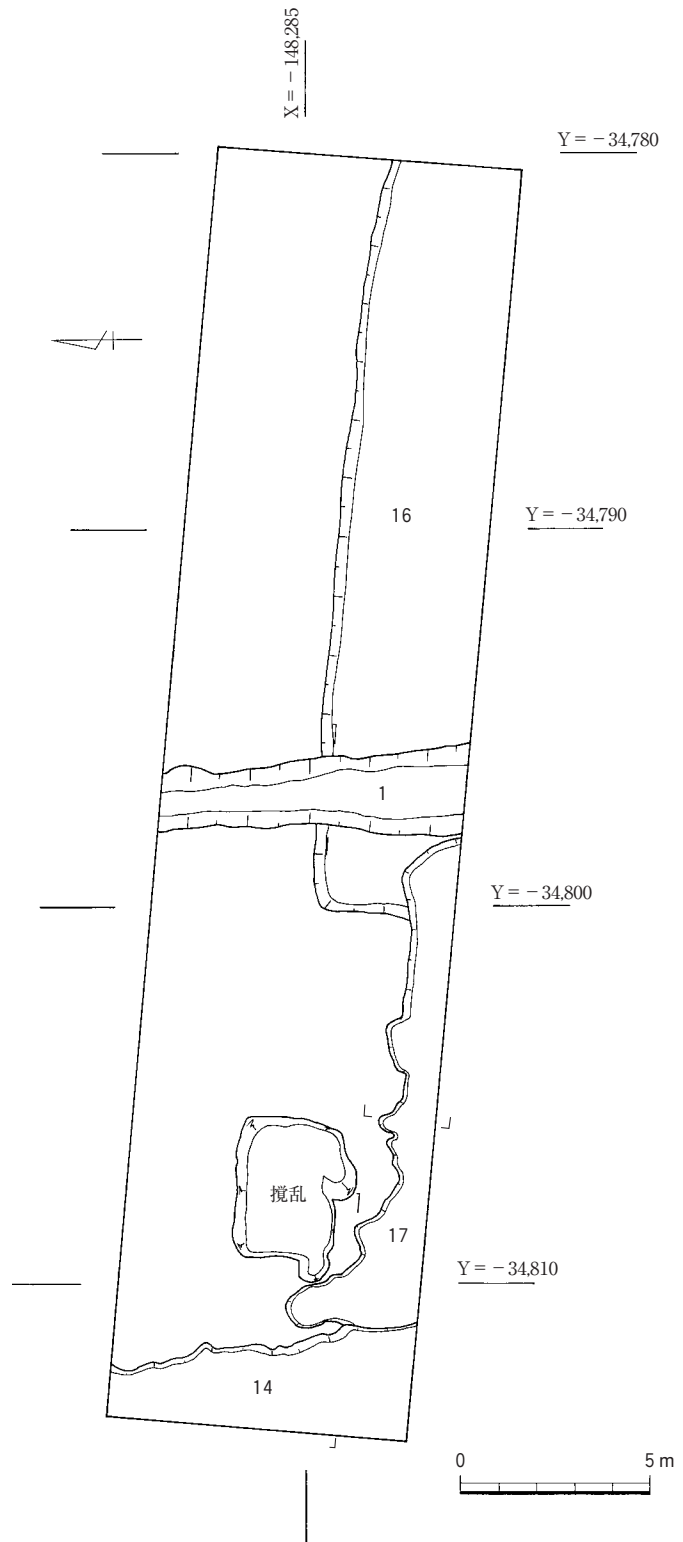


図8 06-2-1 調査区第3面平面図

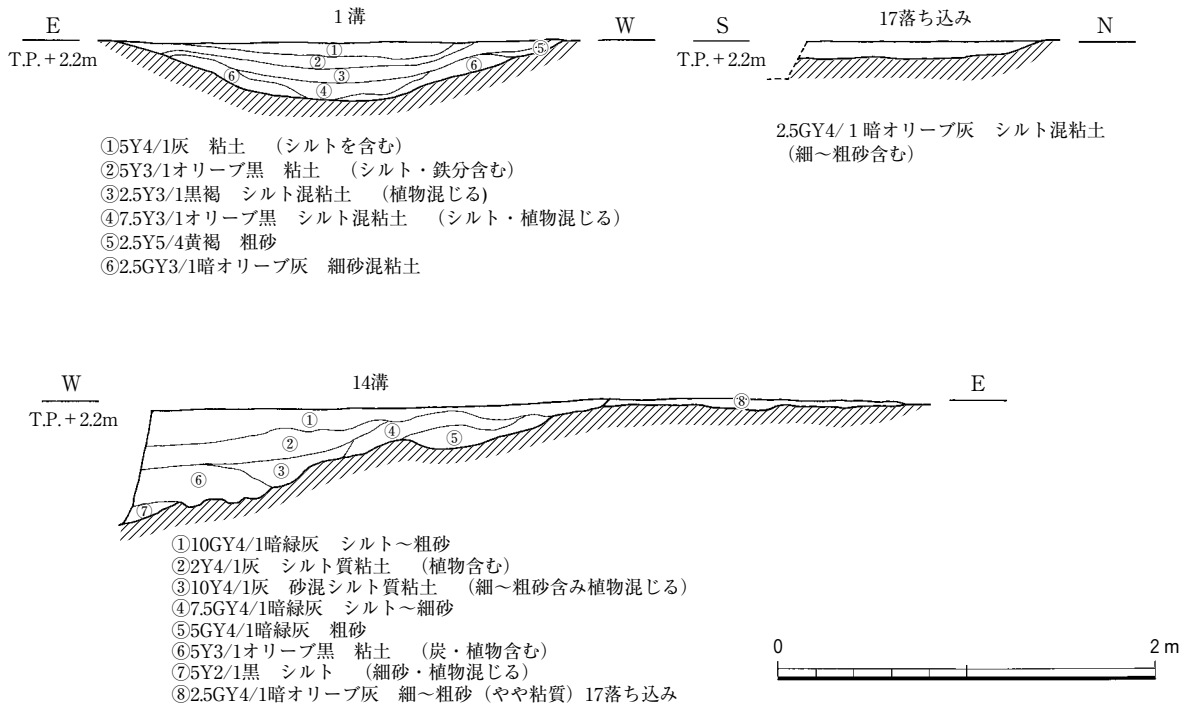


図9 第3面遺構断面図



図10 14溝漆器椀出土状況

西側の肩は大半が調査区外にあるか、もしくは側溝により削られている。埋土にはオリーブ黒色5Y3/1粘土など、粘性の強い土が入る。強い流水のもとでの堆積ではなかったと思われる

本遺構からは丸瓦、平瓦、漆器椀、下駄、瓦質羽釜、獣骨など数は少ないが多様な遺物が出土した。9の漆器椀は14溝の北端で出土した。ほぼ溝の底で伏せられたような形で見つかった。口径12.4cm、器高4.6cmを測る。土圧により轆状に歪んでいたが、7割程が遺存していた。内外面ともに黒色の漆で仕上げられており、赤色漆にて草文を外面部に描く。表面の漆の剥落が激しく、2箇所のみ認められるが、図柄の配置から考え、4方向に描かれたものと思われる。材質はトチノキである。その他の木製品として、10の下駄がある。残長23.2cm、幅8.0cmである。一木の連歯下駄である。中線をわずかに施し、歯部を形成しているが、歯の高さは1cmにも満たない。三分の一程度が欠損しているものと思われる。材質はスギである。

瓦は4の平瓦、5の丸瓦の破片が出土した。平瓦、丸瓦ともに凹面に布目が見られる。丸瓦は掛瓦である。いずれの瓦も中世の所産であろう。これらの出土遺物だけで詳細は確定しがたいが、15世紀頃の溝と考えられる。

17落ち込み〔図9〕

当調査区の南西部に広がる1溝と14溝に接するような形で存在する。調査区外の南側に広がると考えられる。長さ13.0m、残幅3.1m、深さ0.05mである。当初、この部分は暗オリーブ灰色2.5GY4/1に変色していたので遺構と考え掘削・記録したが、遺物は出土せず、土質もベースを構成する細砂混シルトとさほど変わらないことから、現状では遺構と解釈するのは差し控えたい。

16落ち込み（第3層、第4層）〔図8・12 図版1〕

当調査区の中央から東半分全域を占める。西からなだらかに東へ低く傾斜する。調査の当初は落ち込みと考えたが、範囲も広く、人為的な掘削による遺構ではないことや、当調査区の西半分の地域では第3面以下からは遺物、遺構面の存在が認められないことを考慮し、この部位より下の土層が新たな基本堆積層であると解釈しなおした。そこで、この16落ち込み上層の埋土オリーブ黒色5Y3/1細砂混シルトを当調査区における第3層と呼称し、この層を除去した面を第4面とすることにした。

第3層から出土した遺物の数は少ないが、ここに図化した。〔図13、図版7〕1・2の土師器皿、3の土師質羽釜、8の荷札状木製品と常滑焼甕などが出土した。土器類は全て細片である。1の口径は8.0cmと推定したが、全体にひずみが激しい。2は口縁部を少し上方につまんだ後、ヨコナデで仕上げている。いずれもなでで仕上げている。色調は黄色系である。1・2共に中世でもやや新しい時期のものか。3は灰白色2.5Y8/2を呈している。大和型である。口縁部は27.0cmを測る。なでで仕上げている。口縁部のみで鏝は欠落している。

8は木製品である。圭頭形に尖らせ、木筒の形態を呈している。厚みはほぼ一定であり、表面は平たく加工されているが、文字は記されていない。別用途の製品である可能性もあるが、各部位が形よく切断され、削られているので、荷札状木製品と命名した。材質はコウヤマキである。

3. 第4面〔図11左 図版1〕

第4面はT.P.+2.1m前後を測る。遺構はわずかな痕跡を残す18溝だけである。

18溝〔図12〕

調査区のちょうど中央に位置する。16落ち込みが埋没した後に掘削された南北方向の小溝である。長

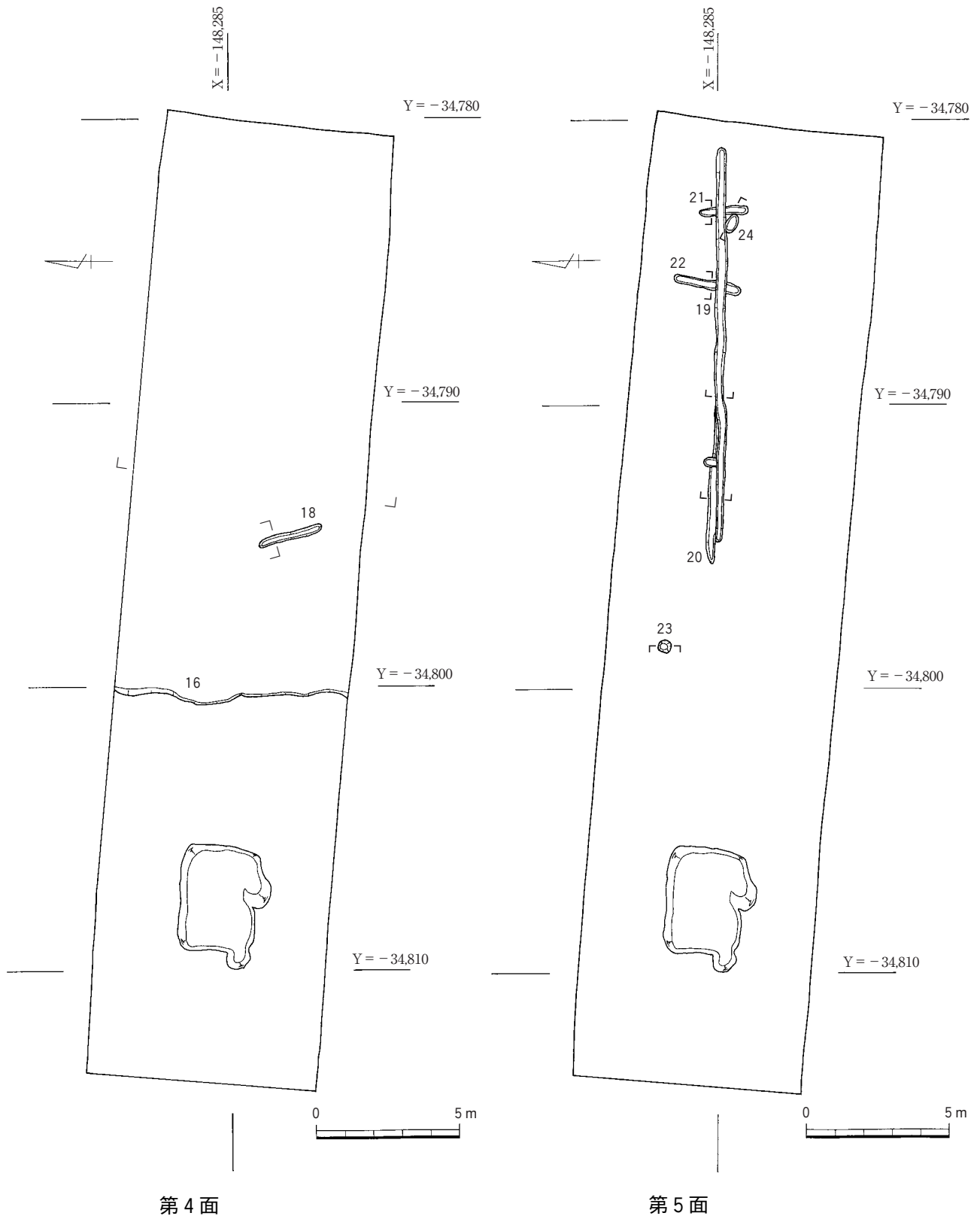
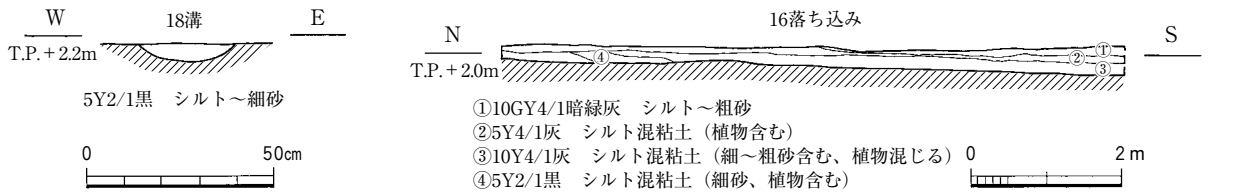
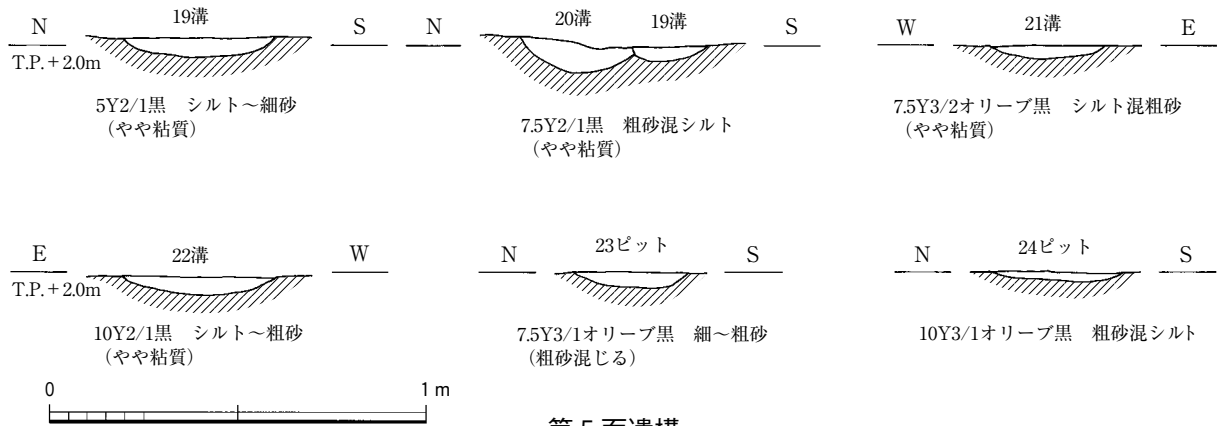


図11 06-2-1 調査区第4・5面平面図



第4面遺構



第5面遺構

図12 第4・5面遺構断面図

さ2.3m、幅0.25mである。非常に浅く、埋土には黒色5Y2/1シルト～細砂が入る。ほとんど痕跡程度で検出した。上部は削平を受けたと思われる。遺物は出土していない。

4. 第5面〔図11右 図版1〕

16落ち込みの下層を除去した面である。T.P.+2.0m前後を測る。上述の通り遺構はいずれも16落ち込み（第4層）の底面にあたる部分から検出している。この部位を第4層の下、第5面としてとらえた。なお、当面の基盤層である第5層は西半分の第3面以下の層と同じく、無遺物層である。

19～22溝〔図12 図版1〕

19・20溝は東西をほぼ正方位に走る細長い溝である。19溝は長さ13.6m、幅0.4m、深さ0.04m、埋土には黒色5Y2/1シルト～細砂が入る。20溝は残長5.0m、残幅0.3m、深さ0.07mを測る。埋土は黒色7.5Y2/1シルト～粗砂が入る。両溝はほぼ重なり、20溝は19溝に切られている。20溝を19溝に掘りかえたのであろう。21・22溝は南北方向に軸を取る短小な溝である。これらの溝は19溝と十字に交差し、切られる形である。21溝は長さ2.4m、幅0.3m、深さ0.04mを測る。埋土はオリーブ黒色7.5Y3/2細砂～粗砂、22は長さ1.7m、幅0.3m、深さ0.04mを測る。埋土は黒色10Y2/1シルト～粗砂である。ともに遺物は出土していない。

23・24ピット〔図12 図版1〕

23ピットは調査区の東に位置する。直径0.4m、深さ0.05m、埋土にはオリーブ黒色7.5Y3/1細砂～粗砂が入る。24ピットは調査区の中央よりやや西側に位置する。直径0.3m、深さ0.04m、埋土には10Y3/1

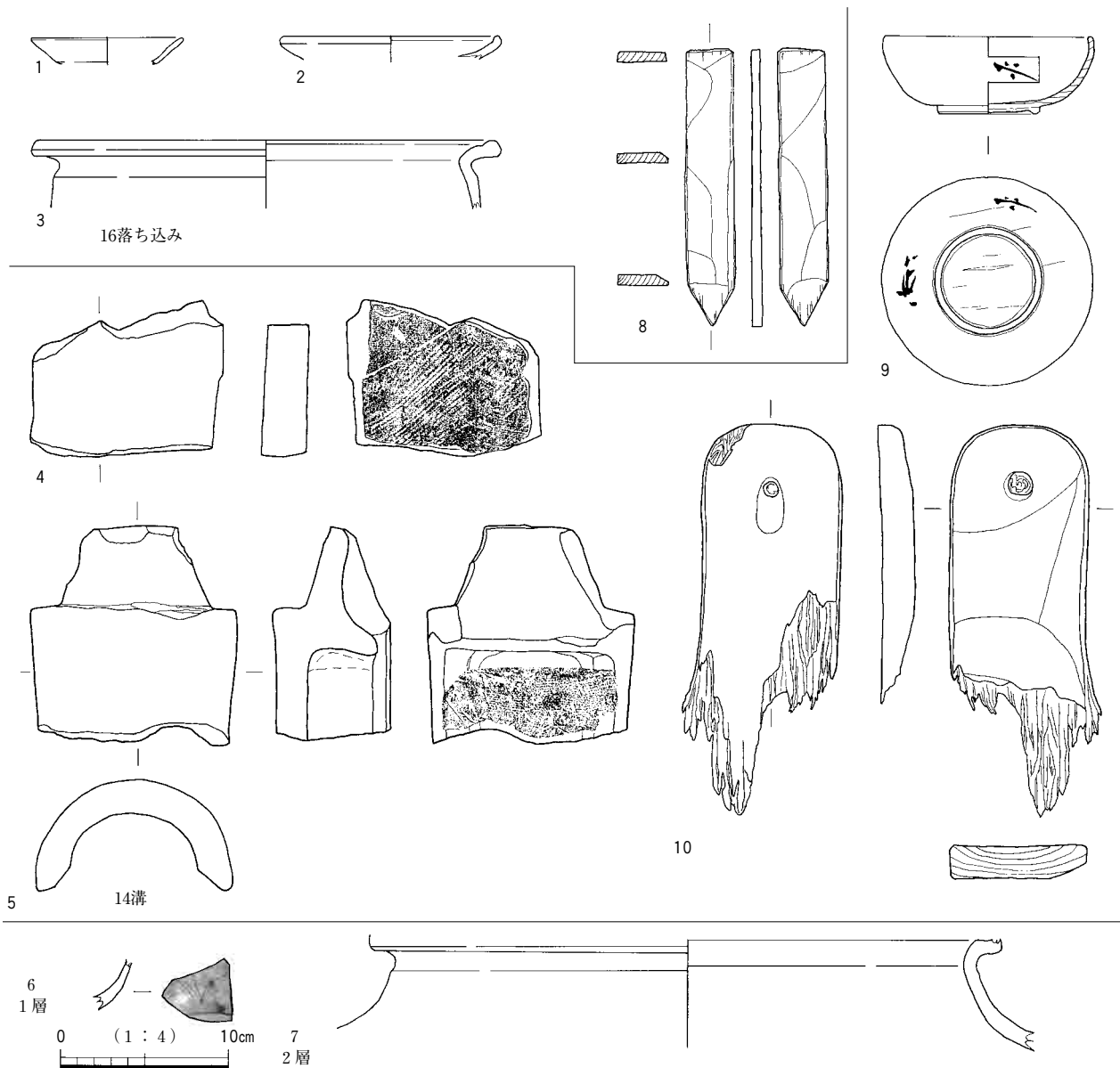


図13 06-2-1 調査区出土遺物

オリブ黒色シルト～粗砂が入る。ともに遺物は出土していない。

5. 小結

当調査区では第3面以降で遺構を検出した。西端を東西に走る14溝は若干ではあるが、14～15世紀代の遺物を含んでいる。他の調査区においても検出されている、居住地を区画する溝の一つと考えられる。なお、14溝より東側は遺構が希薄である。

中央部分を南北に走る1溝は、埋土の状況からこれらの区画溝とは性格を異にし、耕作地の灌漑に使用された用水施設と考えられる。遺物が出土していないので確定はし難いが、時期的にも他の遺構よりやや新しいと思われる。

第4面、第5面ともに顕著な遺構は認められず、19・20溝および、22・23ピットは耕作に係る遺構であると考えられる。

06-2-2 調査区

1. 第1層、第2層

近現代の遺物とともに15世紀代の土師器皿、羽釜、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦などの破片、および貨銭（元符通宝：1098年初鑄）が1点出土している。

第2層では調査区西半は少量の土師器が、東半では14～15世紀代の土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦が出土した。

2. 第3面〔図14 図版3〕

第3面はT.P.+2.4～2.6mを測る。西に向かって高くなる。当遺構面において3条の溝を検出した。これらの溝に挟まれるように、ピット・土坑を約80基検出した。

調査区東端で南北走向の溝3条(11～13溝)と、北端において東西方向に伸びる溝1条(10溝)を検出した。西端において検出した南北走向の20溝は、前述した溝とともに集落の区画溝であったと思われる。第4面における30流路に重なる形で検出した。これについては30流路の項でふれたい。

この他掘立柱建物3棟、杭列、浅い方形もしくは不定形な土坑を検出した。これらの土坑は大半が深さ0.2m前後のものであり、埋土もほぼ単一層であった。耕作に伴う土取り穴と考えられる。

なお、後項にてふれる142・148井戸も当面にて検出した。断面観察や出土遺物などから、他の遺構群に比して最も新しい時期の遺構であると判断した。

06-2-1 調査区と同様、第3面直上まで機械掘削にて対処した。

11～13溝〔図15〕

いずれも調査区東端で検出した溝である。11溝と13溝は南北にほぼ真直ぐに走る。12溝はやや西側に湾曲する。それぞれの溝

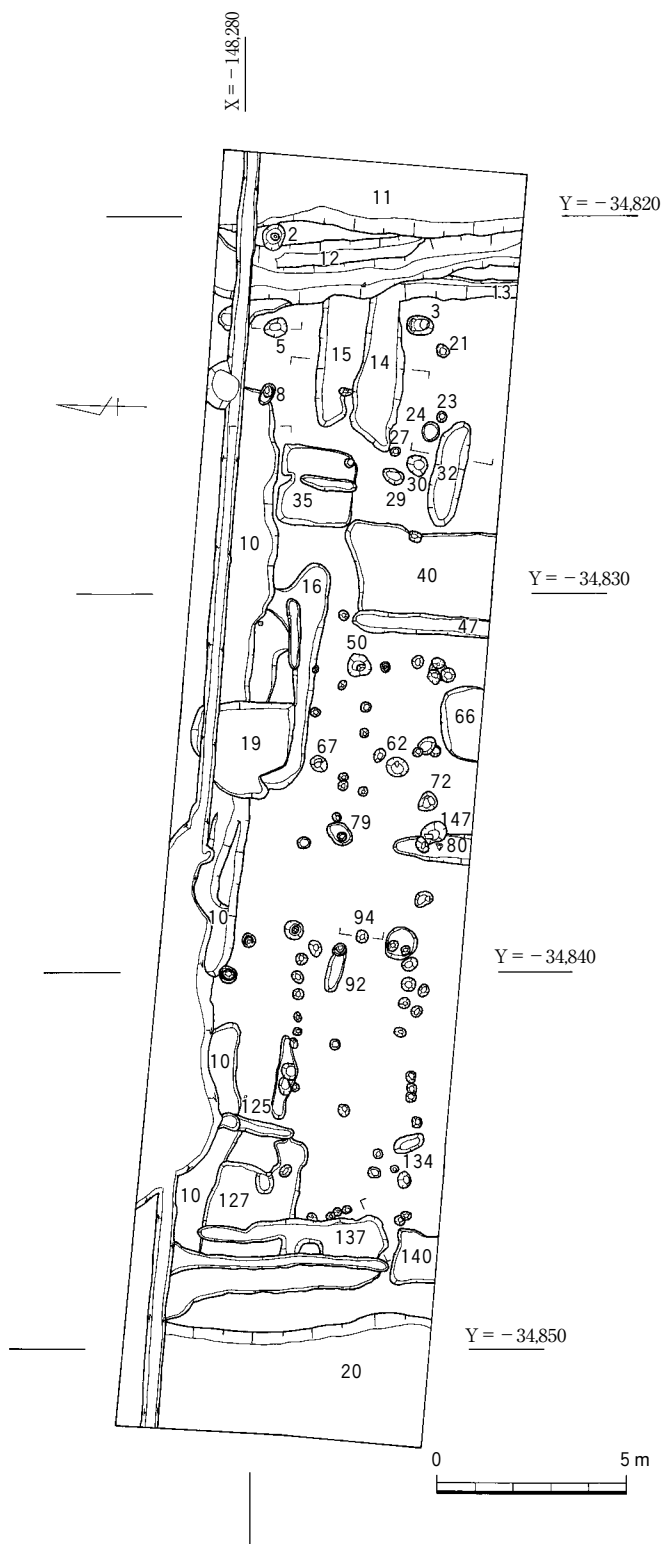


図14 06-2-2 調査区第3面平面図

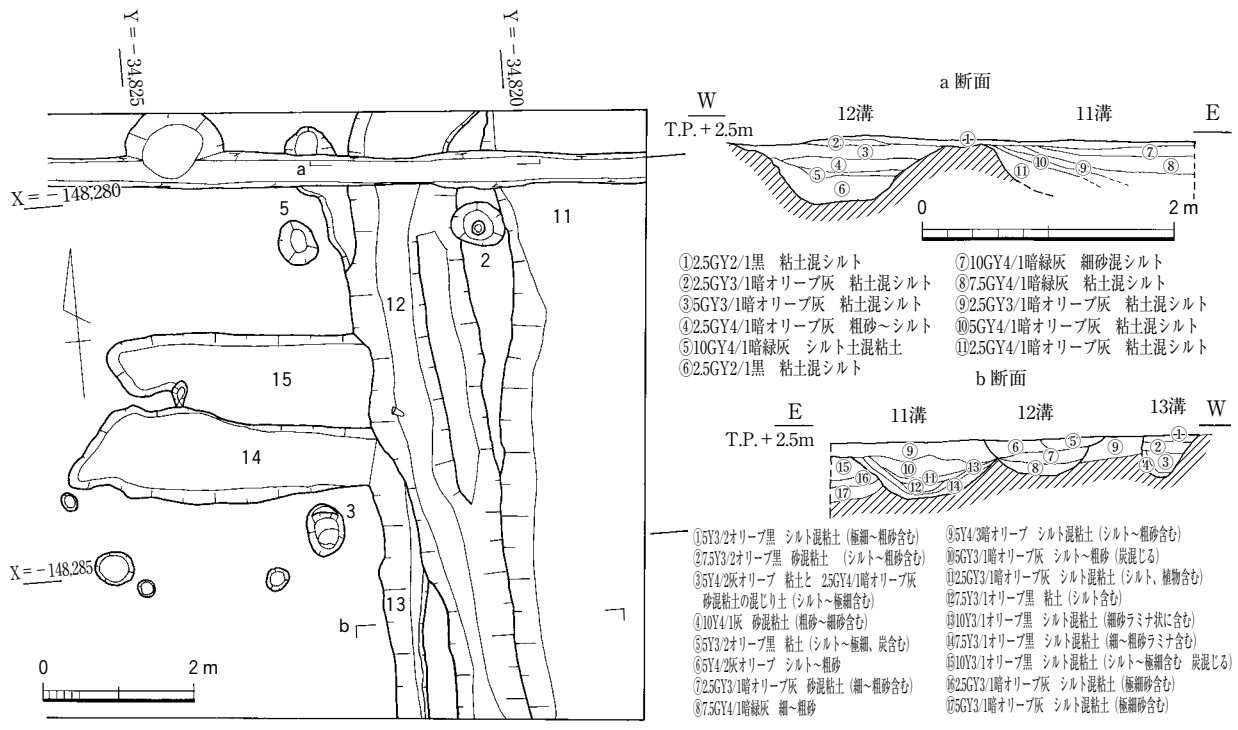


図15 11・12・13溝平・断面図

は幅1.0～1.5m、深さ0.1～0.5mほどの規模をもち、直線状に伸びる。埋土の下位から14世紀後半から15世紀の所産である土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜が出土した。断面観察から、このうち12溝がもっとも新しい遺構であることが分かった。11溝が埋まってのち13溝、それにほぼ重なり、11溝の西岸を切る形で平行に12溝が掘削されたと考えられる。11溝の下層部分には細砂がラミナ状に含まれており、流水性の遺構であったことがうかがえる。12・13溝それぞれの埋土は下層に粘土層、上層に細砂混粘土を含んでおり、砂層・ラミナ層は含まれておらず、滞水した時期を経て、人為的に埋められた遺構であったと考えられる。

2・3・5ピット [図15・21]

3ピットは根石を内包しており、周辺の2・5ピットとともに掘立柱建物を構成する柱穴の可能性はある。これらに対応するピットは11溝によって破壊されたと思われる。それぞれ芯々間は南北4.0m、東西2.4mを測る。3ピットより土師器皿 (55)、瓦器椀 (56) が出土した。

11・12溝出土遺物 [図16 図版8]

11・12溝からは多数の遺物が出土した。なお、13溝は当初12溝の一部と捉えていたため、遺物を分けて取り上げることができなかった。12溝出土遺物の中に13溝のものが含まれている可能性がある。

11溝からは11～24が出土した。11～13は土師器皿である、内外面をナデで整える。口縁端部はヨコナデ。11はユビオサエがわずかに残る。口径6.6cm、器高1.4cmを測る。12は口径7.8cm、器高1.7cm。13は口径7.7cm、器高1.5cm。14～16は瓦器椀である。14は口径10cm、器高2.2cm。いぶし不十分、暗文は不明瞭である。15は口径11.5cmを測るが、焼けてひずむ。器高は3.0cm。渦文状の暗文がわずかに残る。16は口径11.4cm、器高2.3cmを測る。17～21は羽釜である。全て瓦質である。17は丸い体部に内傾する口縁部をもつ。口縁端部は面をもち、外面には2条の沈線が施される。鏝端部は水平に伸びる。口径19.2cmを測る。18は土師質の羽釜である。口縁端部を折り返す。直線的な体部に短い鏝部、鏝端部に面をもつもの

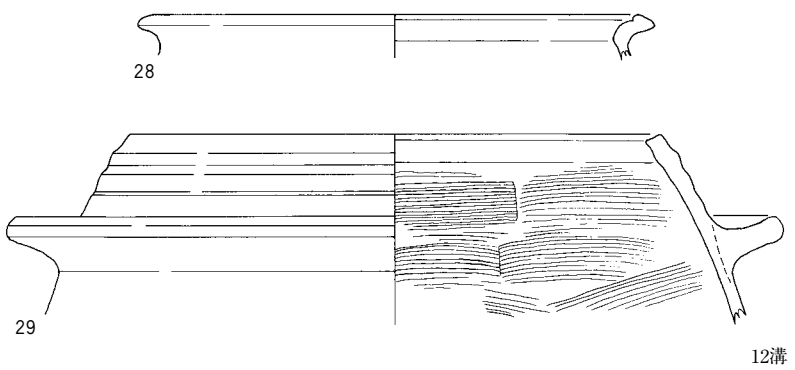
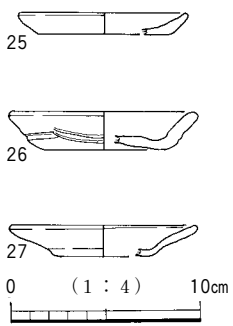
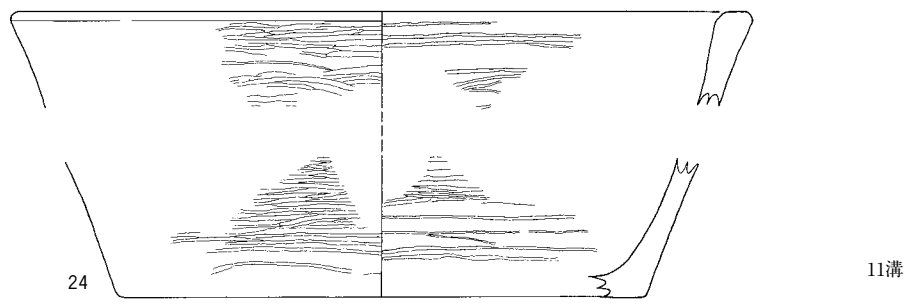
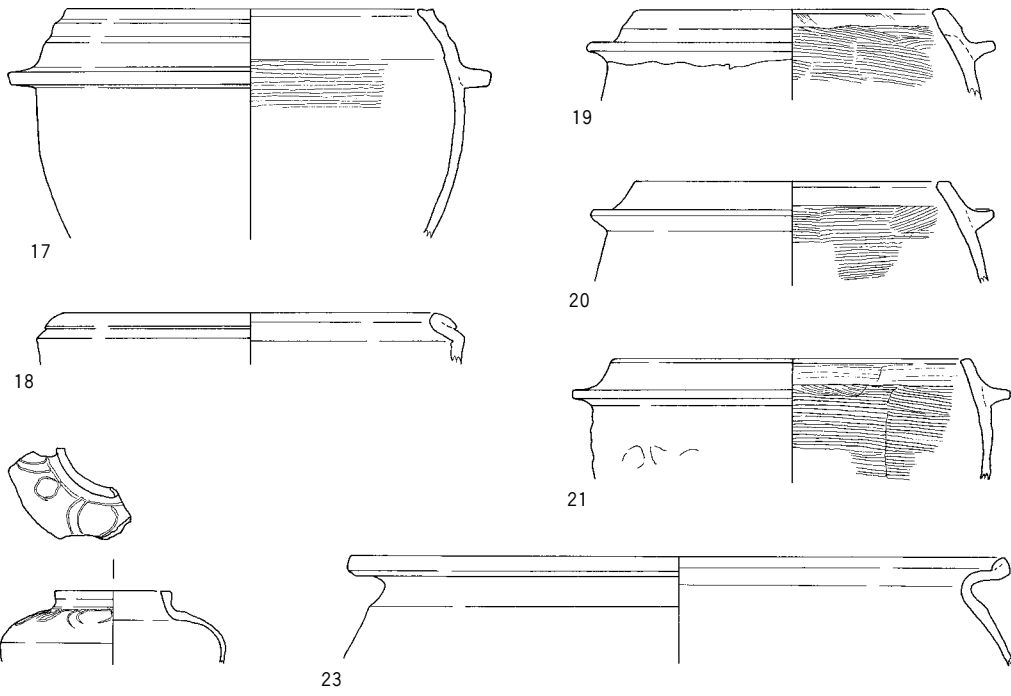
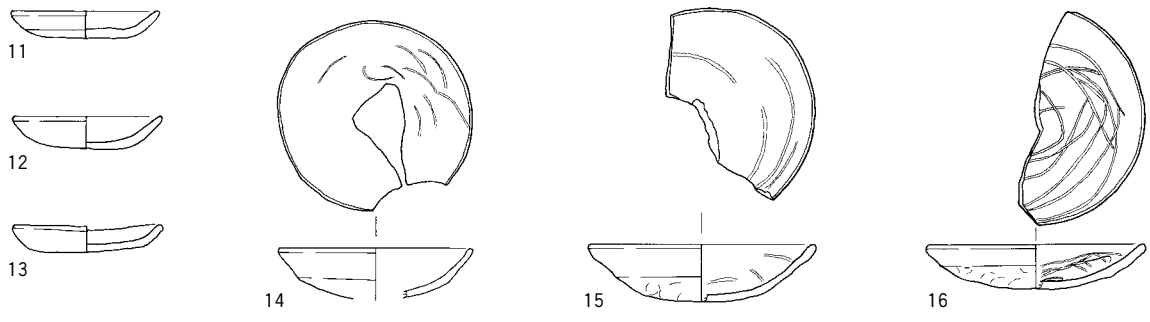


图16 11·12·13溝出土遺物

と思われる。口径19.6cmを測る。19・20は丸い体部に内傾する口縁部をもつ。口縁端部は面をもち、外面には回転ナデによる段をもつ。鋳端部はやや上方に伸びる。20は体部外面をケズリで仕上げる。19は口径19.8cm、20は口径16.6cmを測る。21は直立に近い体部に内傾する口縁部をもつ。口縁端部は面をもつ。幅の狭い鋳は水平に伸び、鋳端部は面をもち終わる。体部外面にはユビオサエが残っており、煤が付着していた。口径は18.2cmを測る。18以外は全て瓦質である。22は瓦質の小壺である。体部外面肩部に暗文を用いて文様を描く。23は土師質の甕である。器壁はうすく、口縁部は折り込み丸くする。口縁端部にまで煤が付着する。大和型の羽釜である可能性も考えられる。24は方形の瓦質火鉢である。逆台形状の脚がつくものと思われる。口径38.6cm、器高は口縁部と底部のみ出土のため不明。口縁部は丸みをもつ。無文であり、内外面とも丁寧なヘラミガキで仕上げる。14世紀後半に属する。

12溝からは25～29が出土した。25～27は土師器である。内外面をナデで整える。口縁端部はヨコナデ。25は口径8.6cm、器高1.1cm。底部にケズリのような砂粒の動きがみられる。26は若干凹む底部から直線的に立ち上がる体部をもつ。内外面ともナデ。底部と体部の境にヘラ工具のようなもので凹線を巡らせる。四国地方のものである可能性がある。口径9.6cm、器高2.0cm。27は凹む底部から開き気味に立ち上がる体部をもつ。口縁端部はつまみあげる。口径9.8cm、器高1.6cmを測る。28は土師器である。口縁部のみの出土であり、全体形は不明。羽釜である可能性も考えられる。口径25.6cm。29は瓦質の羽釜である。内傾気味の長い口縁部であり、端部は面をもちおわる。鋳端部は丸みをもって水平に伸びる。口縁部外面に3条の凹線を施す。口径28.0cmを測る。

掘立柱建物跡および杭列跡〔図17～19〕

調査区中央のピット群の中には建物の礎盤や根石を伴うものがあり、3棟の建物跡を確認した。建物Aは梁行2間・桁行2間以上で、柱間の芯々間が2.25mを測る。建物Bは建物Aと重なってやや東寄りにあり、ほぼ同規模である。建物Cは東西方向の柱列のみ検出した。これらの建物は調査区外の南側に伸びる南北方向の建物であろう。遺物は、14～15世紀代の土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦が出土した。

杭列跡〔図18〕

杭列A：この周辺に杭列と思われるピット群を検出した。杭間の芯々間は0.4～0.6mとばらつきはあるものの、ほぼ東西方向に直線状に並ぶ。杭そのものの遺存はなかった。この他にも規則性のあるピットが数基みられた。方形の囲いのようなものが想定できるが、不定形であり連続性に欠けるため図示しなかった。位置的にいずれかの建物に関連する施設である可能性がある。

90ピット 直径0.28m、深さ0.2mを測る。埋土にはオリーブ黒色10Y3/1細砂混粘土が入る。

105ピット 直径0.24m、深さ0.15mを測る。埋土にはオリーブ黒色7.5Y3/2細砂が入る。

106ピット 直径0.22m、深さ0.32mを測る。埋土は3層に分かれる。オリーブ黒色7.5Y3/1シルト混粘土が入り、下方に向かって細砂～粗砂の割合が高くなる。

107ピット 直径0.25m、深さ0.13mを測る。埋土にはオリーブ黒色10Y3/1細砂が入る。やや粘質。

109ピット 直径0.23m、深さ0.25mを測る。埋土は3層に分かれる。オリーブ黒色10Y3/1細砂混粘土によって固定されていた杭が腐食あるいは抜き取られた後に、オリーブ黒色10Y2/2細砂、オリーブ黒色7.5Y3/2細砂によって埋まったものと思われる。

110ピット 直径0.15m、深さ0.8mを測る。埋土にはオリーブ黒色7.5Y3/1砂混シルトが入る。

これらのピットからは遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡〔図17・19〕

建物A：3棟の建物跡の中で最も北に位置し、東西2間、南北2間以上の南北方向に長軸をもつ建物である。南端は調査区外に位置しているため、正確な規模は不明であるが、梁行4.5m、桁行4.5m以上を測る。柱の芯々間は2.1~2.6mを測る。埋土中に砥石を転用した根石を内包する62ピット（30）と67ピット（31）を含む、5本以上の柱をもった建物であることが考えられる。

建物B：3棟の建物跡の中で最も東に位置し、東西1間、南北2間以上の、Aと同じく南北方向に長軸をもつ建物である。南端は調査区外に位置しており、正確な規模は不明である。梁行4.5m、桁行3.3m以上を測る。柱の芯々間は2.1~2.6mを測る。瓦質播鉢の破片を礎板に用いる37ピット、扁平な礫を根石に用いる147ピットを含む。平行する南北方向の47溝はこれに付随する溝と思われる

建物C：東西方向の2間分の柱穴のみを検出した。北方向に対応する遺構がみられないため、建物は南方向の調査区外に伸びると考えられる。梁行5.0m、桁行は不明。柱の芯々間は2.3~2.6mを測る。それぞれのピットから遺物が出土している。73ピットは上面が平らになるよう石を据え、根石に用いている。

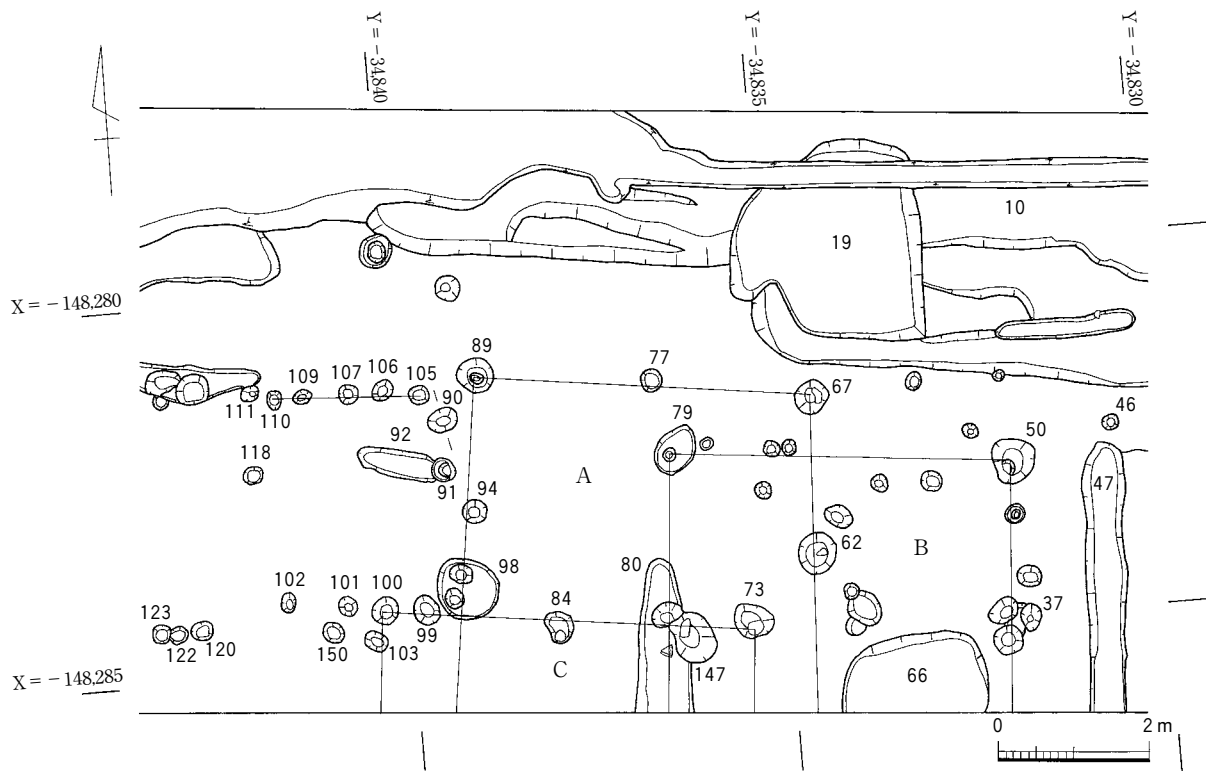


図17 掘立柱建物A、B、Cおよび杭列A位置図

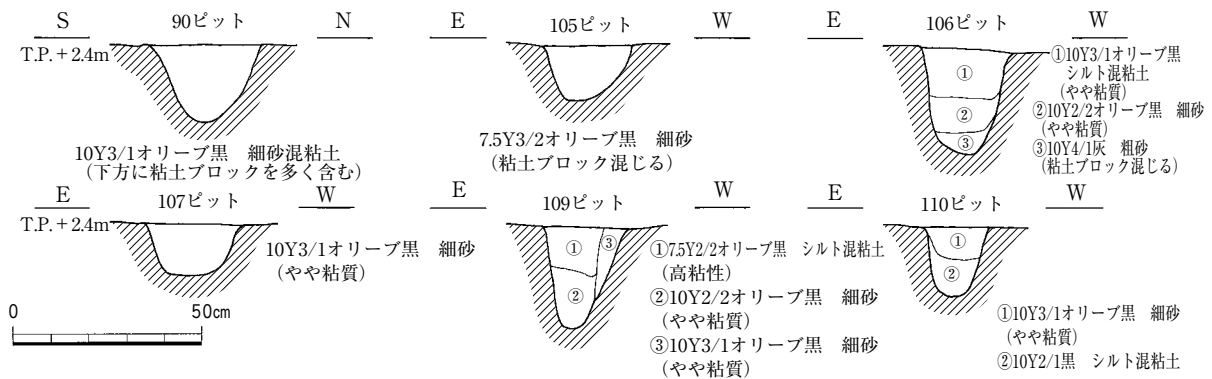


図18 杭列A断面図

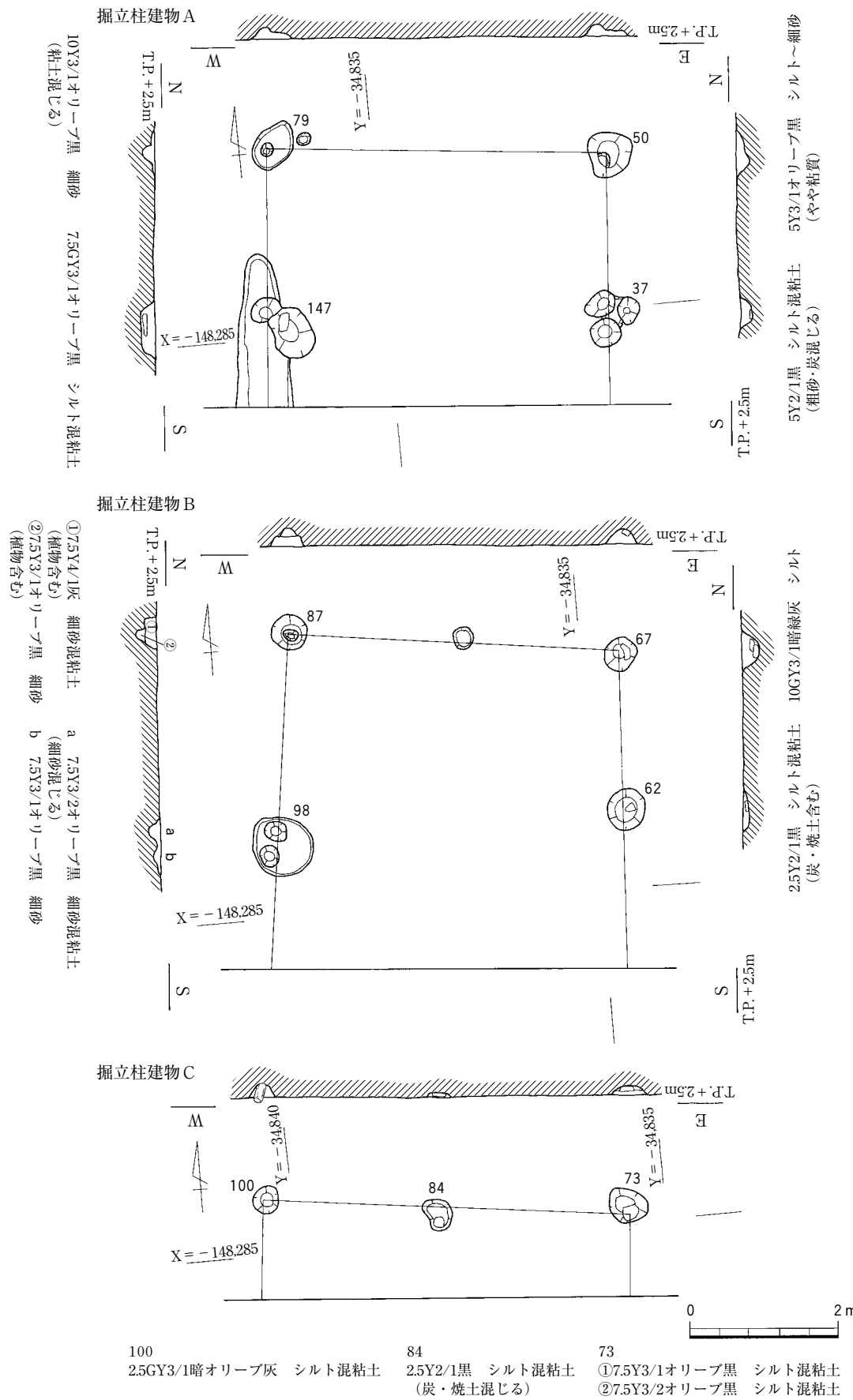


図19 掘立柱建物A、B、C平・断面図

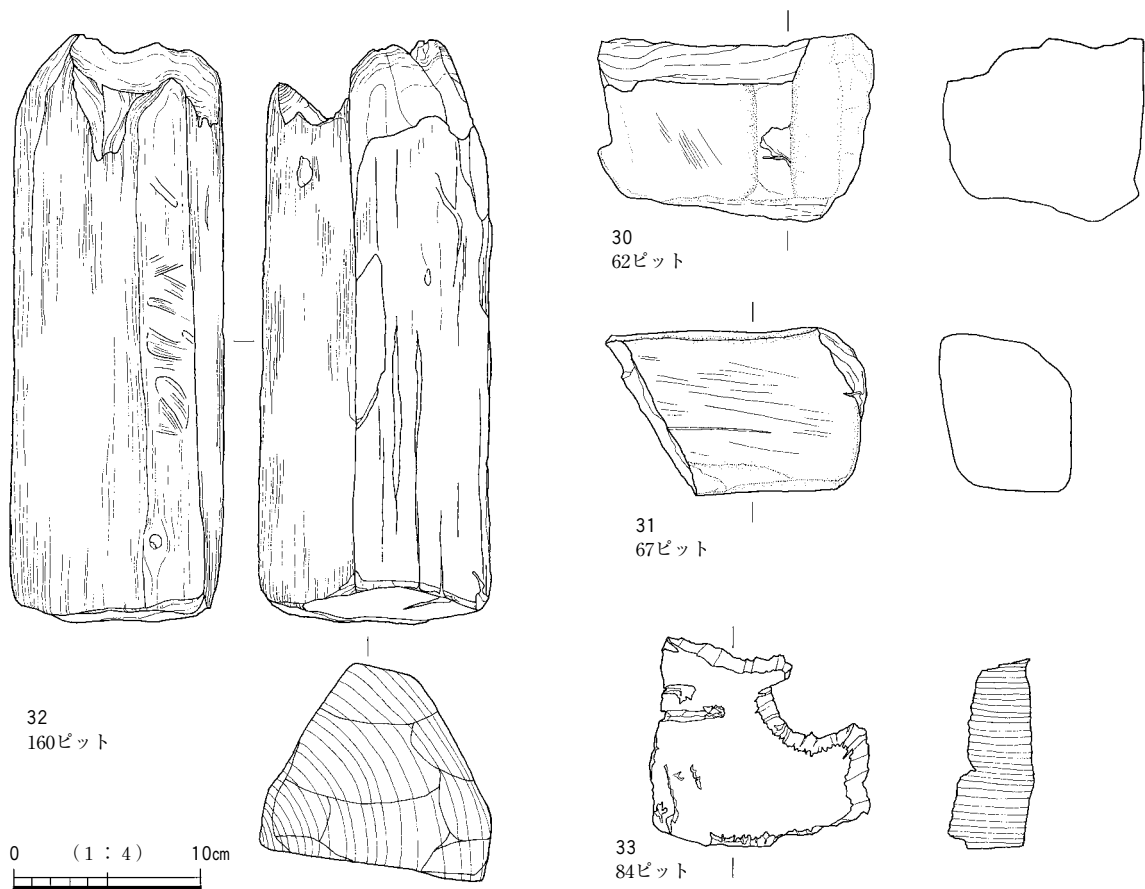


図20 柱穴出土遺物

84ピットからは柾目取りの板材が出土した。当初柱根の一部かと思われたが、両切断面に加工痕が見られるため、礎板（33）として捉えた。100ピットには柱痕（32）が残っていた。

柱穴出土遺物〔図20 図版3〕

30・31は砥石である。30は2面に使用痕が残る。一部に煤が付着。目の細かい砂岩質である。62ピットより出土した。31は3面に使用痕が残る。柱状の片岩質である。67ピットより出土した。

32は柱根である。100ピットにおいて検出した。原材を4分割したもので、樹皮を取り去らずに利用する。角部には面取りが施され、断面形は隅丸三角形を呈する。下面が平らになるように加工してある。上部は腐食により加工痕は認められない。材質はヒノキである。

33は柾目の板材である。84ピットから出土した。腐食がひどく、木心部は欠損する。礎板として用いられていたと思われる。材質はマツである。

第3面遺構〔図14・21 図版3〕

5ピットは調査区東端に位置する。直径0.48m、深さ0.22mを測る。埋土は4層に分かれる。オリーブ黒色10Y3/1シルト混粘土が入る。断面観察から柱穴である可能性が考えられる。遺物は出土していない。

32溝は調査区東南部に位置する。東西方向に伸びる溝である。両端は丸くおわる。長径2.5m、幅0.4m、深さ0.12mを測る。埋土にはオリーブ灰色2.5GY5/1シルトが入る。遺物は出土していない。

94ピットは調査区中心に位置する。直径0.3m、深さ0.22mを測る。埋土には暗オリーブ灰色2.5GY3/1シルト混粘土が入る。遺物は出土していない。

137土坑は調査区西端で検出された土坑である。南北に長軸を持つが不定形である。長さ5.0m、幅1.0

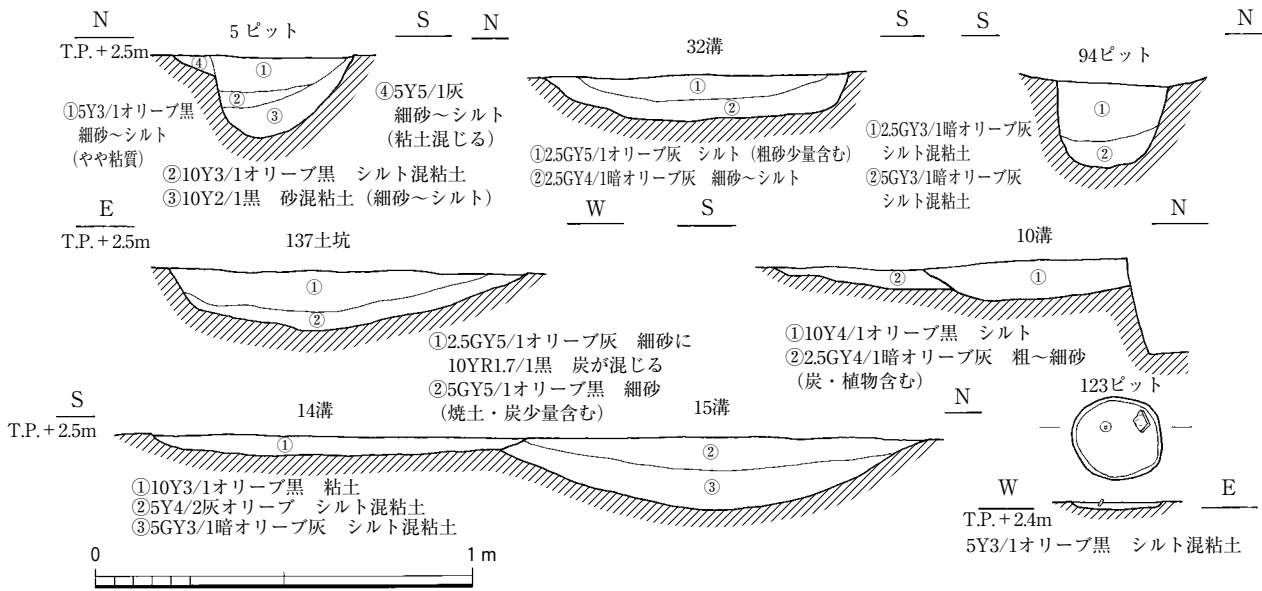


図21 第3面遺構断面図

m、深さ0.16mを測る。埋土にはオリーブ灰色2.5GY5/1細砂が入る。炭・焼土が全体に混じる。土師器皿(54)が出土した。

10溝は調査区北端に位置する。東西方向に伸びる溝である。この他にも同軸の延長線上において、南北に長軸を持つ溝を複数検出した。埋土を検討した結果、一連の遺構であると考え、同一の遺構番号を付与した。これらの溝は西肩に攪乱を受け、削平によって分断されるが、総長11.5m、残存深度0.1m前後、残存幅0.9mを測る。土師器皿(56～58)、瓦器椀(59～61)須恵器(62)、瓦質土器(63・64)が出土した。

14・15溝は調査区東端に位置し、重なり合う2条の溝である。14溝は残存長4.4m、幅0.6m深さ0.2mを測る。15溝は残存長3.6m、残存幅0.5m、深さ0.4mを測る。14溝の埋土にはオリーブ黒色10Y3/1粘土が入る。15溝は2層に分かれ、灰オリーブ色5Y4/2から暗オリーブ灰色5GY3/1のシルト混粘土である。断面観察から遺構は2条ともに、12溝より新しいものであることがわかった。14溝からは土師器皿(65・66)、瓦器椀(67・68)、瓦質火鉢(70)、木杓底部(70)、平瓦(71・72)、丸瓦(73・74)が出土した。15溝からは土師器(34)・瓦器椀(35)が出土した。

123ピットは調査区中央部で検出されたピットである。直径0.24m、深さ0.1mを測る。埋土にはオリーブ黒色5Y3/1シルト混粘土が入る。貨銭(大観通宝、53)、瓦質播鉢の小片が出土した。

第3面遺構出土遺物〔図22・23 図版8・9〕

15溝から34・35が出土した。34は土師器皿である。口径9.8cm、器高1.9cmを測る。底部はわずかに凹む。全体をナデで仕上げる。35は瓦器椀である。口径12.8cm、器高1.6cmを測る。内面には渦状の暗文が1条のこる。外面はユビオサエのちナデ。上部はヨコナデを施し、わずかに口縁部を肥厚させる。和泉型のIV-3～4期に比定されよう。

3ピットから36・37が出土した。36は土師器皿である。口径4.8cm、器高1.1cmを測る。底部はわずかに凹む。全体をなでる。37は瓦器椀である。口径12.8cm、2.2cmを測る。内面には渦状の暗文が数条残る。内外面はナデ。口縁部はヨコナデを施す。和泉型のIV-3～4期に比定されよう。

16溝からは38～41が出土した。38・39は土師器皿である。38は口径6.2cm、器高1.1cmを測る。手づくねの小皿である。39は口径11.0cm、器高2.0cmを測る。底部はユビオサエ後ナデ、口縁部にヨコナデを施す。

底部と体部の境に強いヨコナデを施し口縁部を肥厚させる。端部は丸くおさめる。40・41は瓦器椀である。40は口径9.8cm、器高2.0cmを測る。41は口径13.0cm、器高1.8cmを測る。2点とも暗文のない小片であり、詳細は不明である。

127土坑からは42～45が出土した。42・43は土師器皿である。口径7.2cm、器高1.1cmを測る。手づくねの小皿である。43は口径9.2cm、器高0.9cmを測る。底部がわずかに凹む。44は瓦器椀である。口径10.8cm、器高2.8cmを測る。体部外面はナデ、口縁部にはヨコナデを施す。内面には渦状の暗文がみられる。45は滑石製の石鍋である。口径19.2cm、残存高3.8cmを測る。10溝から同一個体が出土している。無文であり、口縁端部は面をもつ。

19土坑からは46が出土した。土師器皿である。口径は10.8cm、器高2.3cmを測る。わずかに凹む底部にゆるく開く口縁部をもつ。端部は尖り気味になでる。内面には煤が付着しており、灯明皿として使用されたと思われる。

20溝からは47～51が出土した。47は瓦器椀である。口径は10.8cm、残存高2.7cmを測る。口縁部は外

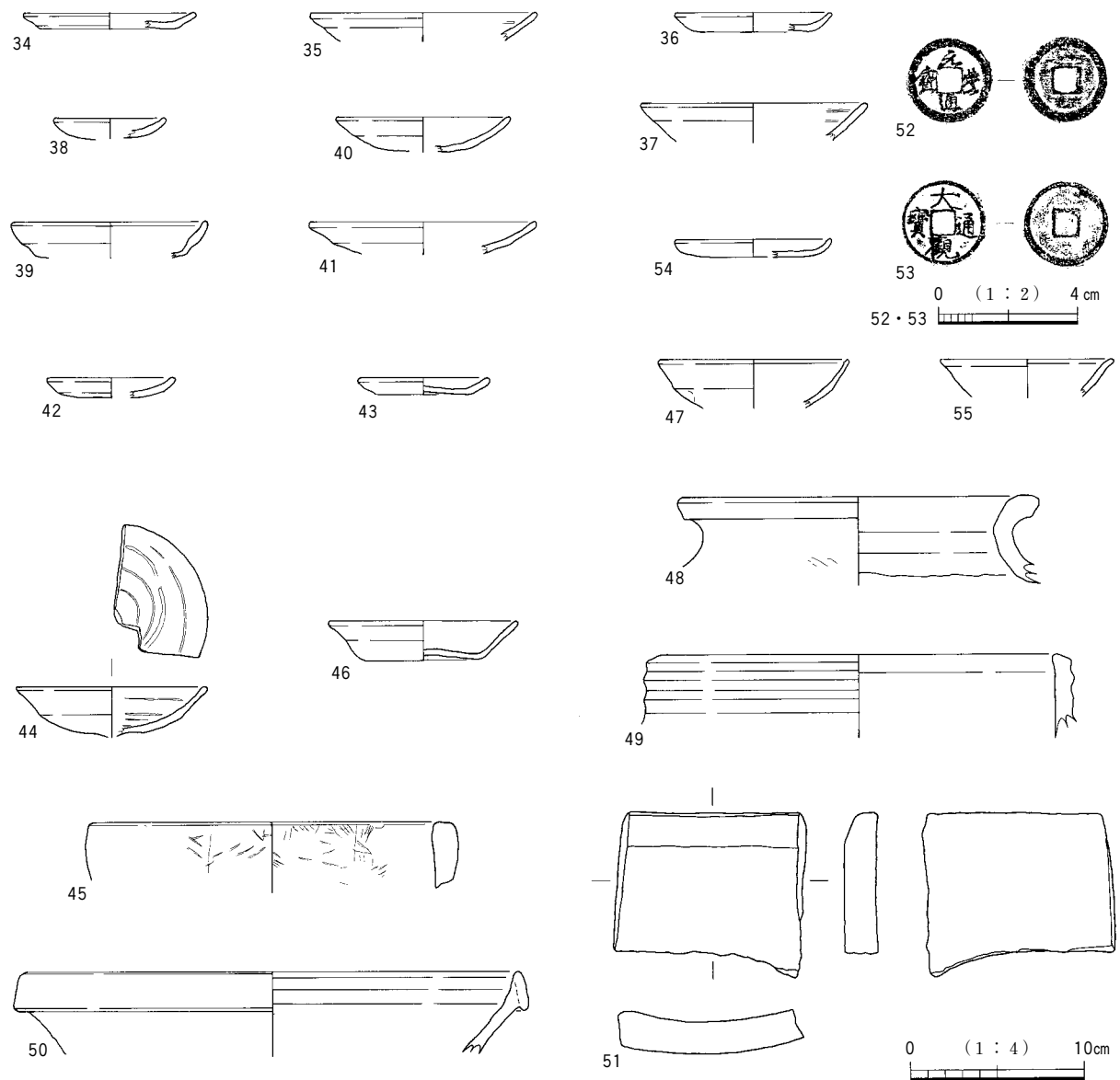


図22 第3面遺構出土土器（1）

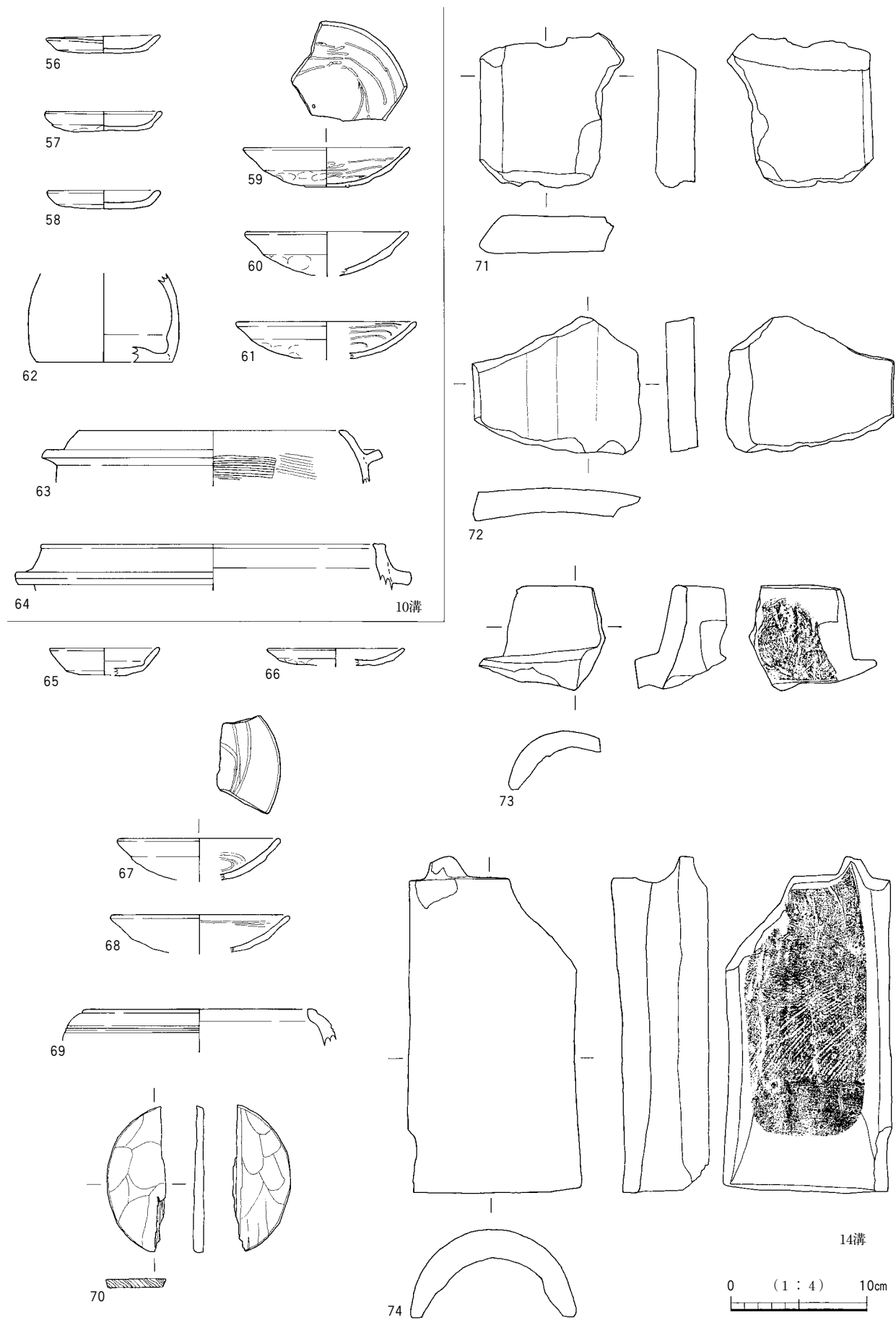


图23 第3面遺構出土土器(2)

反せず、端部に段を持つ。大和型である。Ⅳ－A期に比定できよう。48は瓦質の甕である。口径20.0cmを測る。全体に摩滅が激しく、タタキがわずかに残る。49は瓦質の羽釜である。直立する口縁外部に3条の沈線が施される。口縁端部は面をもつ。50は東播系須恵器の鉢である。口径28.6cmを測る。口縁端部は上下に拡張され、口縁部は外反する。14世紀前半のものと思われる。51は平瓦である。残長9.6cm、残幅10.8cm、厚さ1.8cmを測る。凹面には縄目の痕が残る。

99ピットからは52の「元符通宝」が出土した。1098年初鑄の北宋銭である。

123ピットからは53の「大観通宝」が出土した。1107年初鑄の北宋銭である。

137土坑から54の土師器皿が出土した。口径は8.8cm、器高は1.0cmを測る。

92溝から55が出土した。中国製の口禿の白磁、口縁部の小片である。口径9.8cmを測る。釉調は灰白色N8/0を呈する。小片のため器種は不明。

10溝からは56～64が出土した。56～58は土師器皿である。56は口径8.2cm、器高1.3cmを測る。57は口径8.3cm、器高1.5cmを測る。58は口径8.0cm、器高1.3cmを測る。56・58は内外面ナデ、口縁端部は丸くおわる。57はやや強いヨコナデに口縁部がわずかに外反する。口縁端部はつまみあげる。59～61は瓦器碗である。59は口径12.2cm、器高3.0cmを測る。底部に断面3角形の小さな高台を持つ。内面に渦状の暗文を施す。体部外面にユビオサエ、口縁部に2段のヨコナデを施す。口縁端部に段を持つ大和型である。Ⅲ－E期に比定されよう。60は口径11.6cm、器高3.2cmを測る。61は口径12.8cm、器高2.7cmを測る。ともに内面に渦状の暗文を施す。体部外面にはユビオサエが残る。口縁部にはヨコナデを施し、端部は丸くおわる。共に和泉型のⅣ－3～4期に比定されよう。62は須恵器である。底部のみにて器種は不明。底径10.0cmを測る。底部は板オサエ、体部外面は回転ナデで仕上げる。降灰は底部にも及ぶ。63・64は瓦質土器である。63は口径11.4cm。球形の体部に内傾する口縁をもつ。短い鏝部はやや上方につき、端部は面をもつ。64は口径25.0cmを測る。短い口縁部に水平に伸びる短い鏝部がつく。

14溝からは65～74が出土した。65は陶器の小皿である。口径8.0cm、器高2.0cmを測る。平底の底部に、直線的にやや開く体部、口縁端部は尖らせ気味におわる。底部回転ケズリ。体部と底部の境にはケズリによる段をもつ。見込み部に工具による屈曲が見られる。胎土はにぶい黄橙色10YR7/3、外面釉は灰白色2.5GY8/1を呈する。66は土師器皿である。口径9.8cm、器高1.2cmを測る。底部ユビオサエ、口縁部はナデ。端部は尖らせ気味におわる。67・68は瓦器碗である。67は口径11.6cm、器高3.0cmを測る。体部外面はナデ、口縁部にはヨコナデを施す。口縁端部は丸くおわる。内面には渦状の暗文がみられる。68は口径13.0cm、器高2.7cmを測る。口縁部外面のヨコナデの単位は狭く、わずかに口縁部は肥厚、外反させる。暗文は渦状であり、口縁端部にわずかに残る。ともに和泉型のⅣ－3～4期に比定されよう。69は瓦質火鉢である。小片にて口径は不算出である。口縁部を内傾させる。全体にナデを施す。外面に沈線が2条めぐる。端部を沈線により肥厚させる。70は木杓の底部と思われる。半分を欠損する。板目取りの板材を丸く切断する。材質はスギである。71・72は平瓦である。71は残長9.8cm、残幅9.8cm、厚さ2.8cmを測る。凹面には布目のナデ消し痕が残る。73・74は丸瓦である。73は丸瓦の玉縁部のみである。内面には布目が残る。74は丸瓦の胴部である。凹面には布目が残る。凸面はナデ、縄目の跡がわずかに残る。

142・148井戸〔図24～26〕

第3面において検出した遺構であるが、上面から残る一番新しい時期の遺構である。

2基の井戸が切りあう形で検出した。両井戸は掘方の区別がはっきりせず、時期を置かずに作られた

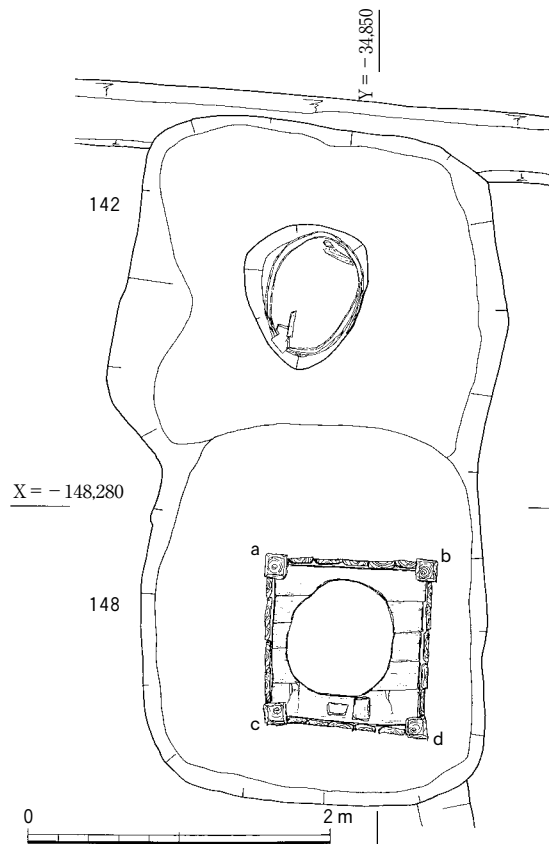
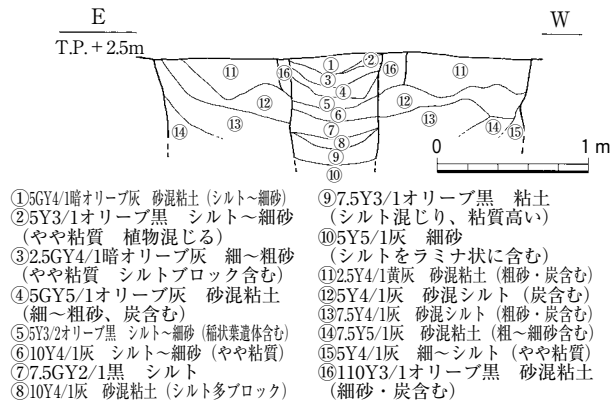


図24 142・148井戸平面図



- ①5GY4/1暗オリーブ灰 砂混粘土 (シルト～細砂)
- ②5Y3/1オリーブ黒 シルト～細砂 (やや粘質 植物混じる)
- ③2.5GY4/1暗オリーブ灰 細～粗砂 (やや粘質 シルトブロック含む)
- ④5GY5/1オリーブ灰 砂混粘土 (細～粗砂、炭含む)
- ⑤5Y3/2オリーブ黒 シルト～細砂 (稲状葉遺体含む)
- ⑥10Y4/1灰 シルト～細砂 (やや粘質)
- ⑦7.5GY2/1黒 シルト
- ⑧10Y4/1灰 砂混粘土 (シルト多ブロック)
- ⑨7.5Y3/1オリーブ黒 粘土 (シルト混じり、粘質高い)
- ⑩5Y5/1灰 細砂 (シルトをラミナ状に含む)
- ⑪2.5Y4/1黄灰 砂混粘土 (粗砂・炭含む)
- ⑫5Y4/1灰 砂混シルト (炭含む)
- ⑬7.5Y4/1灰 砂混シルト (粗砂・炭含む)
- ⑭7.5Y5/1灰 砂混粘土 (粗～細砂含む)
- ⑮5Y4/1灰 細～シルト (やや粘質)
- ⑯110Y3/1オリーブ黒 砂混粘土 (細砂・炭含む)

図25 142井戸断面図

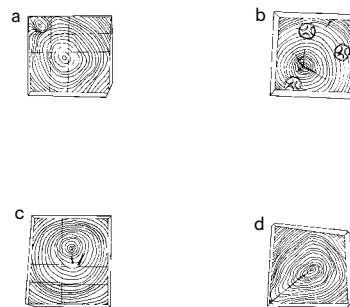


図26 148井戸隅柱実測図

ものと思われる。わずかな土質の違い、井戸の形状から148井戸が新しいと思われる。掘方は双方合わせて長方形を呈する。142井戸の掘方は南北2.0m、東西2.25m、井筒は南北1.0m、東西0.8mを測る。148井戸の掘方は南北2.5m、東西2.3mを測る。井戸枠は1辺1.1mを測る正方形である。いずれも井戸の外枠は横木組み、井戸枠は瓦埴積みと思われる。148井戸の隅柱の頂面に線刻や墨描が見られた。図26に掲載する。142井戸からは「ヤマトシジミ」が出土した。出土遺物から両遺構は近世に属する。

当地点は中世段階から20・41溝や30流路が位置し、調査中も湧水があった。井戸はこの水脈を利用したのであろう。類似する井戸の規模から推定するに、遺構の深さは調査の予定深度を越えるものと思われる。

142・148井戸出土遺物〔図27 図版11上〕

142井戸からは75～90、92・93が出土した。75～77は肥前系染付椀である。最大径4.0cm程度の口縁部破片であり、いずれも呉須で模様、線が描かれている。75は井筒部の埋土より出土した。内面に雷文帯がめぐり、外面には山水文が描かれる。76は堀方より出土した。内面に細い1条の圏線がめぐり、外面は草花文が描かれる。釉の発色は良い。77は堀方より出土した。内面に2条の細い圏線がめぐり、外面は梅花文が描かれる。78は肥前系陶磁器の高台部である。井筒部の埋土より出土した。全面に回転ヘラ削りが施され、高台も削りだしている。施釉されている。釉調は灰色7.5Y6/1を呈している。79は瓦質播鉢口縁の注口部である。内面には5条(3本/cm)の播り目がみられる。ヨコナデで仕上げられている。80は瓦質片を円盤状に加工したものと思われる。堀方より出土した。最大長は5.0cmを測る。アーチ状の周縁部を打ち欠いており、平滑になっている。一部欠損する。外面に煤が付着し、内面に細かい刷毛の調整がみられるので、もとは羽釜の体部であったと思われる。81は土師器皿である。器高2.2cm、口径は9.2cmを測る。外面体部は弱いユビオサエを行い、内外面ともに体部はヨコナデで仕上げている。82、83は瓦器椀である。82の口径は12.8cm、器高1.9cmを測り、口径は器高に比して大きい。83の器高は2.8cm、

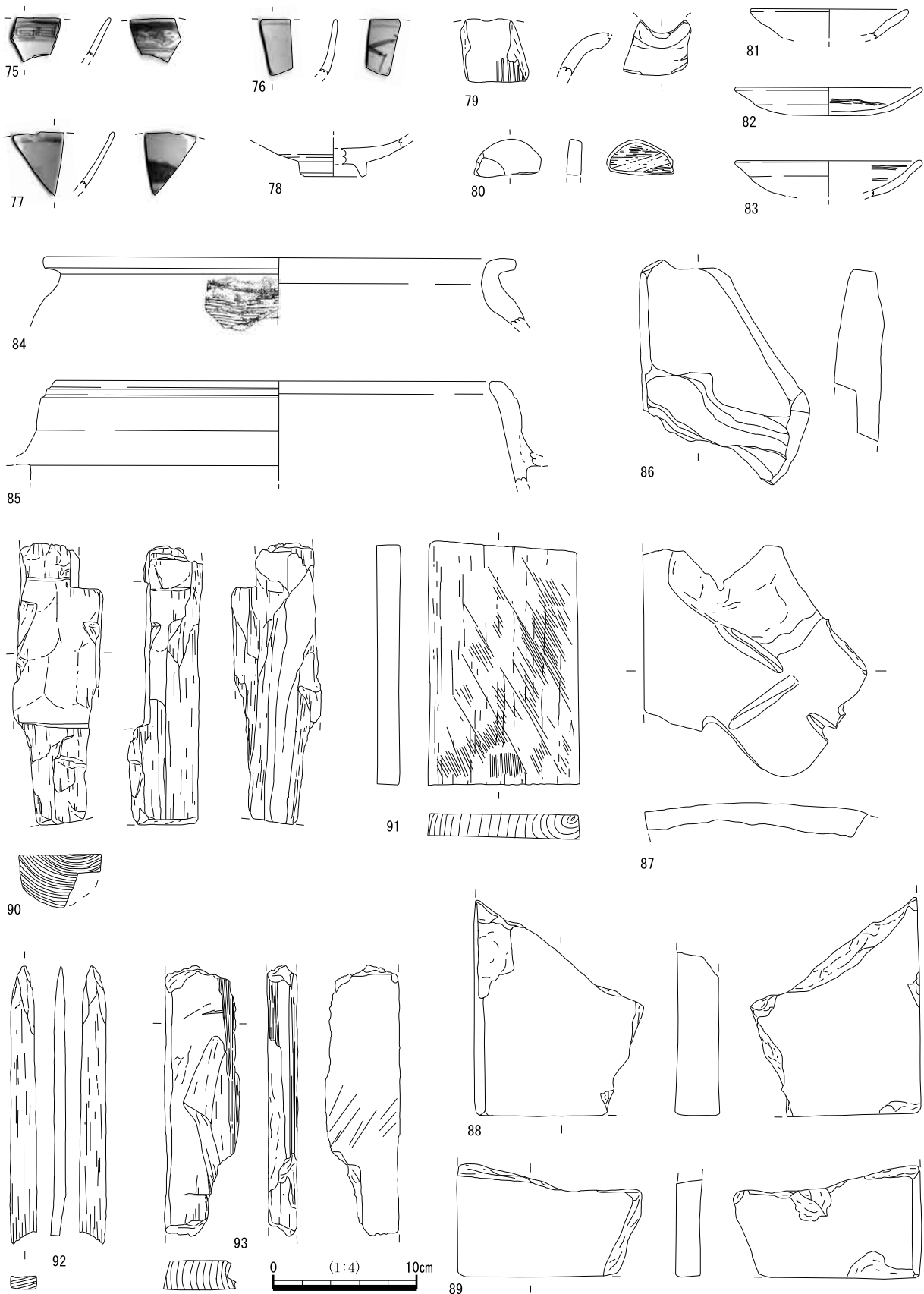


图27 142·148井戸出土遺物

口径は12.8cmを測る。いずれも、外面口縁部は強いヨコナデを施し、外反させている。外面底部には指圧痕が残る。内面には渦状の細い暗文を施す。ともに和泉型Ⅳ-3～4期であろう。84は瓦質甕口縁部である。口径は31.0cmを測る。口縁端部は断面が「コ」字状を呈する。頸部は短く水平気味に開く口縁部をもつ。外面に横方向の細目のタタキ（5本/cm）が施され、内外面はヨコナデが施され仕上げられる。85は瓦質羽釜である。口径は29.4cmを測る。鏝は欠落しているが、接合痕がみられた。口縁端部外面には2段の段を有す。やや内傾する。86は砥石である。最大長は11.8cm、厚みは3.1cmを測る。半分以上が欠損していると思われる。全面に煤が付着する。87は井戸枠の瓦埴の破片である。井筒部の埋土より出土した。最大長は15.0cm、残幅19.6cm、厚みは1.8cmを測る。凹面は剥離している。凸面にはヘラ切りにて、千鳥足状の切れ込みが施されている。88・89は平瓦片である。88の最大長は15.1cm、残幅12.8cm、厚みは3.3cmを測る。89の最大長は12.7cm、残幅12.8cm、厚みは2.0cmを測る。いずれも端部をヘラ状工具にて面取りし、両面ともに板状工具でなでている。大半が欠損している。90・93は加工木製品である。いずれも掘方より出土している。90は最大長19.6cm、幅5.7cm、厚み3.7cmを測る。上部は欠落している。下部両側も欠損する。中央部は「コ」字状に彫り凹められており、上部は「L」字状に切り込まれている。何かの臍穴であろう。一部木肌が残っている。93は最大長13.5cm、幅5.2cm、厚み2.0cmを測る。上部、下部ともに欠損する。側縁の一部に「V」字状の切込みが見られる。まな板に転用したのか、裏面に刃物による切り目痕が数条見られる。材質は90・93ともにマツ科。92はヘラ状木製品である。最大長は19.3cm、幅は1.9cm、厚みは0.7cmを測る。全体に扁平であり、上端部を尖り気味に削る。下端部は欠落している。材質はスギである。

148井戸からは91が出土した。91は板状木製品である。長さ17.0cm、幅10.6cm、厚みは1.7cmを測る。柀目取である。両面にカンナと思われる工具痕が斜め方向に筋状にみられる。材質はスギである。

これらの遺物は下層の20溝・30流路の遺物を巻き込んだものと思われる。中世の遺物の出土が目立つが、陶磁器類をみるに17世紀以降の遺構であろう。

3. 第4面〔図28〕

第4面はT.P.+2.1～2.4mをはかる。3面に同じく西に向かって高くなる。調査区中央と東側においてピット、土坑、流路などの遺構を確認した。

30流路〔図29上 図版4〕

調査区西端で検出した。当流路は上面の第3面において検出した20溝に先行する流路である。南北に流れる遺構であり、東肩のみを検出した。20溝は残幅1.3m、30流路は残幅4.8mを測る。ともに深さは0.5m以上を測る。20溝の埋土は粒子の粗い砂と粘土を中心に構成されており、一挙に埋まったものと思われる。対して30流路はいずれの層にもラミナがみられる。特に最下層はよく発達しており、活発な水流があったことがうかがえる。3層における20溝は11・12溝とともに、区画溝の役割を果たしていたと思われる。下層にある流路の水流を目的に掘削された可能性がある。30流路の埋土から14世紀後半の瓦器（97・98）、瓦質土器（99）須恵器（100・101）、瓦質甕（102）瓦（103）、砥石（104）、馬の左中足骨が出土した。

146土坑〔図29下〕

調査区東端にて検出した東西に長軸をもつ土坑である。上部を14溝に、東肩を上層の12溝に切られるが、平面形は楕円形を呈すると思われる。東西1.2m、南北1.0mを測る。埋土からは土師器皿（94）、火

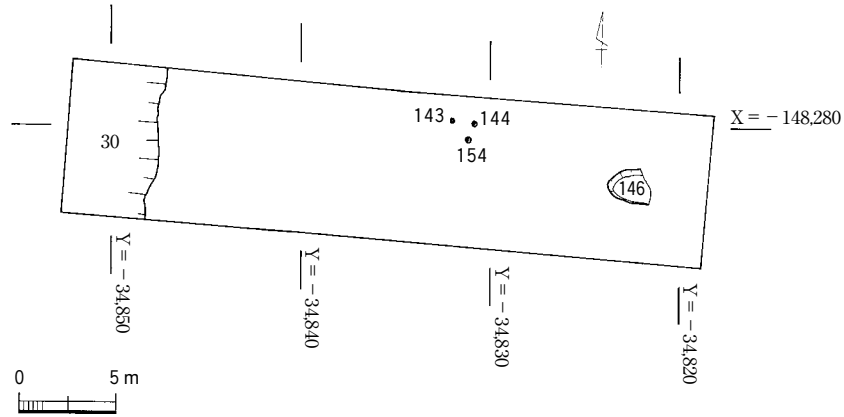


図28 06-2-2調査区第4面遺構平面図

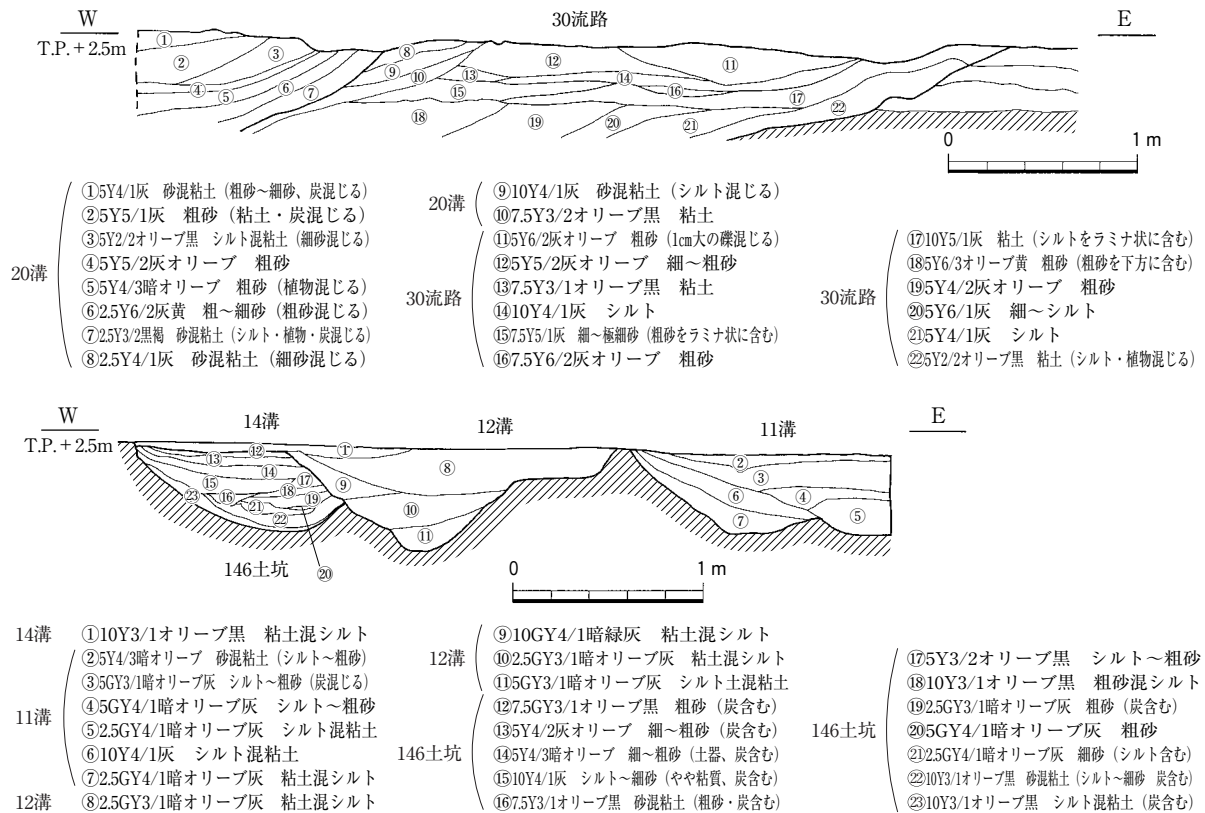


図29 20溝・30流路 (上段)、146土坑および上層の11・12・14溝断面図 (下段)

付け棒 (95)、釘 (96) が出土した。

この他、調査区中央部に3基のピットを検出したが、いずれも浅く単一層であり、遺物は出土しなかった。

第4面遺構出土遺物〔図30〕

146土坑から94～96が出土した。94は土師器皿である。口径6.8cm、器高1.1cmを測る。手づくねの小皿である。内外面ナデで整える。95は火付け棒である。先端に焼けが残る。材質はスギ。96は釘である。全体に酸化が激しい。頭部が「L」字形に曲がる。

30流路から97～104が出土した。97・98は瓦器碗である。97は口径12.0cm、器高2.5cmを測る。いぶしは

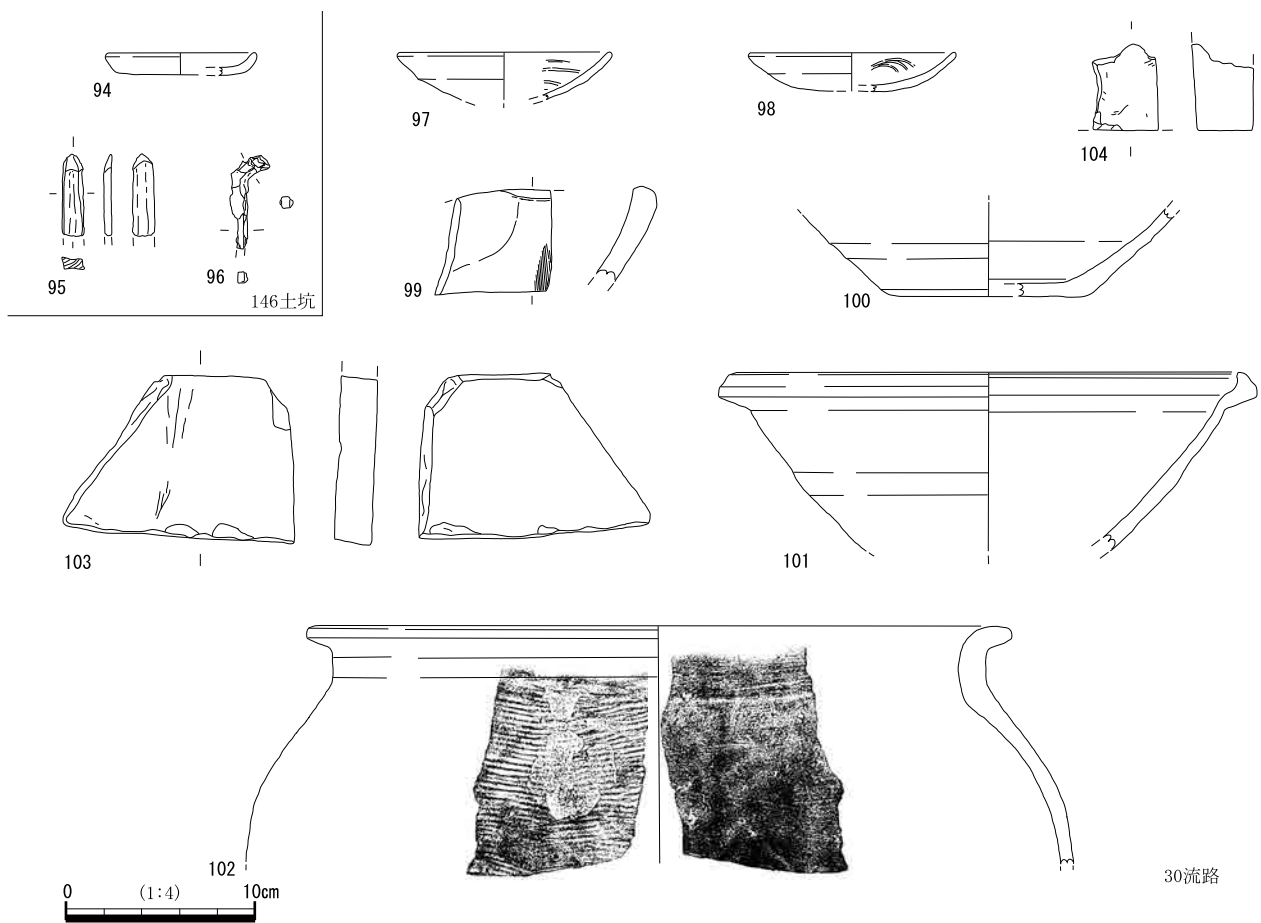


図30 第4面遺構出土遺物

不十分である。98は口径10.8cm、器高2.0cmを測る。どちらも体部外面はナデ、口縁部にはヨコナデを施す。口縁端部は丸くおさめる。内面には渦状の暗文がみられる。ともに和泉型Ⅳ-3~4期に比定されよう。99は片口の瓦質播鉢である。口縁部のみの小片のため、詳細は不明である。内面は横方向のハケを施した後、櫛状の工具にて播り目を入れる。播り目は10条/cm。100・101は東播系須恵器の鉢である。100は底径10.2cmを測る。101は口径28.8cmを測る。口縁端部は上下に拡張され、口縁部はやや外反する。102は瓦質甕である。丸い体部から、短く直立気味に立ち上がる頸部と、短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。体部外面に並行タタキが施される。103は平瓦である。体部破片のため詳細は不明である。凹面に布目のナデ消し跡が残る。104は砥石である。板状の砥石の破片であり、3面に砥面が認められる。長径4.6cm、短径3.4cm、厚さ2.3cmを測る。材質は細目の砂岩である。

06-2-2 調査区包含層出土遺物〔図31 図版10~13〕

調査中に第1~第3層内より出土した遺物である。近現代のものに混じって14~15世紀代のものも多く含まれており、このうち代表的なものを図化した。

第1層からは105~118が出土した。105~107は土師器皿である。105は口径7.8cm、器高1.2cmを測る。底部の平らな手づくねの皿である。内外面ナデ。106は口径8.8cm、器高1.7cmを測る。底部から体部外面はユビオサエ後ナデ。口縁部をつまみ気味にヨコナデする。107は口径4.1cm、器高2.0cmを測る。凹む底部から外反して立ち上がる口縁部を持つ。体部のユビオサエにより口縁部を肥厚させ、つまみ気味にヨコナデを施す。108は龍泉窯系の青磁碗である。直口する口縁はわずかに外反する。体部外面に片切彫

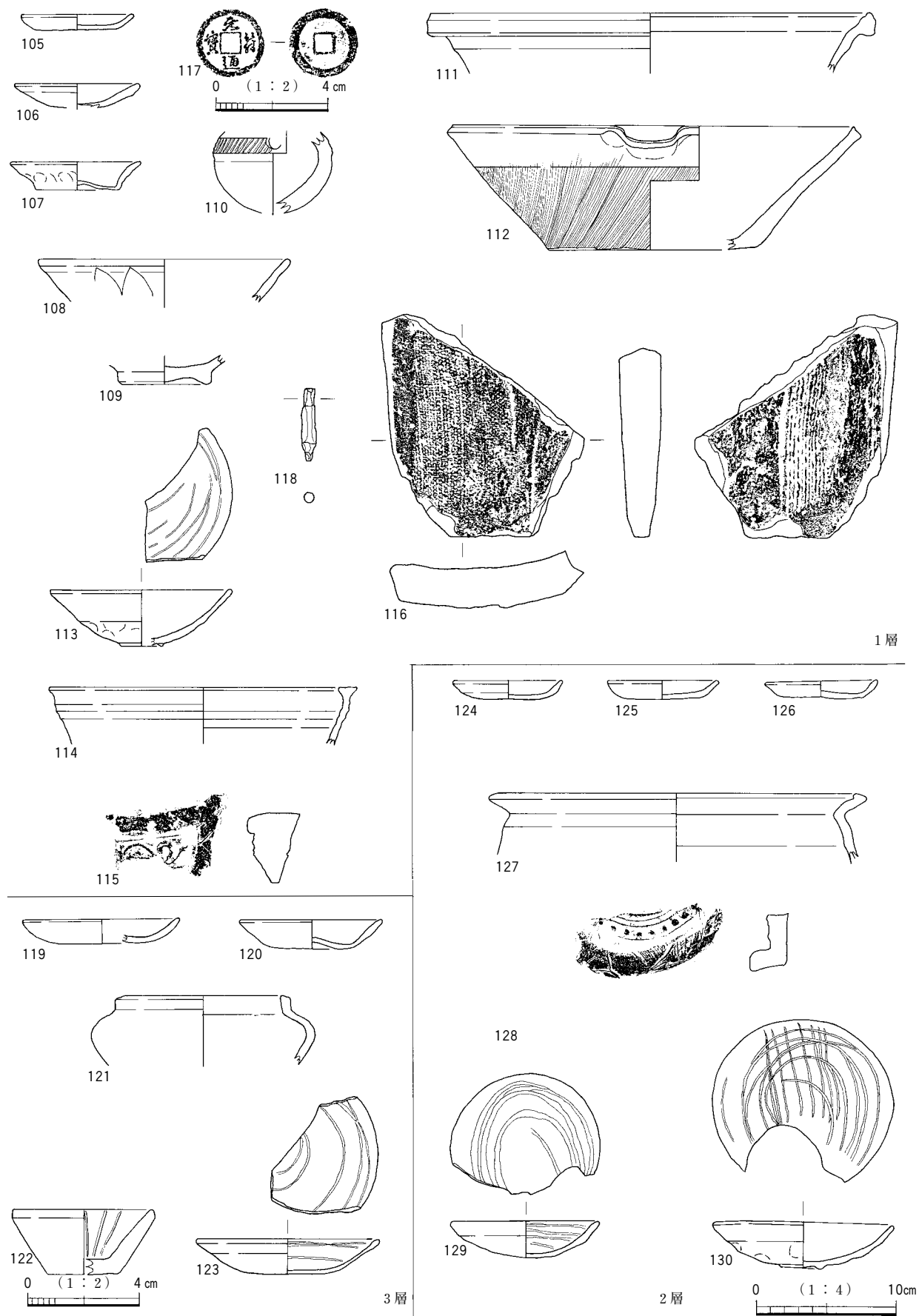


图31 06-2-2 調査区包含層出土遺物

の幅広の蓮弁を描く。109は白磁である。底部のみ出土。削りだしによる逆三角の短い高台をつくりだす。見込み部に沈線がめぐる。内面のみ施釉、高台内外含め外面煤付着。110は須恵器の甗である。古墳時代の遺物の混入品。111は東播系須恵器の鉢である。口径16.9cmを測る。外反する口縁部に口縁端部は面を持ち上下に拡張する。端部内面には段を持つ。112は常滑焼の鉢である。緩やかに開く体部に、口縁端部は面をもつ。体部外面には7条/cmのハケ、口縁部はヨコナデが施される。端部外面には沈線がめぐる。内面緑釉。113は瓦器碗である。口径12.8cm、器高4.0cmを測る。底部に貼り付けの断面3角形の小さな高台をもつ。内面に渦状の暗文。体部外面にユビオサエ、口縁部にヨコナデを施す。口縁端部は丸くおわる。和泉型Ⅳ-2期に比定されよう。114は土師質の羽釜である。115は軒平瓦である。瓦当面に唐草文が残る。116は平瓦である。残長13.5cm、残幅14.5cm、厚さ3.0cmを測る。凸面には縄目、凹面には布目が残る。117は元符通宝である。1098年初鑄の北宋銭である。118は金属製品である。酸化が激しく鉄製品と思われるが、詳細は不明である。

第2層からは124~130が出土した。124~126は土師器皿である。124は口径7.8cm、器高1.3cmを測る。125は口径7.7cm、器高1.3cmを測る。126は口径7.8cm、器高1.3cmを測る。底部は内外面ナデ、口縁端部は丸くおわる。127は羽釜である。口径は25.6cmを測る。口縁端部は強く外反し、口縁端部は丸くおわる。端部内面に段を持つ。大和型である。128は軒丸瓦の瓦当部である。破片のため詳細は不明であるが、巴文をもつと思われる。129・130は瓦器碗である。129は口径10.5cm、器高2.6cmを測る。体部外面はナデ、口縁部にはヨコナデを施す。口縁端部は丸くおさめる。内面に渦状の暗文が施される。和泉型Ⅳ-3~4期に比定されよう。130は口径12.7cm、器高3.3cmを測る。底部に貼り付けによる断面3角形の小さな高台をもつ。内面に荒い並行線状の暗文、その上から渦状の暗文を施す。体部外面にユビオサエ、口縁部にヨコナデを施す。口縁端部は丸くおわる。和泉型Ⅲ-3期に比定されよう。

第3層からは119~123が出土した。122はミニチュアの播鉢である。口径5.0cm、器高2.4cmを測る。播り目を型押しにて凸状に作り出す。表面に燐粉状の光沢があり、彩色されていた可能性がある。119・120は土師器皿である。119は口径11.2cm、器高1.7cmを測る。120は口径10.2cm、器高2.1cmを測る。わずかに凹む底部から、緩やかに開く口縁部をもつ。内外面はナデで整える。121は瓦質の小壺である。口径11.2cm、残存器高5.0cmを測る。横に張り出した体部に、短く直立する口縁部をもつ。口縁端部は面をもつ。123は瓦器碗である。口径は13.0cm、器高は2.5cmを測る。体部外面はナデ、口縁部にはヨコナデを施す。口縁部はやや肥厚。端部は丸くおさめる。内面に渦状の暗文が施される。和泉型Ⅳ-3~4期に比定されよう。

4. 小結

本調査区は3つの調査区の真中に位置する。3調査区のうち最も豊富な遺構・遺物が出土したのは当調査区の3面にあたり、検出した遺構は大小あわせて約100基を数える。3棟分の建物と、その敷地を区画すると考えられる南北溝と東西溝を確認しており、その距離から条里地割の影響をうかがわせる結果となった。検出した3棟の建物は切りあう形であったが、ピット内からの遺物の量は少なく、時期を比較するのは困難である。この周辺における遺構も同様に複雑に切りあっており、複数期にわたって掘削・削平が行われたことがうかがえる。遺物は14世紀中頃から15世紀前半の遺物が多く出土した。瓦器碗では和泉型が多数を占めたが、少ないながら大和型瓦器碗3点を確認した。なお、包含層出土の1点を含む計3点の貨銭が本調査区から出土していることも興味深い。

06-2-3 調査区

1. 第1-1面〔図32・33 図版14〕

現地表面から約1mは近現代の産業廃棄物が堆積する攪乱（第0層）で乱されている。以下、T.P.+2.9~3.0m前後に暗灰色7.5Y3/1細~粗砂層（第1層）が存在する。この上面を第1-1面とした。

攪乱は北側と南側を東西方向に並行する2本の溝状となり、調査区を深くえぐる。その深さは第2層にまで達する。近世以前の耕作土として使用されたと考えられる安定した堆積土は、この2本の溝状の攪乱に挟まれるかのように、幅3m強のかまぼこ状に残るのみである。近現代のコンクリート製の井戸（1井戸）が1基見つかった。

第1層は近世以降に堆積した土砂ではあるが、多様な遺物が出土した。このうち131~137を図化した。131は土師器皿である。口径は7.5cm、器高1.3cmを測る。粘土板を粗く手づくねで成形し、なでにて整えた小皿である。色調は浅黄色2.5Y7/1を呈する。132は須恵器の破片である。鋸歯文が線刻されている。

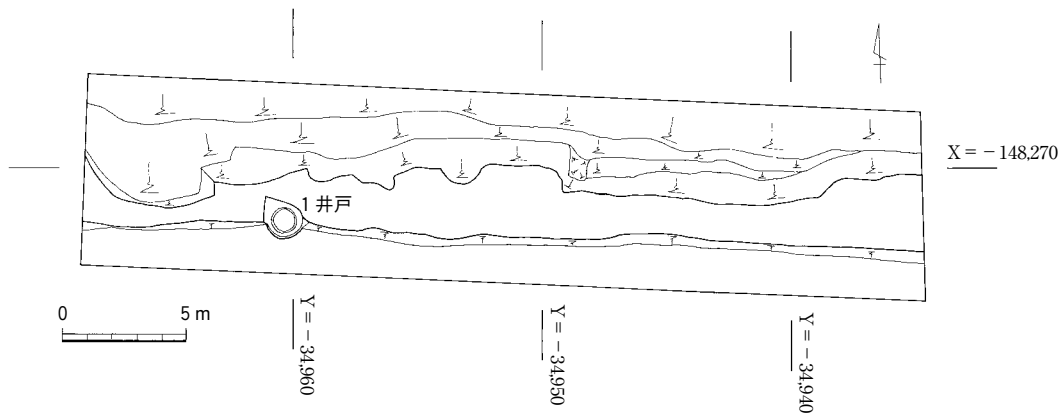


図32 06-2-3 調査区第1-1面平面図

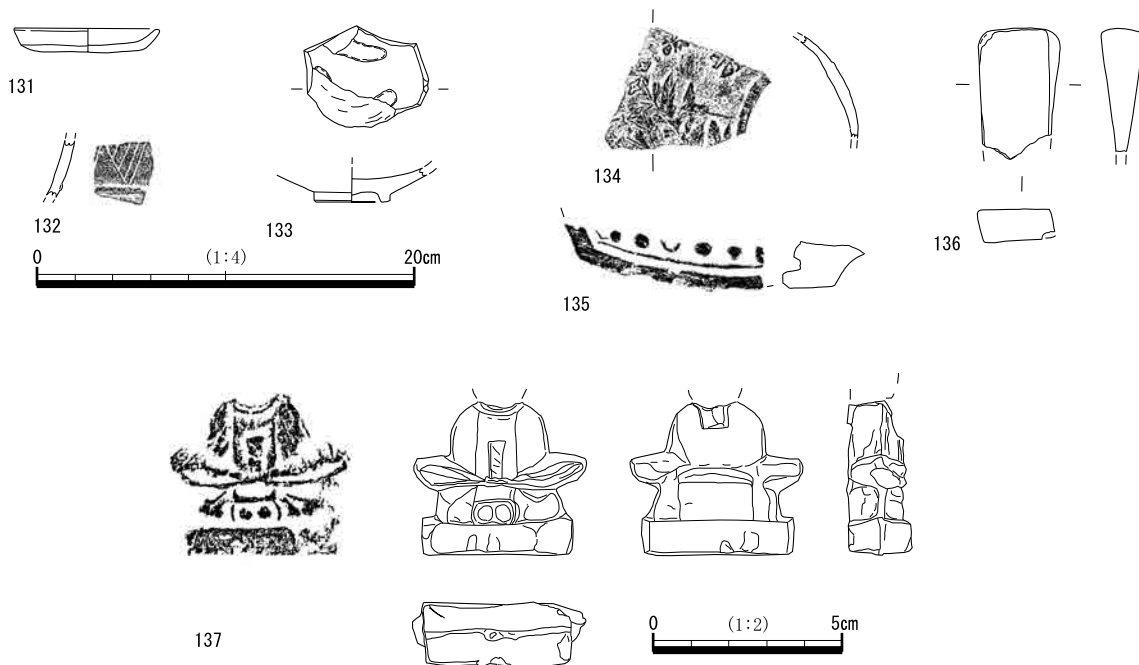


図33 第1層出土遺物

古墳時代の器台であろうと思われる。133は唐津焼の皿である。高台は削りだしている。見込みには砂目跡がみられる。釉は体部全体にかけてられている。色調は灰白色5Y7/1を呈する。17世紀前半頃の所産であろう。134の火舎の破片は近世の所産である。胎土はやや軟質であるが瓦質である。色調は灰白色5Y7/1を呈する。草花の図柄と思われる文様は型押しで成形される。円形の窓を有する。135の軒平瓦は顎の下部のみが残存する。顎部の内側は削られている。瓦当面には連子文が配される。中世の瓦であろう。136は砥石である。残長7.0cm、幅4.5cm、厚さ2.4cmを測るが、半分程度は欠落していると思われる。かなり使い込まれており、両面共に下端部が磨り減っている。四方の面が使用されている。筋状の擦痕もみられる。表面には煤の付着がみられた。137は土人形である。天神像もしくは雄雛を模ったのであろう。残高4.1cm、厚み1.7cmを測る。両面からの型押しにて成形されている。

2. 第1-2面〔図32〕

T.P.+2.5~2.8m前後に堆積するオリーブ黒色7.5Y4/1細砂~粗砂の上面を第1-2面とした。十字状に走る素掘り小溝や土坑・ピットなど約30基を検出した。遺構は比較的東側に集中して見られた。

12ピット〔図32・33〕

調査区東端で検出されたピットである。直径0.15m、深さ0.38mを測る。埋土にはオリーブ黒色7.5Y3/1粗砂が入る。遺物は出土していない。規模、埋土において当調査区で見られる標

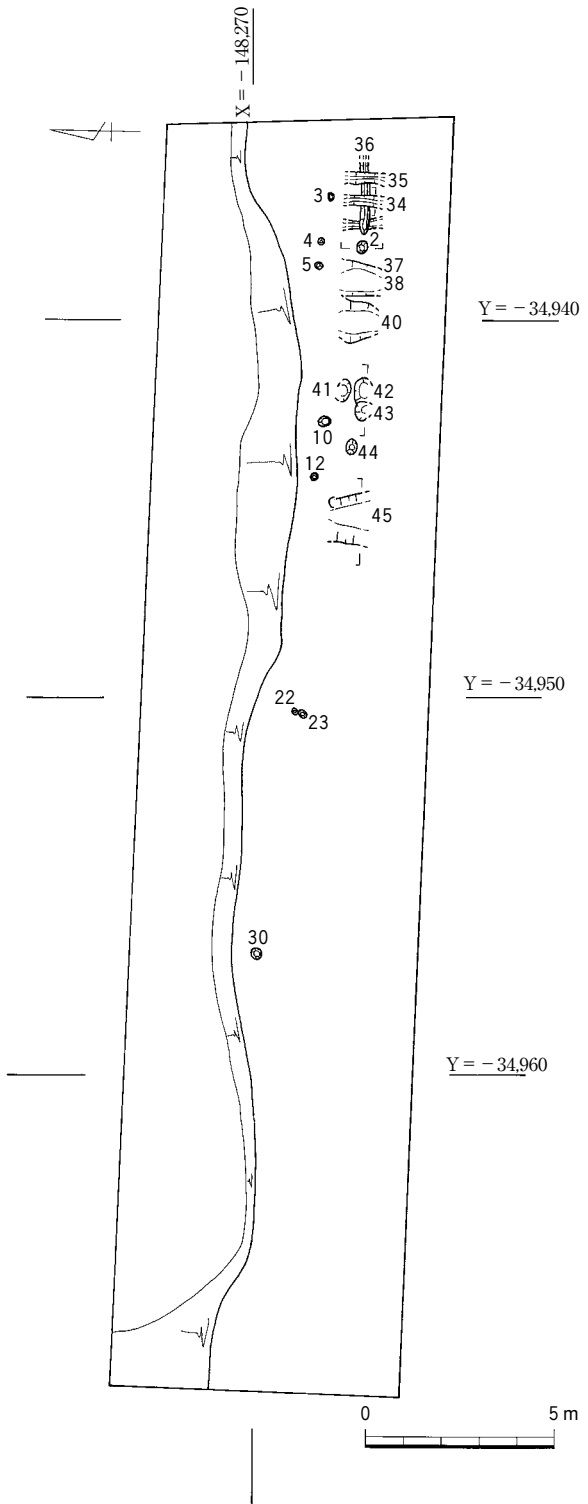


図34 06-2-3調査区第1-2面平面図

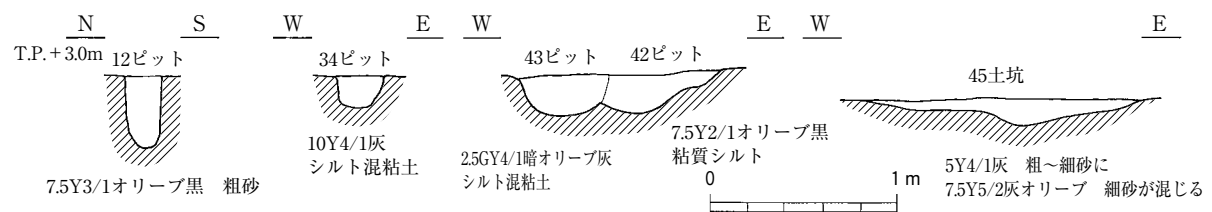


図35 第1-2面遺構断面図

準的なピットである。

45溝〔図32・33〕

調査区の中央よりやや東寄りで検出した土坑である。長軸0.95m、短軸0.8m以上、深さ0.08mを測る。埋土は灰色5Y4/1粗～細砂に灰オリーブ色7.5Y5/2細砂が入る。唐津焼の小片が出土した。

第1－2層出土遺物〔図36 図版14〕

第1－2面の基盤層である第1－2層からは138～147が出土した。14世紀から15世紀にかけての遺物が多く出土した。代表的なものを図化した。

138、139は土師器皿である。138は口径8.5cm、器高1.4cm、139は口径8.5cm、器高1.4cmを測る。粘土板を手づくねにて成形し、体部から口縁部をなでている小皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。140、141は近世の唐津焼椀である。見込みと高台脇まで施釉されている。高台部を削りだしている。

142は中国製青磁椀口縁部の小片である。やや退化した鎬蓮弁が片切り彫りされた後に施釉されている。釉調は灰オリーブ色7.5Y5/3である。

143は中国製青磁椀である。畳付、高台裏の一部を除く全面に施釉されている。釉調は灰オリーブ色5Y5/3を呈する。見込みには花草文が印刻されている。

144～146は瓦器椀である。144の瓦器椀は口径10.8cm、残高2.1cmを測る。内面には暗文が痕跡で残る。外面はなでるが、上部はヨコナデで仕上げている。底は欠落しているが、高台は無いと思われる。大和型のⅣ－B期に比定されよう。145の瓦器椀は口径10.8cm、残高2.1cmを測る。内面体部には暗文が1条見られる。外面はなでている。和泉型のⅢ－4～5期に比定されよう。146の瓦器椀は口径12.2cm、器高3.1cmを測る。内面体部には渦巻状の暗文が施される。外面はなでている。上部はヨコナデを施している。和泉型のⅣ－3～4期に比定されよう。

147は方形の火鉢の小片である。外面口縁部の直下に2条の凸帯が貼り付けられ、その間に幾何学文が刻印されている。全体になでられ平滑に仕上げられている。

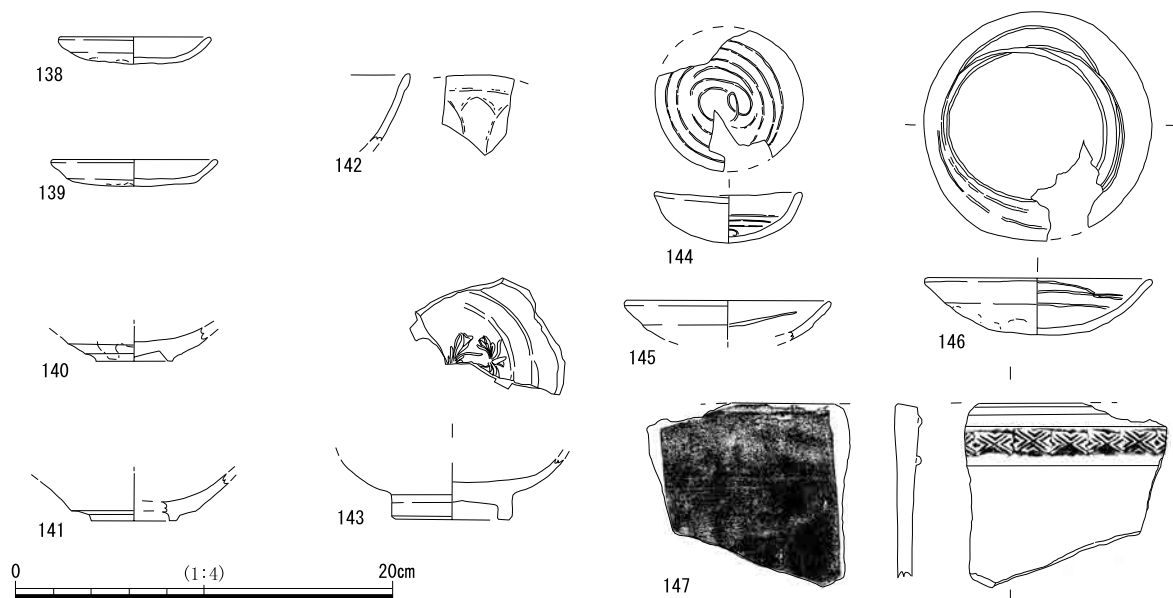


図36 第1－2層出土遺物

3. 第1-3面〔図37・38〕

T.P.+2.3~2.5m前後に灰オリーブ色5Y5/2粗砂層が存在し、その上面を第1-3面とする。第1および2調査区で第3面として認識している面と対応すると考える。ピットや土坑を約30基検出した。主な遺構として、土師器皿を内包する19・28土坑、西端において南北走向する2溝がある。この他柱根や根石の遺存するピットを検出した。

2溝〔図39〕

調査区西端で検出された、主軸を南北方向にほぼ正方位にとる溝である。溝の端は南北両側ともに第0層から続く攪乱にて削平を受けている。西側の肩を調査区外へ有するため、幅11.6m以上と言うほかない。深さは0.4mを測る。断面を観察すると、当初の溝は幅が広く、深かいものであったようである。それが徐々に埋まり、縮小してゆく。埋土は大きく上層、下層と最下層に分かれる。上層は細砂~シルト混粘土で形成されている。下層は細砂混粘土で形成されている。最下層はシルト~粗砂で形成されている。いずれの層もラミナがみられるが、特に古段階の最下層はよく発達しており、水の流れが比較的速い溝であったと思われる。先述のように、溝の幅も広がったと考えられ、当初は自然な流路を利用した可能性がある。溝の埋土を掘りきった段階で、残存する南北両端の底のレベルを計測すると、北側に5cmほど傾斜している。南側から北側への流れがあった可能性が考えられる。

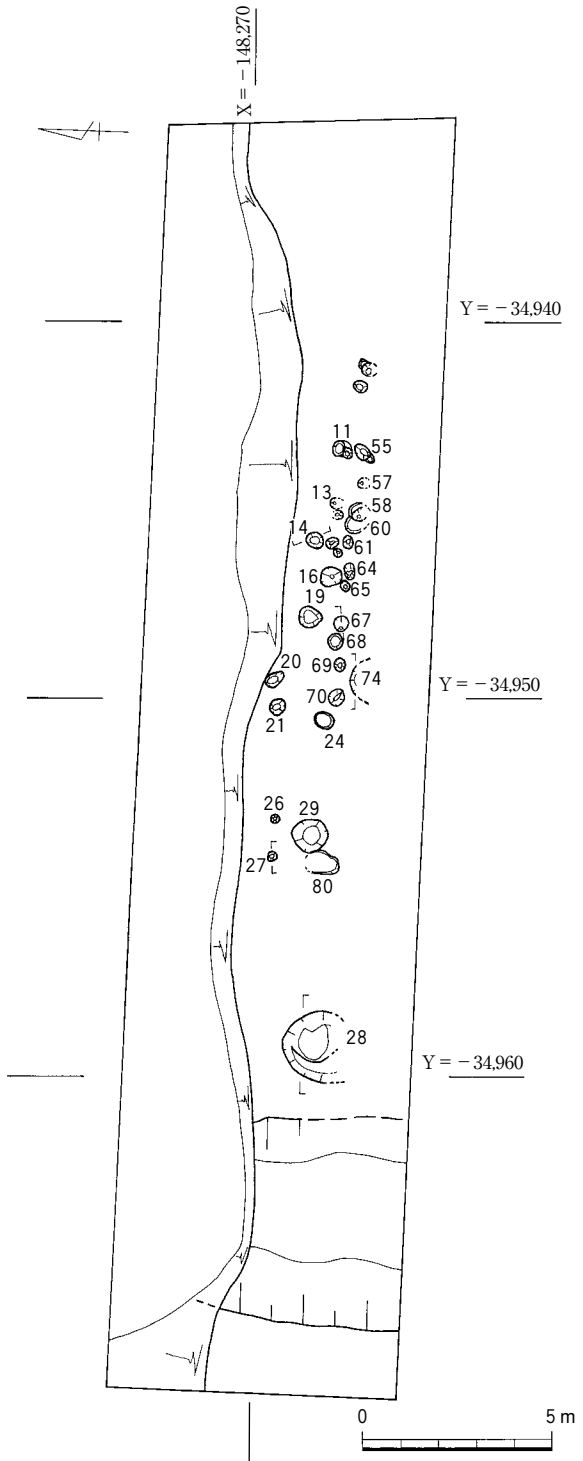


図37 06-2-3調査区第1-3面平面図

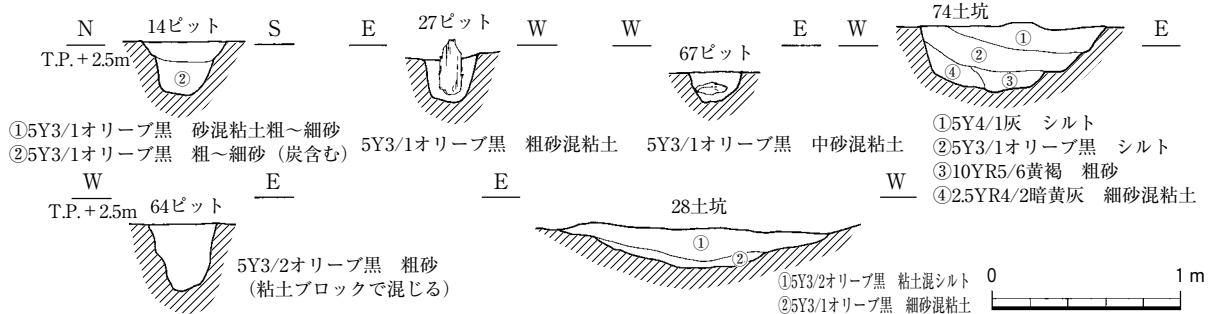


図38 第1-3面遺構断面図

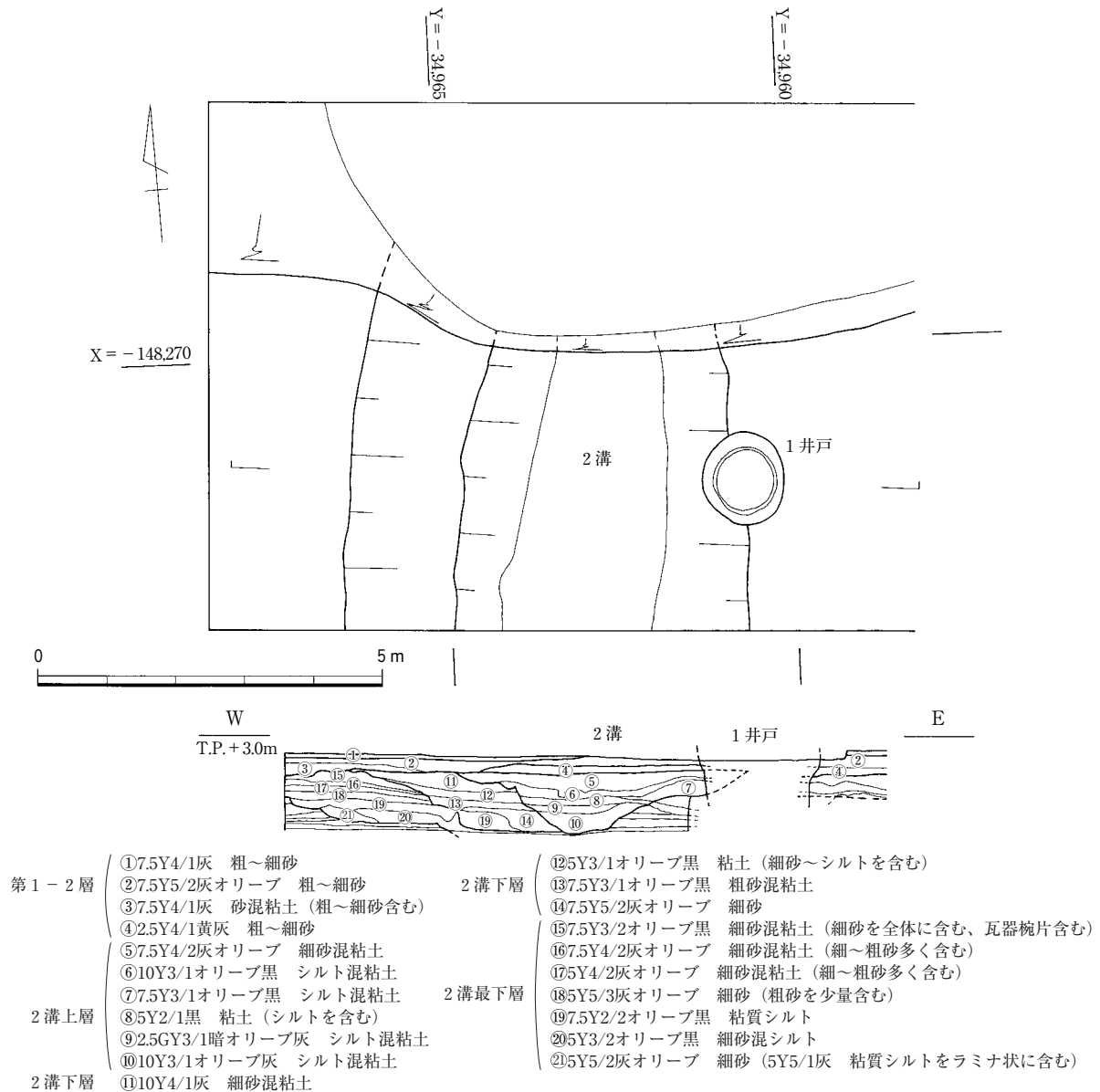


図39 2溝平・断面図

2溝出土遺物〔図41・42 図版15・16〕

2溝上層から148～167が出土した。

148は瓦質鉢である。口径21.0cmを測る。体部外面は指圧の跡が残るが、横ハケを施した後になでて整えている。口縁端部はヨコナデを施し、外側に外反させている。

149～151は土師器皿である。149は口径8.2cm、器高1.9cmを測る。口縁部はヨコナデにて尖り気味におさめる。底部から体部はなでて仕上げるが、底部外面にはユビオサエの跡が残る。150は口径7.0cm、器高1.5cmを測る。口縁部はヨコナデにて尖り気味におさめる。体部外面に横ハケを施す。体部から底部はなでて仕上げるが、ユビオサエを施し、指圧痕が残る。151は口径6.6cm、器高1.8cmを測る。口縁部はヨコナデにて尖り気味におさめる。体部内面にヨコハケを施す。底部から体部はなでて仕上げるが、ユビオサエを強く施し、体部外面を外反させる。指圧痕が強く残る。

152は瀬戸焼灰釉の壺である。造りはやや粗い。体部外面には半透明色の釉がかかる。回転ナデで成形されている。底部から体部にかけて残存する。糸切りにて轆轤より離されている。底径7.2cm、残高4.4

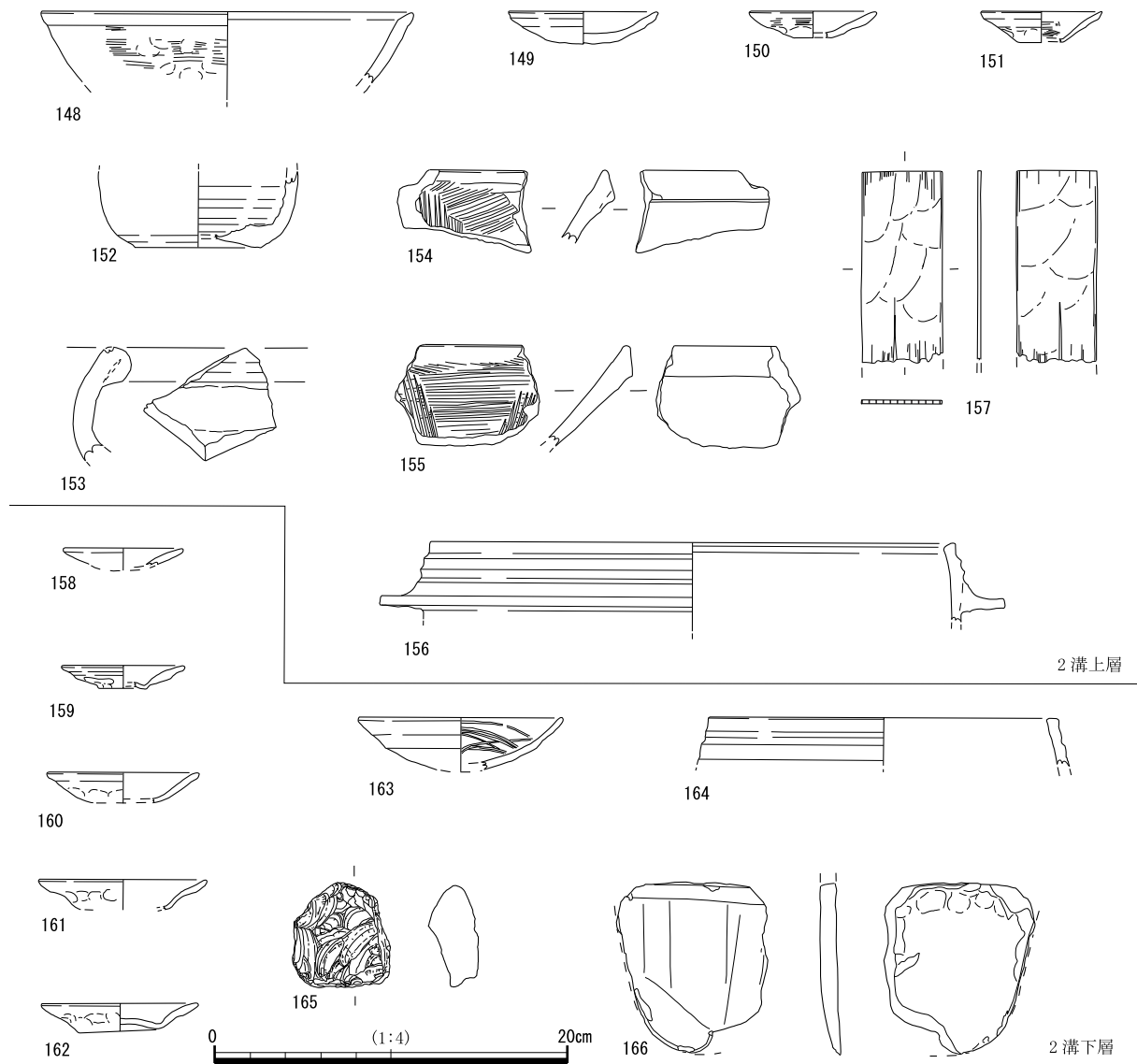


図40 2 溝出土遺物（1）

cmを測る。平安時代の所産であろう。色調は灰白色7.5Y7/1を呈する。153は備前焼壺の口縁の破片である。口縁端部を折り返し丸める。焼成はやや甘く、にぶい赤褐色5YR4/4を呈する。

154、155は瓦質播鉢の破片である。いずれも体部外面をヘラケズリする。外面の口縁直下には三段の弱い段をもつ。内面は横方向のハケを施した後、櫛状の工具にて播り目を入れている。口縁端部はヨコナデを施し、やや凹む。

156は瓦質羽釜である。口径は29.2cmを測る。内面は板ナデを施す。全体にヨコナデで仕上げる。鏝の下から下位は煤が付着する。

157は板状木製品である。下部は欠落している。残長10.8cm、幅4.7cmを測る。厚みは0.2cmと薄い。表面は両面ともに平滑に削られている。

167は丸瓦である。残長17.7cm、残幅14.2cm、厚さ2.5cmを測る。凹面には布目の痕が残る。凸面は縦方向のケズリが見られる。

2 溝下層からの出土遺物もいくつか図化できた。158～162は土師器皿である。158、159のように体部は直線的に立ち上がるものと、161、162のように口縁部を強いヨコナデにて外反させるものと、その中

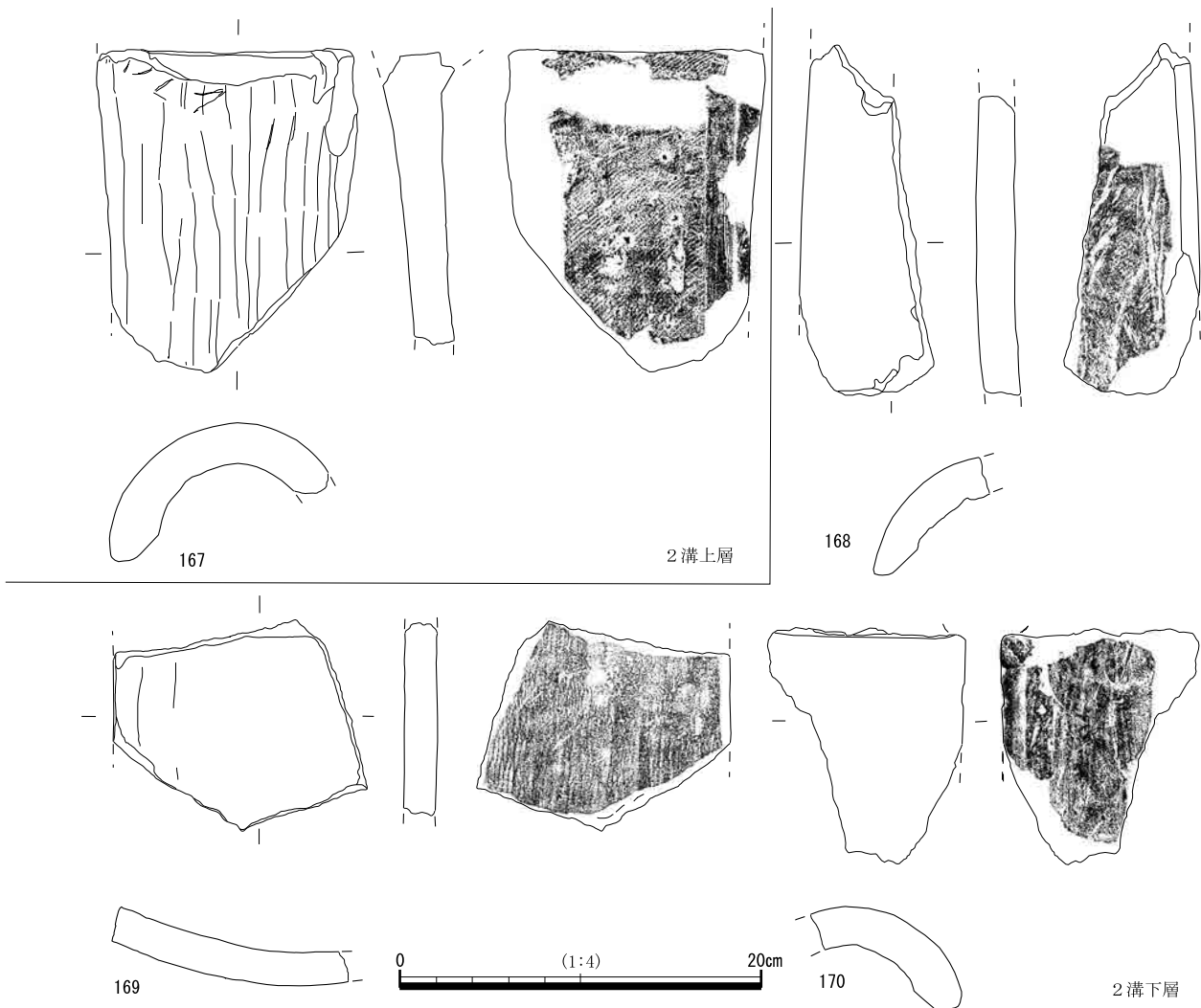


図41 2 溝出土遺物（2）

間形態のような160にわかれる。

163は瓦器碗である。口径11.4cm、器高3.0cmを測る。内面には渦状の暗文が施される。外面は下部にユビオサエの跡が残る。上部はヨコナデで仕上げている。底は欠落しているが、高台はないと思われる。和泉型のIV-3～4期に比定されよう。

164は瓦質羽釜の口縁部の破片である。口径18.6cmを測る。外面に3段の段をもつ。体部以下は欠損するが、口縁部は、やや長く、直立している。

165はサヌカイト製の火打ち石である。長さ6.0cm、幅5.5cm、厚み2.9cmを測る。火打ち部は細かく調整されている。

166～170は瓦である。166は面土瓦である。残長14.7cm、厚さ1.0cmである。全体をなでて仕上げる。隙間を埋めるために特別に作成されたのであろう。ユビオサエの痕がみられる。168の丸瓦は残長19.5cm、残幅6.5cm、厚さ2.2cmを測る。凹面には布目の痕が残る。169の平瓦は残長11.9cm、残幅13.0cm、厚さ1.8cmを測る。凹面には縄目の痕が残る。170の丸瓦は残長13.0cm、残幅11.0cm、厚さ2.3cmを測る。凹面には布目の痕が残る。凸面はなでて仕上げる。

14ピット〔図38〕

調査区中央部で検出されたピットである。直径0.44m、深さ0.28mを測る。埋土にはオリブ黒色5Y3/1細砂混じり粘土が入る。遺物は出土していない。

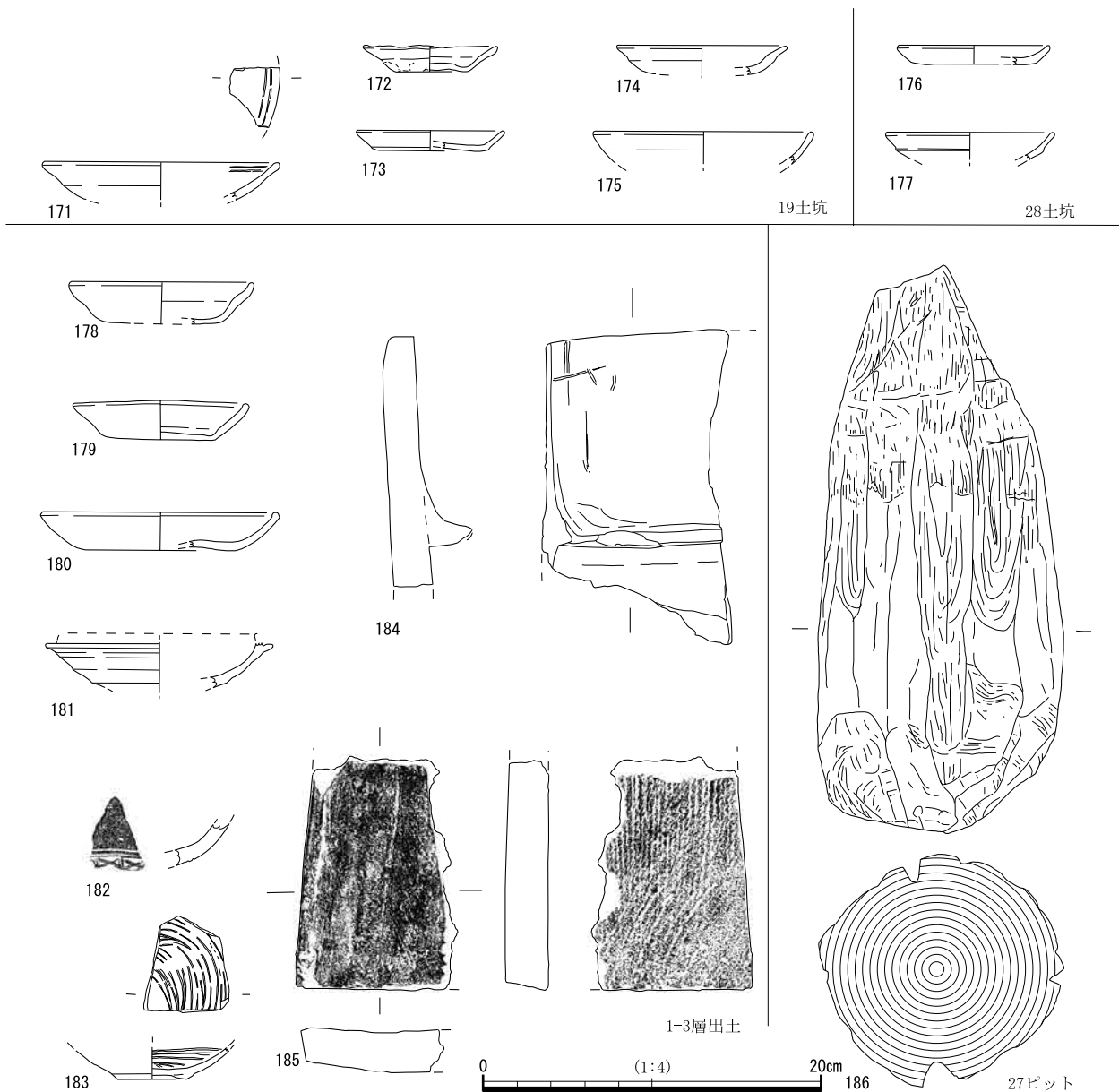


図42 第1～3面直上および遺構出土遺物

27ピット〔図38・42〕

調査区中央部で検出されたピットである。直径0.2m、深さ0.32mを測る。埋土には5Y3/1オリーブ黒粗砂混じり粘土が入る。直径14.5cm、残長33.5cmの柱根（186）が残存する。柱の下先端は、削られ、丁寧加工されている。遺物は土師器皿などが出土した。

67ピット〔図38〕

調査区中央部で検出されたピットである。直径0.26m、深さ0.16mを測る。埋土には5Y3/1オリーブ黒中砂混じり粘土が入る。根石が底に残存する。

74土坑〔図38〕

調査区中央部で検出された土坑である。大半を攪乱によって削られるため、全体形は不明。残存長軸1.0m、残存短軸0.2m、深さ0.36mを測る。埋土には黄褐色10YR5/6粗砂～暗黄灰色2.5YR4/2細砂混粘土が入る。遺物は出土していない。

64ピット〔図38〕

調査区中央部で検出されたピットである。直径0.38m、深さ0.34mを測る。埋土にはオリーブ黒色

5Y3/2粗砂が入る。遺物は出土していない。

19土坑〔図42〕

調査区中央部で検出された土坑である。直径1.2m、深さ0.2mを測る。埋土には黒褐色2.5Y3/1細砂混粘土が入る。土師器皿（172～174）、瓦器椀（171・175）が出土した。

172～174は土師器皿である。172は口径7.8cmを測る。口縁部はヨコナデにて尖り気味におさめる。体部から底部はなでて仕上げるが、底部外面にはユビオサエの跡が残る。173は口径8.6cm、器高1.2cmを測る。粘土板を手づくねにて成形し底部はナデ、体部は内外面ともヨコナデ、端部は丸く仕上げる。174は口径9.8cmを測る。口縁部はヨコナデを強く施す。体部から底部はユビオサエの後、なでて仕上げる。

171・175は瓦器椀である。171は小片であり口径は不確かであるが、13.8cmと推定した。全体になでて仕上げる。内面の口縁端部直下に2条の圏線状の暗文が見られる。175は口縁部のみである。ヨコナデが残存部全体に見られる。171、175は傾きなどから考え、和泉型のⅣ－3～4期と推定される。

28土坑〔図38・42〕

調査区中央やや西寄りで検出された土坑である。攪乱により南半を切られる。直径2.0m、深さ0.3mを測る。埋土にはオリーブ黒色5Y3/1細砂混じり粘土が入る。土師器皿（176・177）・平瓦が出土した。

176・177は土師器皿である。176は口径8.8cm、器高1.1cmを測る。粘土板を手づくねにて成形し底部はナデ、体部は内外面ともヨコナデ、端部は丸く仕上げる。177は口径9.8cm、残高1.6cmを測る。底部は欠落、体部は内外面ともヨコナデ、特に上部は強くナデを施し、段を有する。端部は丸く仕上げる。

第1－3面直上出土土器〔図42 図版14・16〕

第1－3面の基盤となる第1－3層からは土師器・瓦器・瓦などが出土した。主要なものを図化した。

178～180は土師器皿である。178は口径11.0cm、器高2.4cmを測る。内外面の底部はナデ、口縁部はやや強いヨコナデで仕上げ、外反させる。179は口径10.2cm、器高2.3cmを測る。内外面の底部はナデ、口縁部はヨコナデで仕上げる。端部は丸く仕上げる。180は口径13.8cm、器高2.2cmを測る。内外面の底部はナデ、口縁部はヨコナデで仕上げる。体部は内湾し、口縁端部は丸くおさめる。いずれも底部が平坦であり、出土した土師器皿の中ではやや古いものである。14世紀前半の遺物であろう。

181は須恵器杯身である。口縁端部は欠けているが、口径は11.7cm程度であろう。全体を回転ナデで仕上げるが、外面下部には回転ヘラケズリを施している。

182は瓦質の土器小片である。幾何学文を連続して刻印している。火舎の一部であろう。

183は瓦器椀である。残高4.0cm、高台径1.8cmを測る。体部内面には渦巻状の暗文が細かく施される。外面はなでている。和泉型のⅢ－3～4期に比定されよう。

184は道具瓦である。残長18.6cm、残幅11.1cm、厚み2.3cmを測る。長細い突起部が貼り付けられている。全体になでて仕上げられる。

185は平瓦である。残長13.6cm、残幅13.0cm、厚さ2.5cmを測る。凹面には縄目の痕が残る。凹凸面とも、一部ハケ状工具でなで消されている。各面はケズリによって整えられている。

4. 第2面〔図43〕

T.P. + 2.1~2.3m前後にオリーブ灰色10Y5/2細砂層が存在し、その上面を第2面とする。

第1 - 2・3面に比して遺構は極端に少ない。調査区東端にピット・土坑を計5基数えるのみである。

第2面の基盤層である第2層にはほとんど遺物を含まない。上部層から出土した少量の遺物は第2面の攪拌された場所から出土したものと思われる。この層を2'層とした。当層から出土する遺物の時期も上層と変わりはないものと思われる。

6ピット〔図43〕

調査区東端で検出されたピットである。隣り合う土坑7に東半分を切られる。残存径0.4m、深さ0.1mを測る。埋土には黒褐色2.5Y3/1細砂~粗砂が入る。遺物は出土していない。

7土坑〔図43〕

調査区東端で検出された土坑である。長径1.2m、短径1.0m、深さは0.24mを測る。埋土はオリーブ黒色5Y3/1粘土混じり細砂~粗砂である。

遺構内からは187~189が出土した〔図44、図版14〕。187は土師器皿である。口径7.8cm、器高0.9cmを測る。粘土板を手づくねにて成形し底部はナデ、体部は内外面ともヨコナデ、端部は丸く仕上げる。188・189は瓦器碗である。188は口径11.8cm、残高2.0cmを測

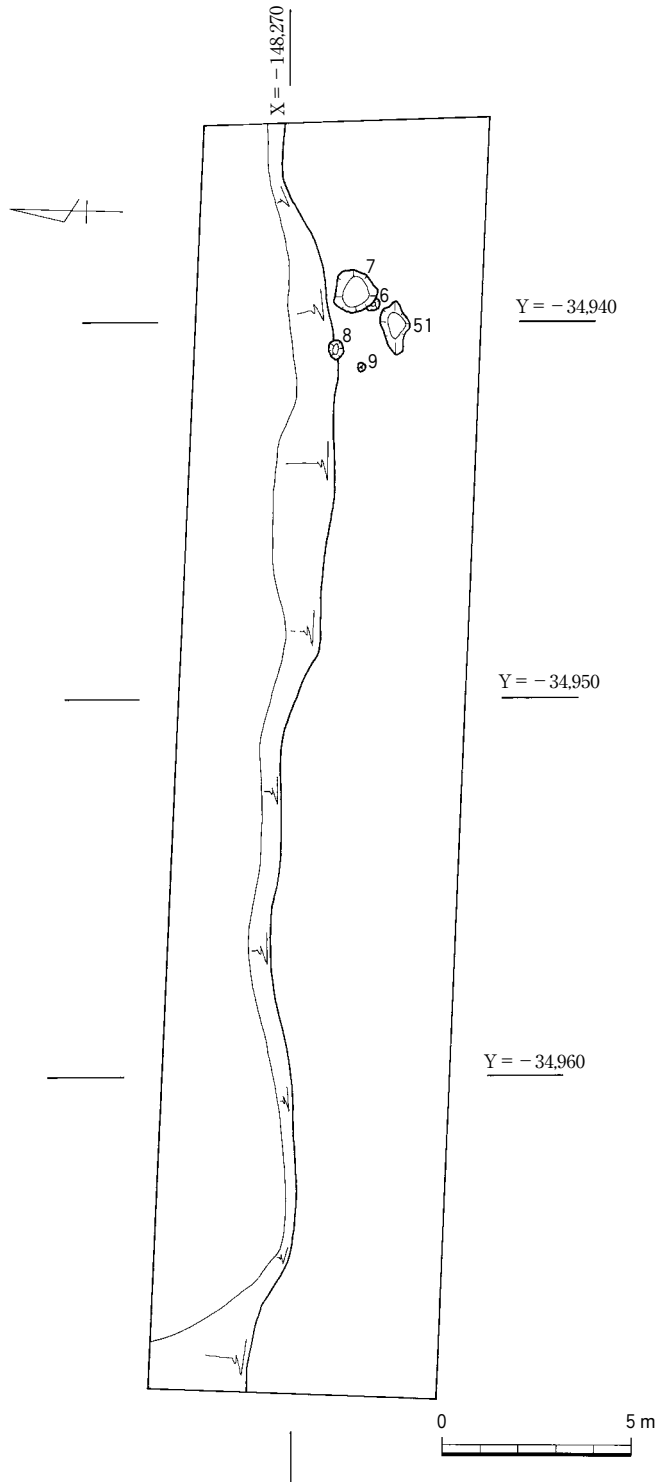


図43 06-2-3調査区第2'面遺構平面図

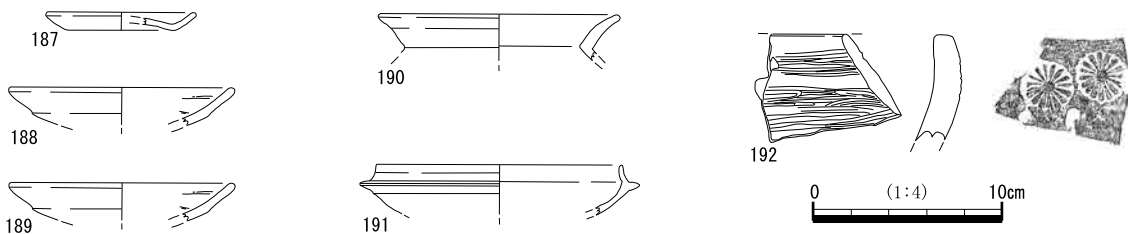


図44 第2'層遺構および精査時出土遺物

る。内面には渦状の暗文が施される。外面はなでている。上部はヨコナデで少し外反させている。底は欠落しており判別し難いが、和泉型のⅣ－3～4期に比定されよう。189は口径12.8cm、残高2.0cmを測る。内面には渦状の暗文が施される。外面はなでている。上部はヨコナデを施している。底は欠落しているが、高台が無ければ、和泉型のⅣ－3～4期に比定されよう。

8ピット〔図43〕

調査区東端で検出されたピットである。直径0.5m、深さ0.2mを測る。埋土にはオリーブ黒色10Y3/1粘土混じり細砂～粗砂が入る。遺物は出土していない。

9ピット〔図43〕

調査区東端で検出されたピットである。直径0.2m、深さ0.15mを測る。埋土には黄灰色2.5Y4/1細～粗砂が入る。遺物は出土していない。

51土坑〔図43〕

調査区東端で検出された土坑である。長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る。埋土にはオリーブ黒色7.5Y3/2粘土混細砂が入る。遺物は出土していない。

第2層上部において第1－3層の攪拌層が存在する。第2'層とした。数点の遺物が出土した。192のように中世段階の遺物もあるが、古代以前の遺物を巻き込んでいる部位であることがわかる。190は古墳時代の土師器甕である。なでて仕上げられる。191は須恵器、口径13.0cmを測る。回転ナデで仕上げている。6世紀の遺物である。192は瓦質火鉢の破片である。内面は横方向の細かいミガキが施される。体部外面には菊花文を印刻する。全体に平滑に仕上げられている。14世紀の所産である。

5. 小結

出土した遺構、遺物から第1－1面は近世以降の面、第1－2面は上位の土の堆積状況、検出した小溝、井戸などから、近世段階は耕作地として使用されていたと考えられる。

第1－3面は中世の遺構面である。ほかの調査区では第3面として呼称している面と同一面と思われる。当面からも多数のピットや土坑、溝を検出した。柱根や根石の遺存するピットの存在から掘立柱建物が存在した可能性が高い。14世紀中頃～15世紀前半の遺物の出土が多くみられた。

遺構は調査区の東西端に多く、特に東側にはピットや小土坑が集中する。西の端で検出された南北に走る2溝は、検出した残長は短くはあるが、ほかの地区にも見られる東西もしくは南北方向を正方位で走る、いわゆる区画溝と同様の性格を有すると思われる。

第2面も中世の遺構面である。遺構出土の遺物が少なく、第1－3層の攪拌層が存在するなど、時期の判定は難しいが、14世紀前半～中頃の遺物が多く見られる。

当地区も各層・面にて多様な遺物の出土が認められるが、碎片が多かった。後世の人為的営力によりかなり大きく改変されたようである。また、瓦の出土数が多いのも特徴といえよう。

第5章 花屋敷遺跡06-2における花粉・珪藻・植物珪酸体分析

はじめに

花屋敷遺跡は、玉串川が形成した沖積リッジ上に立地する（図45～47）。遺跡周辺では、おもに古墳時代以降の流路形成に伴い発達した帯状をなす微高地である沖積リッジとして認識される小阪合分流路、そこから分岐した萱振、若江分流路跡と、それらに挟まれた排水不良がちな後背湿地からなる地形配列が認められる（別所,1999）。

今回の分析では、14世紀代の屋敷区画溝（2調査区 12溝）を埋積した堆積物について珪藻分析、花

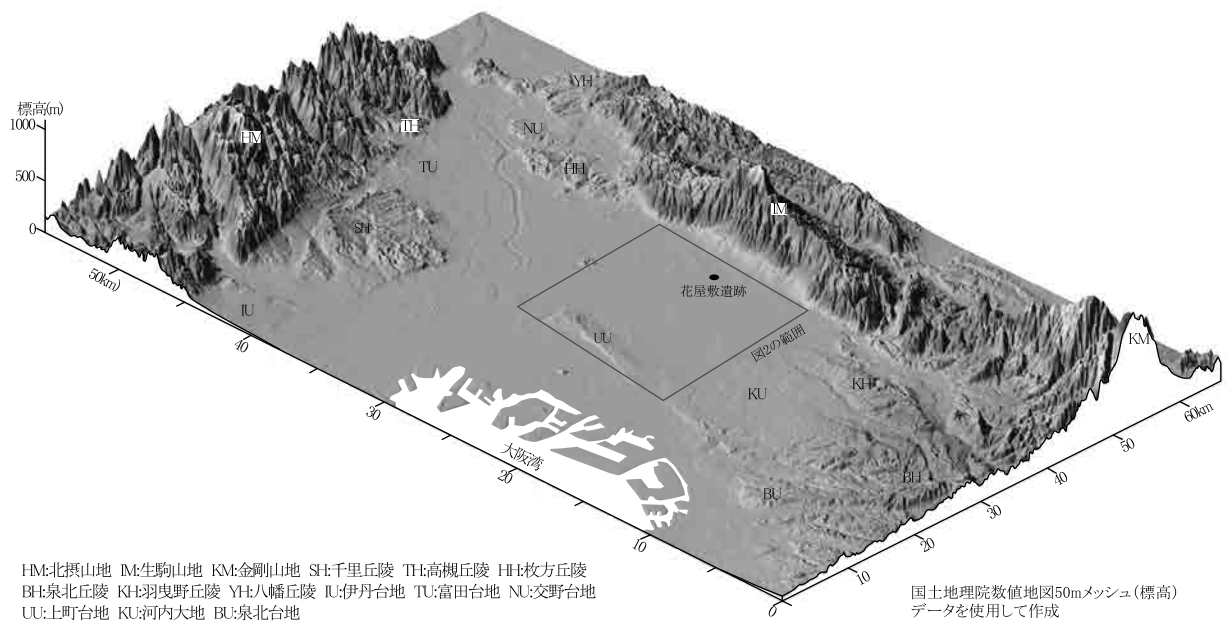


図45 花屋敷遺跡の位置

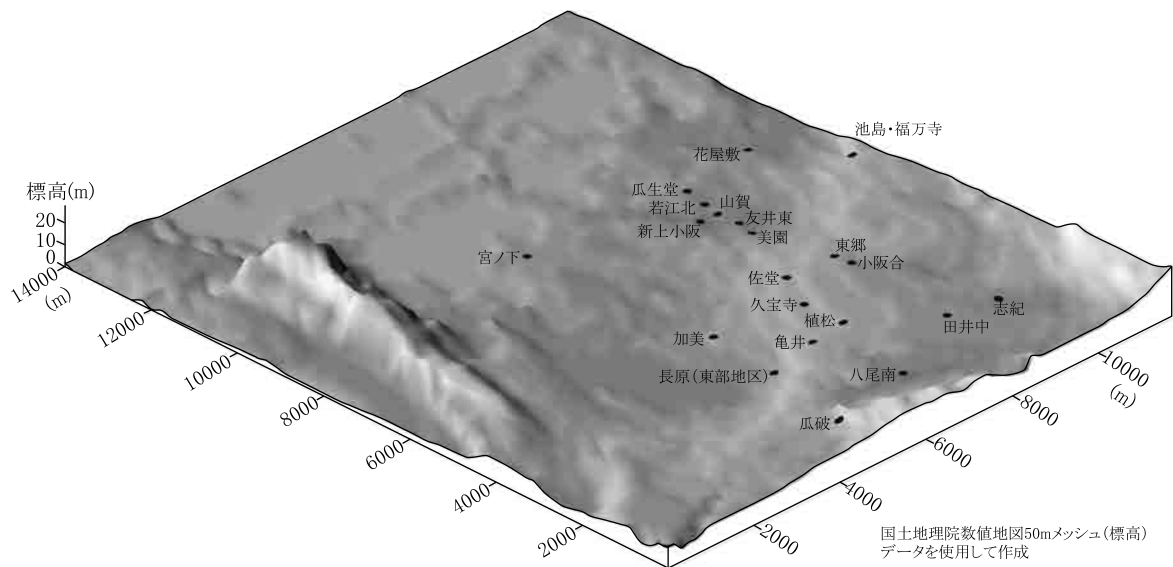
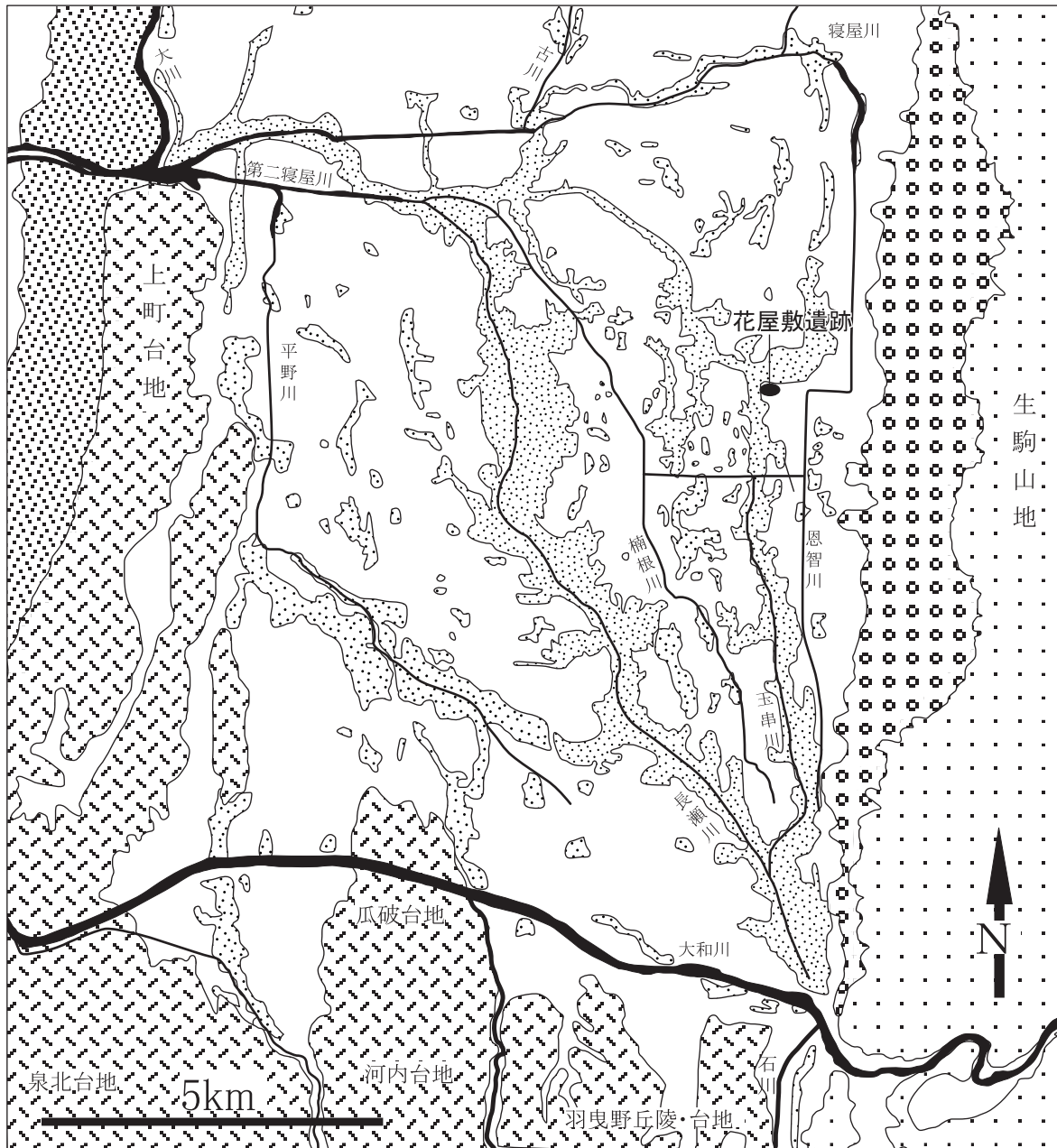


図46 花屋敷遺跡の周辺の地形起伏と考古遺跡



凡例
 □ 沖積低地 ▨ 沖積リッジ ▩ 砂州・浜堤 ◻ 沖積扇状地 ▧ 台地・丘陵 ▫ 山地

図47 河内平野とその周辺の地形（地形区分は、松田2001より作成）

粉分析、植物珪酸体分析を実施し、調査区およびその周辺の古環境復元を行うことが目的とされた。

1. 試料

試料は12溝の断面から採取された試料のうち、5点（試料番号1、2、4、6、7）である。なお、試料番号7は溝内埋土ではなく、遺構の基盤層である。図48に試料採取断面図を示す。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、

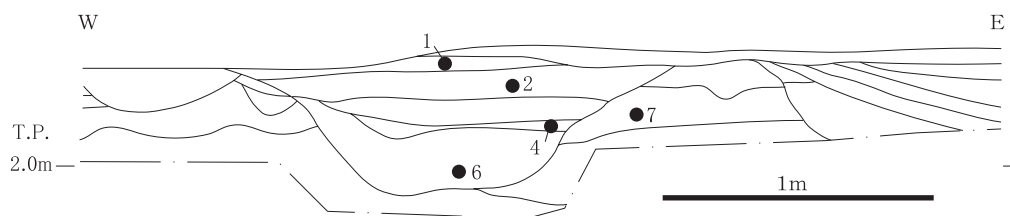


図48 12溝分析資料採取位置

珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料は、プレパラート2枚を限度に検鏡する）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、渡辺（2005）、Witkowski *et al.*（2000）などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann（1990）に従った。

同定結果は、中心類（Centric diatoms）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms）に分けた。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分した。

各種類の塩分濃度に対する区分はLowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に分ける。貧塩性種は、さらに塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境を解析するにあたって、真塩性種～中塩性種は小杉（1988）、貧塩性種は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は、Asai & Watanabe（1995）、渡辺（2005）の環境指標種をそれぞれ参考とする（表1）。珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表1に示す。

（2）花粉分析

約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9，濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（3）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、

表 1 珪藻化石の生態性区分および環境指標種群の説明

塩分濃度に対する区分 Lowe(1974)による		
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種(海水生種)	塩分濃度40.0～30.0‰に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種)	塩分濃度30.0～0.5‰に生育する種
淡水生種	貧塩性種(淡水生種)	塩分濃度0.5‰以下に生育する種
淡水生種の生態性区分		
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH	真酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
Hustedt (1937-38)による	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種
Hustedt (1937-38)による	真流水性種	流水域にのみ生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	真止水性種	止水域にのみ生育する種
主に海水域での指標種群(小杉,1988)による		
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの	
内湾指標種群(B)	塩分濃度35～26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35～12‰の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12～4‰の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35～26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26～5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水泥質干潟指標種群(E1)	30～12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12～2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水底生種群(F)	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20～2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
主に淡水域での指標種群(安藤,1990)による		
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群	
中～下流性河川指標種群(K)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群	
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
沼沢湿地付着生種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
高層湿原指標種群(P)	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域での指標種群(伊藤・堀内,1991)による		
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群	
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群	
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの	

短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2004) の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 g あたりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1 g あたりの個数に換算) を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、数値を丸めて100単位とし、100個体以下については「<100」で表示する。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表 2、3、図49に示す。珪藻化石は、試料番号 7 でやや少なかったが、溝埋土から採取された 4 試料 (試料番号 1、2、4、6) では多く産出する。完形殻の出現率も試料番号 7 が約40%と低かつ

表 2 珪藻分析結果 (1)

種 類	生態性			環境 指標種	試料番号				
	塩分	pH	流水		1	2	4	6	7
Centric Diatoms (中心型珪藻類)									
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	1	-	-	1	-
<i>Melosira varians</i> Agardh var. <i>varians</i>	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	2	2	-	-	-
<i>Cyclotella meneghiniana</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	L,S	2	6	32	-	-
<i>Stephanodiscus</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-
Araphidinea(無縫溝類)									
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>perminuta</i> (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	1
<i>Pseudostaurosira brevistriata</i> (Grun.)Williams & Round	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	-	-	1	-
<i>Punctastriata linearis</i> D.M.Williams et Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	1
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg var. <i>construens</i>	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	3	3	1	-	-
<i>Staurosira construens</i> var. <i>venter</i> (Ehren.)Kawashima & Kob.	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	3	-	2	-	2
<i>Synedra ulna</i> (Nitzsch)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	-	-	1
Monoraphid Pennate Diatoms(單縱溝羽狀珪藻類)									
<i>Lemnicola hungarica</i> (Grunow)Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	41	53	41	6	-
<i>Planothidium delicatulum</i> (Kuetz.)Round et Bukhtiyarova	Meh			D1	-	-	1	-	-
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb.)Round et Bukhtiyarova	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	2	1	-	2	-
<i>Achnanthyidium minutissimum</i> (Kuetz.)Czarn.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	3	-
<i>Cocconeis euglypta</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	1	-	-
Biraphid Pennate Diatoms(雙縱溝羽狀珪藻類)									
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	4	-	-	1	4
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	7	6	6	16	3
<i>Cymbella tumida</i> (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	1	-	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow var. <i>turgidula</i>	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	1	1	-	1
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>nipponica</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	3	-	-	-
<i>Cymbopleura naviculiformis</i> (Auerswald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	1	-	-	-	-
<i>Encyonema mesianum</i> (Kholnoky)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	3
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.)E.J.Cox var. <i>elginensis</i>	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	3	5	1	1
<i>Placoneis elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	-	1	-	-
<i>Gomphoneis tetrastigmata</i> (Horikawa et Okuno)Ohtsuka	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	2	-	-	-	1
<i>Gomphonema affine</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	1
<i>Gomphonema clavatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema contraturnis</i> Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	-	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg var. <i>gracile</i>	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	1	1	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing var. <i>parvulum</i>	Ogh-ind	ind	ind	U	22	24	22	8	4
<i>Gomphonema pumilum</i> (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	1	4	2	-	-
<i>Reimeria sinuata</i> (W.Greg.)Kocielek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	1	1
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i> (C.Agardh)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve var. <i>ovalis</i>	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	2
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	-	1	-	1
<i>Eolimna tantula</i> (Hust.)	Ogh-ind	ind	r-ph	RI,U	-	-	-	1	-
<i>Hippodonta capitata</i> (Ehr.)Lange-B.,Metzeltin et Witkowski	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	4	2	-	-	-
<i>Navicula salinarum</i> Grunow	Meh			D2,E1	2	-	-	-	-
<i>Navicula cincta</i> (Ehr.)Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	T	1	1	-	1	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	2	1	1	-
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	2	3	-	-
<i>Navicula gibbula</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-	-	-
<i>Navicula hambergii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	1	-
<i>Navicula kotschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	3
<i>Navicula radiosa</i> Kuetzing var. <i>radiosa</i>	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	1	-	-
<i>Navicula rostellata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	1	-	-	-
<i>Navicula tenelloides</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	J,U,RI	-	-	1	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	2	-
<i>Gyrosigma scalproides</i> (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	2	-	-	1
<i>Craticula halophila</i> (Gran. ex V.Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg var. <i>anceps</i>	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	1
<i>Stauroneis borrichii</i> (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	1	2	3	1
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	3
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> fo. <i>hattorii</i> Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	1	-	-	1	1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1
<i>Stauroneis thermicola</i> (Petersen)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	1	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni var. <i>vulgaris</i>	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	2	1	-	-
<i>Diadsmis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	4	3	5	1	3
<i>Diadsmis contenta</i> (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	2	1	2	1
<i>Diadsmis contenta</i> var. <i>biceps</i> (Arnott ex Grunow)Hamilton	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	10	7	8	9	2
<i>Luticola cohnii</i> (Hilse)D.G.Mann	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	-	-	1	1	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	16	6	10	21	16
<i>Luticola paramutica</i> (Bock)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	1	-	2	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt var. <i>alpinum</i>	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	1	-	1	4	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	1	-	-	-
<i>Neidium longiceps</i> (W.Greg.)R.Ross	Ogh-hob	ac-il	ind		1	1	-	-	-
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	ac-bi	ind	RA,S	-	1	1	2	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve var. <i>bacillum</i>	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	-	1	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	-	-	1	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve var. <i>silicula</i>	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	1	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1	-	-	-	-

表3 珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境 指標種	試料番号				
	塩分	pH	流水		1	2	4	6	7
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	1	-	1	3
<i>Pinnularia episcopalis</i> Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	1
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	5	3	2	2	-
<i>Pinnularia hemiptera</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-ph		-	1	-	-	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	3	-
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	4	5	4	4	1
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	1	9
<i>Pinnularia silvatica</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	1	3	10	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	3	5	12	22	12
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>paucistriata</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	3	5	3	12	-
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-
<i>Sellaphora americana</i> (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	1
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.)Mann var. <i>laevissima</i>	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	1
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky var. <i>pupula</i>	Ogh-ind	ind	ind	S	6	4	2	1	1
<i>Sellaphora pseudopupula</i> (Krasske)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-	-	-
<i>Sellaphora seminulum</i> (Grun.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S,RB	1	4	1	-	-
管絨溝類									
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	11	16	11	27	13
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	-	-	2	5	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow var. <i>amphibia</i>	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	-	1	2	-
<i>Nitzschia hantzschiana</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunow var. <i>frustulum</i>	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia perminuta</i> (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	1	2	2	1	3
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-
<i>Tryblionella debilis</i> Arnott	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	2	4	2	5	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)O.Muller var. <i>gibba</i>	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
翼管絨溝類									
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	2	-	1	-
<i>Surirella minuta</i> Brebisson	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	3	3	12	-
短絨溝類									
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.)Mills var. <i>bilunaris</i>	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	1	2	-	-	-
<i>Eunotia incisa</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	3	1	-	-	-
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.)Grunow var. <i>minor</i>	Ogh-hob	ind	ind	O,T	1	-	-	-	1
<i>Eunotia monodon</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-	1	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	-	-	1
<i>Eunotia tschirchiana</i> Muell. var. <i>tschirchiana</i>	Ogh-ind	al-il	unk		2	-	-	-	1
海水生種					0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0
汽水生種					2	0	1	0	0
淡水～汽水生種					7	11	35	8	0
淡水生種					205	195	167	197	111
珪藻化石総数					214	206	203	205	111

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性 pH:水素イオン濃度に対する適応性 C.R.:流水に対する適応性
Meh :汽水生種 al-bi :真アルカリ性種 l-bi :真止水性種
Ogh-Meh :淡水～汽水生種 al-il :好アルカリ性種 l-ph :好止水性種
Ogh-hil :貧塩好塩性種 ind :pH不定性種 ind :流水不定性種
Ogh-ind :貧塩不定性種 ac-il :好酸性種 r-ph :好流水性種
Ogh-hob :貧塩嫌塩性種 ac-bi :真酸性種 r-bi :真流水性種
Ogh-unk :貧塩不明種 unk :pH不明種 unk :流水不明種

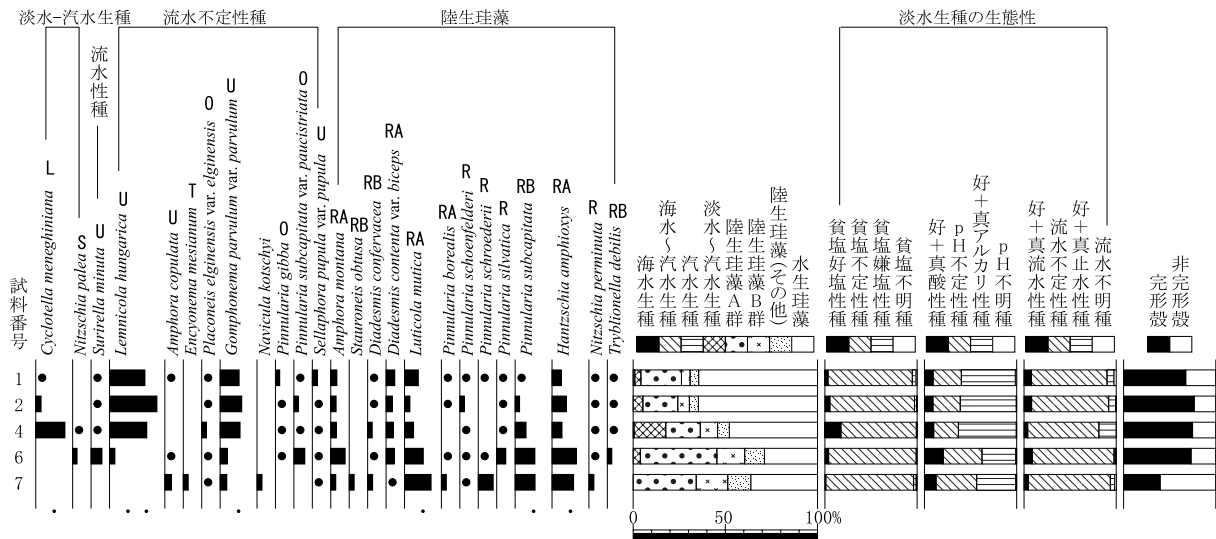
環境指標種群

D1:海水砂質干潟指標種, D2:汽水砂質干潟指標種, E1:海水泥質干潟指標種(以上は小杉, 1988)
J:上流性河川指標種, K:中～下流性河川指標種, L:最下流性河川指標種, N:湖沼沼沢湿地指標種, O:沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)
S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)
R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

たが、溝埋土内の4試料は約70%と高い。産出分類群数は、合計で42属104分類群である。

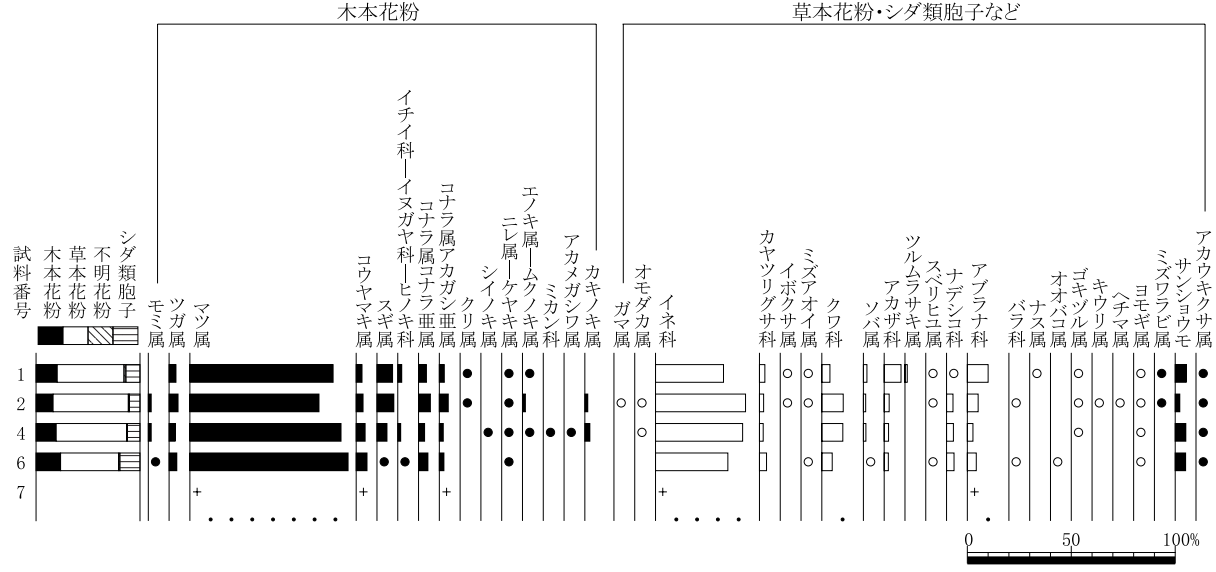
試料番号7は、陸生珪藻が全体の約65%と多産し、残りは水域に生育する水生珪藻(以下、水生珪藻と言う)である。主な産出種の特徴は、陸生珪藻A群の*Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys*、陸生珪藻B群の*Pinnularia subcapitata*、未区分陸生珪藻の*Pinnularia schroederii*が10%前後産出する。なお、水生珪藻は、流水不定性の*Amphora copulata*、*Encyonema mesianum*、*Gomphonema parvulum* var. *parvulum*が少量産出する。試料番号6も陸生珪藻が多産するが、水生珪藻の種類が試料番号7と異なる。好流水性の*Surirella minuta*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の*Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata*、好汚濁性種の*Nitzschia palea*等が産出する。

試料番号1～4は、水生珪藻が約70%と多産する。淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能)の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種が優占する。主な



海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の産出を示す。種類名末尾の記号は以下の環境指標種群を示す。
 K:中～下流性河川指標種, L:最下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種(安藤, 1990)
 S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(Asai and Watanabe, 1995)
 R:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

図49 主要珪藻化石群集の層位分布



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料において出現した種類を示す。

図50 花粉化石群集の層位分布

産出種は、流水不定性で広域適応性種の *Lemnicola hungarica* (Round & Basson (1997) によって、*Achnanthes*属から *Lemnicola*属に変更されている) が約20%と多産し、同じく広域適応性種の *Gomphonema parvulum* var. *parvulum*、淡水～汽水生種の *Cyclotella meneghiniana*等を伴う。このうち *Lemnicola hungarica*は、池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に付着して生育する場合が一般的な種とされている。また、*Cyclotella meneghiniana*は、最下流性河川指標種群とされ、試料番号4で約20%検出される。

(2) 花粉分析

結果を表4、図50に示す。試料番号7では花粉化石の保存が悪く検出数が少ない。その他の試料では、ほぼ同様な組成を示す。全体の構成比は、木本花粉に比べ、草本花粉の割合が高い。木本花粉は、マツ

表4 花粉分析結果

種類	試料番号				
	1	2	4	6	7
木本花粉					
モミ属	-	3	3	1	-
ツガ属	7	9	6	5	-
トウヒ属	1	1	-	-	-
マツ属複雑管束亜属	115	109	123	75	1
マツ属(亜属不明)	31	22	29	27	-
コウヤマキ属	6	7	9	7	9
スギ属	16	17	10	1	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	4	-	3	1	-
マオウ属	-	1	-	-	-
サワグルミ属	1	-	-	1	-
クマシデ属-アサダ属	3	2	2	1	-
カバノキ属	2	-	-	-	-
ハンノキ属	1	1	-	3	-
ブナ属	4	5	2	1	-
コナラ属コナラ亜属	8	12	6	6	-
コナラ属アカガシ亜属	5	9	4	3	1
クリ属	1	2	-	-	-
シイノキ属	-	-	2	-	-
ニレ属-ケヤキ属	1	1	1	1	-
エノキ属-ムクノキ属	2	3	1	-	-
ミカン科	-	-	1	-	-
アカメガシワ属	-	-	1	-	-
ノドウ属	-	-	-	1	-
シナノキ属	1	-	-	-	-
カキノキ属	-	3	5	-	-
ハイノキ属	-	-	1	-	-
エゴノキ属	3	-	-	-	-
スイカズラ属	-	4	-	-	-
草本花粉					
ガマ属	-	1	-	-	-
オモダカ属	-	1	1	-	-
イネ科	335	554	450	195	2
カヤツリグサ科	27	26	19	19	-
イボクサ属	1	5	-	-	-
ツクサ属	2	1	-	2	-
ミズアオイ属	1	3	-	2	-
ユリ科	9	14	-	1	-
クワ科	40	132	108	28	-
ギンギン属	7	12	28	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	1	4	-	-
タデ属	-	7	15	-	-
ソバ属	17	14	13	5	-
アカザ科	83	31	22	11	-
ツルムラサキ属	11	-	-	-	-
スベリヒユ属	3	1	-	3	-
ナデシコ科	10	40	35	20	-
キンボウゲ科	1	4	3	-	-
アブラナ科	102	66	29	24	1
バラ科	-	2	-	2	-
マメ科	-	-	-	1	-
ミズユキノシタ属	-	-	1	-	-
セリ科	1	3	-	-	-
ナス属	1	-	-	-	-
オオバコ属	-	-	-	1	-
ゴキソル属	6	10	1	-	-
キウリ属	-	1	-	-	-
ヘチマ属	-	1	-	-	-
ヨモギ属	8	5	2	1	-
オナモミ属	-	1	-	-	-
キク亜科	4	-	-	-	-
タンポポ科	1	-	1	2	-
不明花粉	19	14	7	7	-
シダ類胞子					
ヒカゲノカズラ属	1	1	-	1	-
ゼンマイ属	2	5	1	4	1
イノモトソウ属	1	-	1	3	1
ミズワラビ属	2	2	-	-	-
サンショウモ	54	28	55	28	-
アカウキクサ属	8	4	3	1	-
他のシダ類胞子	74	91	72	73	54
その他の微化石					
ミズゴケ属	-	-	-	2	-
合計					
木本花粉	212	211	209	134	11
草本花粉	670	936	732	317	3
不明花粉	19	14	7	7	0
シダ類胞子	142	131	132	110	56
総計(不明を除く)	1024	1278	1073	561	70

属(特に複雑管束亜属)の割合が高く、木本花粉全体の70%以上を占める。その他、スギ属、コウヤマキ属、コナラ属、アカガシ亜属、などが少量検出される。一方草本花粉は、イネ科の割合が高く、アブラナ科、アカザ科、クワ科などもみられる。割合は少ないが、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属等の水生植物や、ソバ属、ツルムラサキ属、キュウリ属、ヘチマ属といった栽培植物もみられる。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表5、図51に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。試料番号7では、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。試料番号6、4、2、1では植物珪酸体含量が1,100~14,000個/gまで変化する。イネ属の産出が目立ち、ネザサ節を含むタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。なお、試料番号1ではオオムギ族の短細胞珪酸体も検出される。

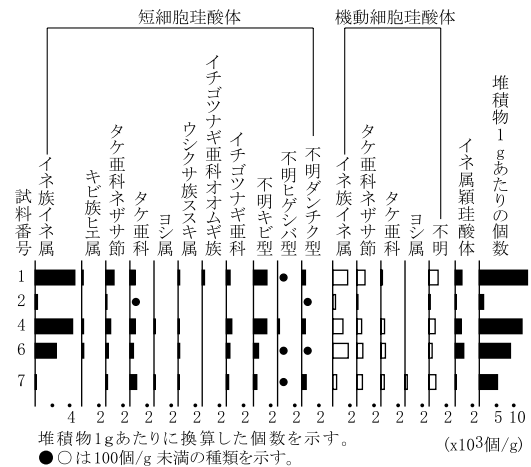


図51 植物珪酸体群集の層位分布

4. 考察

(1) 珪藻化石群集からみた古水文環境

溝埋土の珪藻化石群集は、試料番号4と試料番号6を境として2つに区分されることが明らかとなった。溝底部にあたる試料番号6は、遺構基盤である試料番号7と同様に陸生珪藻が多産し、群集も類似する。このことから、溝底部の堆積層の大部分は、遺構基盤層の碎屑物に由来し、これらが再堆積していると考えられる。

溝埋土の中位より上では（試料番号1～4）、*Lemnicola hungarica*が多産する。この種類は、流水不定性で好アルカリ性、広域適応性種とされ、池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に付着して生育することが多い。よって、溝内は水生植物が生育するような富栄養で、浅く（水深にして数十センチ以下）淀んだ水域であったと考えられる。このことは、水生植物の花粉・胞子化石（オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属等）がみられることとも調和的である。検出された溝の規模からすれば、浅く流れの少ない環境は調和的といえる。流れがないため水生植物の遺骸などが貯まりやすく、これらが腐敗することによって富栄養化したとみられるが、溝が集落内にあることから、人為的な汚染も少なからずあったと思われる。なお、今回多産した*Lemnicola hungarica*は、現在の水田からも多産することが報告されている（根来・東野,1986）ことから、植物珪酸体の成果にみられるように、周囲の耕作域の水域からの由来も考慮する必要がある。

(2) 調査区およびその周辺の古植生

14世紀代の溝埋土中の花粉化石群集は、イネ科を主とする草本類が多産し、木本類ではマツ属の割合が高いことが特徴である。これは、別報の花屋敷遺跡06-1-1調査区80溝、瓜生堂遺跡47-2次調査区で検出された中世の大溝1の花粉分析結果（パリノ・サーヴェイ株,2002）と同様である。このような傾向は、近畿地方において普遍的にみられる（波田,1987;那須,1980;高原,1996など）。ただし、その変化が起きる時期や変遷パターンは地点間で差異があることが指摘されている（辻本,2004）。河内平野南東部に位置する池島・福万寺遺跡では、15世紀後半～16世紀の層準でマツ属が急増するものの、この段階ではそれ以前に卓越していたアカガシ亜属が減少するが今回のように低率とはならない。低率になるのは17世紀～18世紀の層準であり、この段階でマツ属がさらに急増している。このように池島・福万寺遺跡と本遺跡では、中世の時期の花粉化石群集はマツ属の急増という点では類似するものの、随伴する常緑広葉樹のアカガシ亜属の産状は明瞭な違いがある。これは、両遺跡の土地利用状況の違いや、その花粉化石群集の形成過程（山地など植生領域から堆積物に取り込まれるまでの過程など）の違いを反映している可能

表5 植物珪酸体含量

種 類	試料番号				
	1	2	4	6	7
(個/g)					
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	4,600	300	4,300	2,400	100
キビ族ヒエ属	200	-	200	200	-
タケ亜科ネザサ節	1,000	100	600	300	200
タケ亜科	600	<100	600	400	800
ヨシ属	-	-	100	-	100
ウシクサ族ススキ属	200	-	100	200	100
イチゴツナギ亜科オオムギ族	300	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	400	-	600	400	300
不明キビ型	1,600	-	1,500	600	400
不明ヒゲシバ型	100	-	200	<100	<100
不明ゲンチク型	400	<100	400	<100	500
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	1,700	300	1,200	1,800	500
タケ亜科ネザサ節	1,000	100	600	700	700
タケ亜科	200	-	400	500	400
ヨシ属	-	-	-	-	300
不明	1,000	100	700	400	800
珪化組織片					
イネ属類珪酸体	800	100	700	1,000	100
合 計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	9,300	400	8,800	4,500	2,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	3,900	600	2,900	3,400	2,500
珪化組織片	800	100	700	1,000	100
総 計	14,000	1,100	12,400	8,900	5,200

含量は、100単位で丸めた数字として示す。また、<100:100個体未満を示す。

性が高い。

花粉化石群集は草本類の花粉化石が多産することから、調査区およびその周辺では、基本的にはイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、ヨモギ属などの草地であったと思われる。特にイネ科については、植物珪酸体分析の結果から、ネザサ節、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが含まれていたと思われる。草本類の中で比較的多かったアブラナ科には、アブラナをはじめ葉菜類、根菜類などの栽培種が含まれ、アカザ科にも食用となる葉菜類が多い。また、クワ科には、アサ、クワなどの栽培種を含む。ただし、これらの分類群には人里や田畑に生育する雑草類（たとえばアブラナ科のナズナ、クワ科のクワクサやカナムグラ、アカザ科のアカソなど）も多数存在するため、一概に栽培由来とはいえない。なお、近畿地方では近世以降にアブラナ科の花粉化石が高率になることがあり、搾油植物であるアブラナの栽培に由来すると考えられている（藤田,1991）。このような栽培植物の種類が多様となるのは、池島・福万寺遺跡の結果でも中世の層準である。

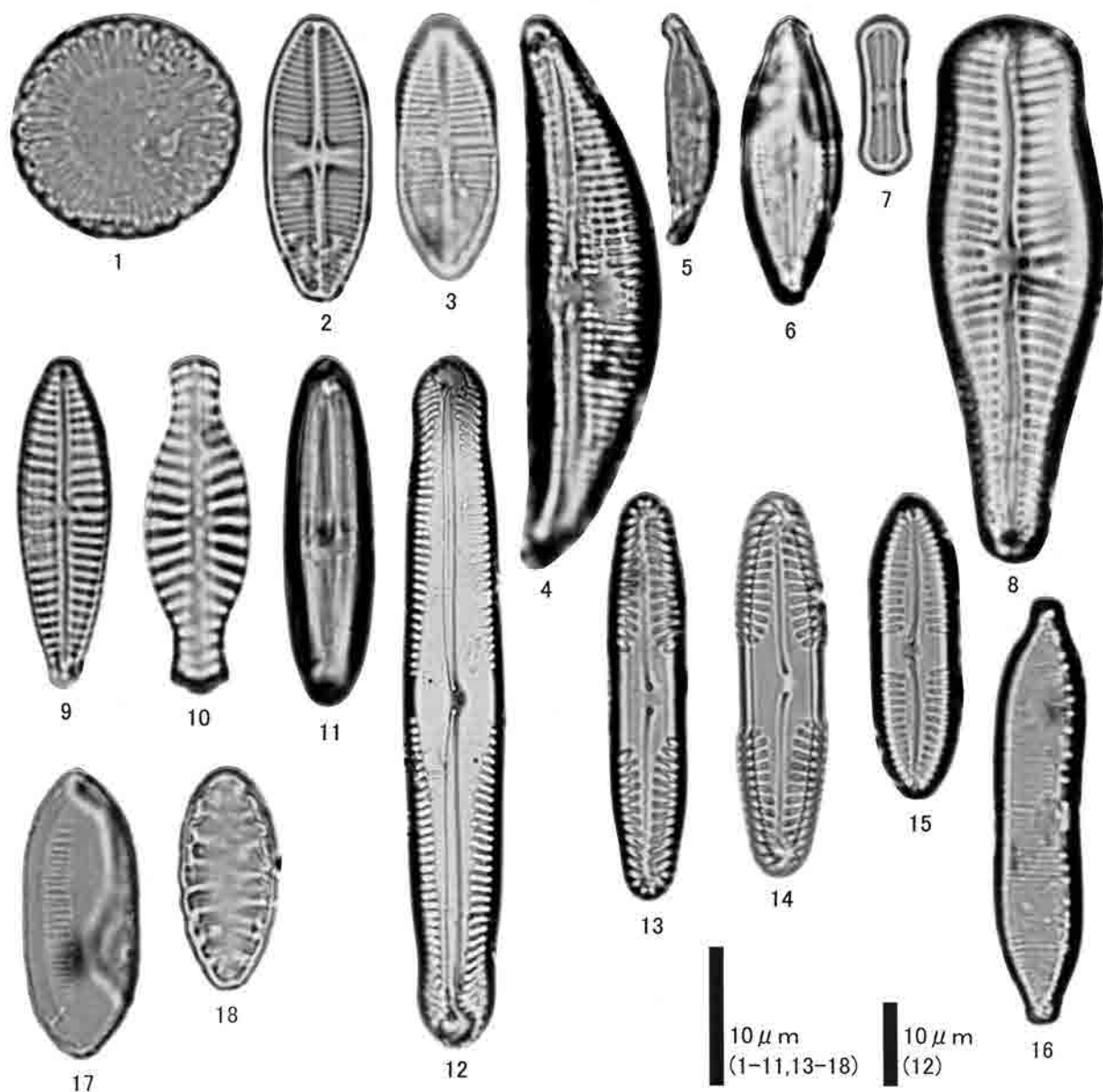
花粉化石で、栽培植物由来と思われるものは、ソバ属、キュウリ属、ヘチマ属、ツルムラサキ属であり、植物珪酸体ではイネ属である。当該期の遺跡およびその周辺の発掘結果をふまえると、これらのほとんどは、周辺の耕作地に由来するものとみられる。さらに、稲藁や籾殻は燃料材や住居構築材等の資材として利用されるため、検出されたイネ属珪酸体については、耕作地からの供給のほか、集落内で使われた生活資材に由来するものもあると思われる。なお、ソバ属やキュウリ属は古くから栽培されていた種類で、種実遺体や花粉化石の出土例も多いが、ツルムラサキやヘチマは出土例が少なく、来歴に関しては不明な点も多い。よって今回の結果からすると、中世には栽培植物として導入されていたことになるが、その評価については慎重に検討すべきであろう。なお、星川（1987）によると、ヘチマは17世紀頃に日本に伝わったとされるが、ツルムラサキに関しては記載がない。

本遺跡をとりまく山地斜面などの植生は、基本的にはマツの二次林もしくは草地であったことが花粉分析結果から推定される。当該期における河内平野やその周辺地域のこれまでの花粉分析結果をふまえると、中世においても自然状態に近い森林は少なく、低地は耕作地などを中心とした草地が卓越し、山地や丘陵斜面は二次林や草地が広がる植生景観であったと推測される。

引用文献

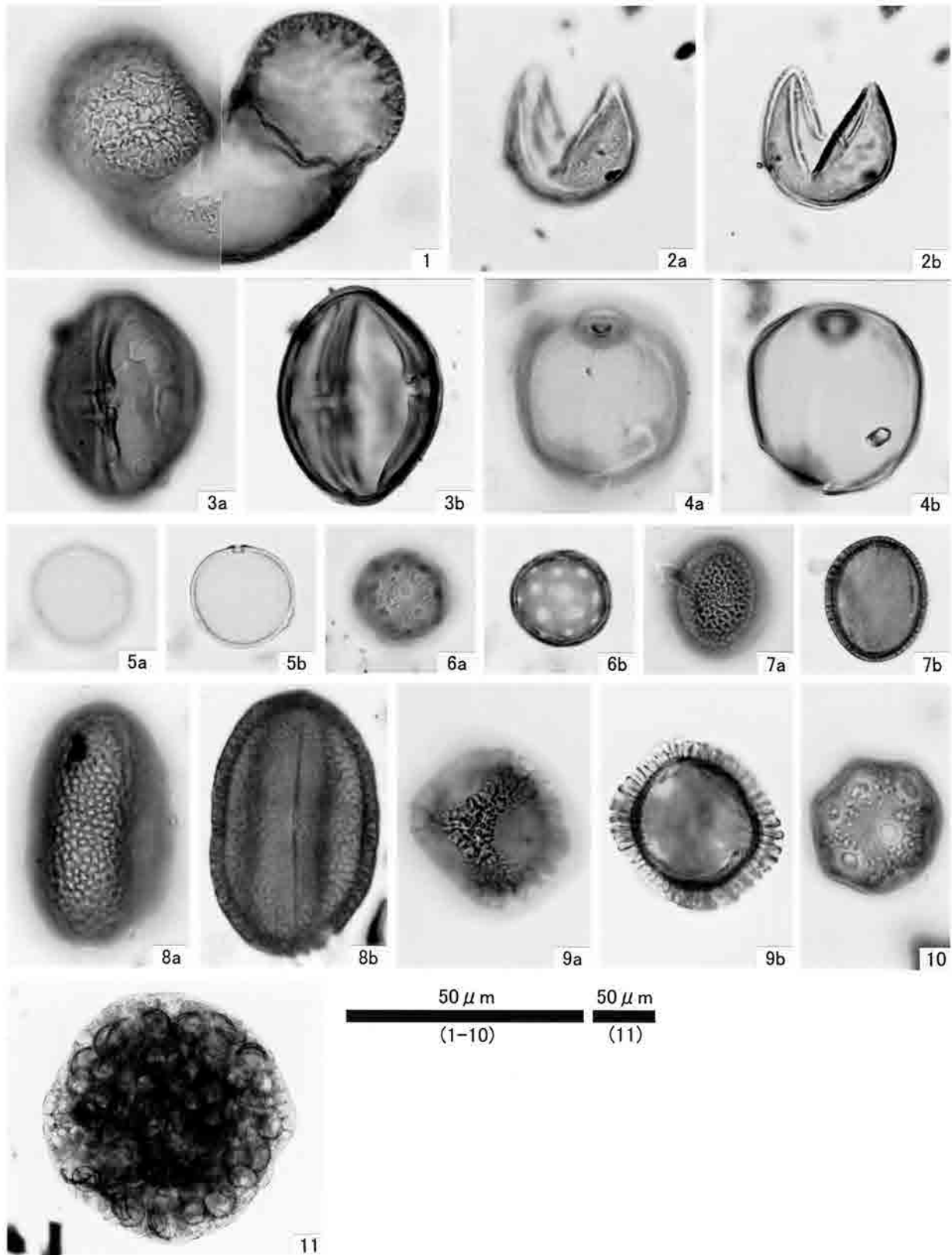
- 安藤 一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10, 35-47.
- 別所 秀高,1999,瓜生堂遺跡第45次調査地点でみられた堆積環境変遷過程と人間活動の履歴.瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告書, (財) 東大阪市文化財協会,225-232.
- 波田 善夫,1987,花粉分析からみたマツ林の歴史.松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究 -松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について-資料集,財団法人 日本自然保護協会,41-49.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- 星川 清親,1987,栽培植物の起源と伝播.二宮書店,311p.
- Hustedt, F.,1937-1939,*Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra*. Archiv für Hydrobiologie, Supplement,15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790,16:1-155,16:274-

- 藤田 憲司・古谷 正和・渡邊 正巳,1991,大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉高出現率期について. 日本文化財科学会第8回大会研究発表要旨集, p.33-34.
- 伊藤 良永・堀内 誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌, 6,23-45.
- 小杉 正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.
- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
- Krammer, K.,1992,*PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26*. J.CRAMER,353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,*Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae, Surirellaceae*. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,*Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae, Eunotiaceae*. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,*Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheaceae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema*. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.
- Lowe, R.L.,1974,*Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms*. 334p.In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 松田 順一郎,2001,河内平野沖積低地南部における完新世後半の旧大和川分流路発達と人間活動.第50回埋蔵文化財研究集会 環境と人間社会 - 適応, 開発から共生へ - 発表要旨集,39-51.
- 那須 孝悌,1980,花粉分析からみた二次林の出現.関西自然保護機構会報, 4, 3-9.
- 根来 健一郎・東野 雅子,1986,日本における水田の珪藻植生 第1報 奈良県桜井市附近の水田の珪藻植生. 珪藻学会誌, 2, p.1-8.
- パリノ・サーヴェイ,2002,瓜生堂遺跡47-2次調査に伴う自然科学分析.瓜生堂遺跡46.47-1・2次発掘調査報告書, 東大阪市教育委員会,265-282.
- Round, F. E. & Basson, P. W.,1997,A new monoraphid diatom genus (*Pogoneis*) from Bahrain and transfer of previously described species *A. hungarica* and *A. taeniata* to new genera. Diatom Research 12,71-81.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990,*The diatoms. Biology & morphology of the genera*. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 高原 光,1996,近畿地方の植生史図説 日本列島植生史,安田 喜憲・三好 教夫編,朝倉書店,114-137.
- 辻本 裕也,2004,久宝寺遺跡の自然科学分析.「八尾市 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI -大阪竜華都市拠点地区竜華東西線建設に伴う発掘調査-」,(財)大阪府文化財センター,174-187.
- 辻本 裕也・辻 康男,2002,池島・福万寺遺跡の古環境復元.「池島・福万寺遺跡2」,(財)大阪府文化財センター,361-460.
- 渡辺 仁治,2005,淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po},pH耐性能.内田老鶴圃,666p.



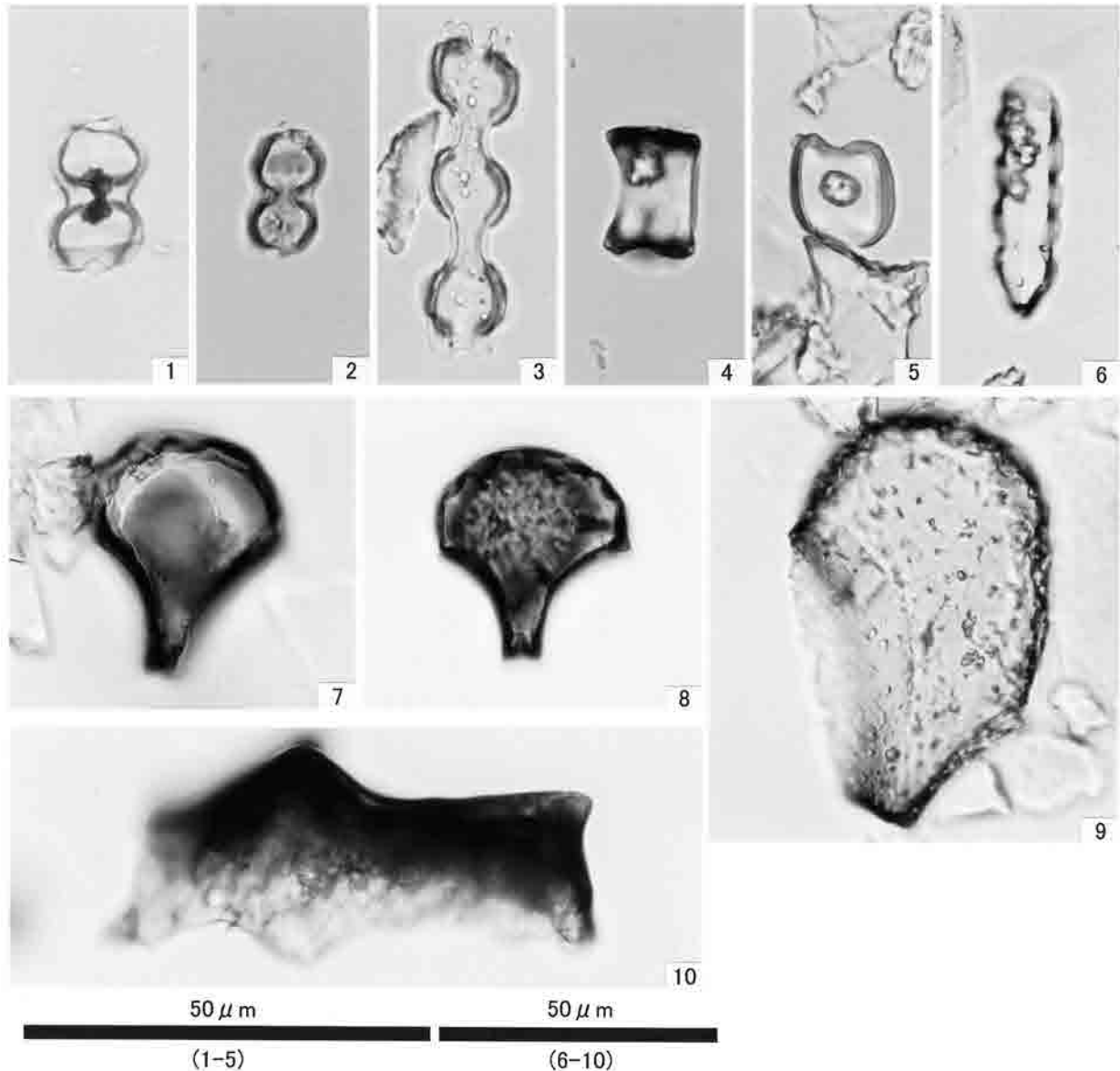
1. *Cyclotella meneghiniana* Kuetzing(試料番号4)
2. *Lemnocola hungarica* (Grunow)Round & Basson(試料番号4)
3. *Lemnocola hungarica* (Grunow)Round & Basson(試料番号1)
4. *Amphora copulata* (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald(試料番号1)
5. *Amphora montana* Krasske(試料番号6)
6. *Diadesmis confervacea* Kuetzing(試料番号4)
7. *Diadesmis contenta* var. *biceps* (Arnott ex Grunow)Hamilton (試料番号6)
8. *Gomphonema truncatum* Ehrenberg(試料番号1)
9. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(試料番号2)
10. *Hippodonta capitata* (Ehren.)Lange-B.,Metzeltin et Witkowski(試料番号1)
11. *Neidium alpinum* Hustedt(試料番号6)
12. *Pinnularia gibba* Ehrenberg(試料番号1)
13. *Pinnularia subcapitata* Gregory(試料番号6)
14. *Pinnularia schoenfelderii* Krammer(試料番号1)
15. *Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer(試料番号7)
16. *Hantzschia amphioxys* (Ehren.)Grunow(試料番号1)
17. *Tryblionella debilis* Arnott(試料番号1)
18. *Surirella minuta* Brebisson(試料番号6)

写真1 珪藻化石



- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属(試料番号2) | 2. スギ属(試料番号4) |
| 3. カキノキ属(試料番号1) | 4. イネ科(試料番号2) |
| 5. クワ科(試料番号4) | 6. アカザ科(試料番号1) |
| 7. アブラナ科(試料番号2) | 8. ソバ属(試料番号1) |
| 9. ツルムラサキ属(試料番号1) | 10. ナデシコ科(試料番号4) |
| 11. サンショウモ(試料番号4) | |

写真2 花粉化石



- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号1) | 2. イネ属短細胞珪酸体(試料番号6) |
| 3. ヒエ属短細胞珪酸体(試料番号1) | 4. ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号7) |
| 5. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号7) | 6. オオムギ族短細胞珪酸体(試料番号1) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号1) | 8. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号6) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号7) | 10. イネ属穎珪酸体(試料番号6) |

写真3 植物珪酸体

第6章 まとめ

今回の調査では、約200mの間に、東西に3箇所にてトレンチを開けた。各調査区で遺構を検出、遺物が出土した。今まで遺跡の存在が知られなかった当地において、中世の集落遺跡を確認し、その様相の一端を明らかにしえた。以下にその調査成果をまとめることにしたい。

3箇所の調査区で共通と考えられる中世の遺構面（1調査区：第3面、2調査区：第3面、3調査区：第1-3面）を確認した。この一連の遺構面は西端の3調査区がT.P.+2.5mが最高所であり、2調査区ではT.P.+2.4m、1調査区では、T.P.+2.2~2.3mと東へ向かって下降する。この緩傾斜は旧玉串川自然堤防の高まりから遠ざかることによると考えられる。

最も遺構を集中して検出したのは2調査区である。検出した掘立柱建物3棟や、その敷地を区画すると考えられる、ほぼ正方位の南北溝・流路を調査区両端で確認した。今回の建物群の検出は、当地に中世の集落が存在したことを明確にしてくれる。この南北に並行して走る11溝と20溝との間は約30mを測るが、3分の1町分を意識して配置されていると考えられる。また当調査区の北端を東西に流れる10溝は東西走向の区画溝として機能していたのであろう。このほか断面観察から4面における30流路が3面においては20溝として整えられていくことがわかった。

なお、確認調査の際に貨銭が数点出土したが、今回もピット内と包含層中から合計3点が出土した。狭い範囲の中にて貨銭の出土が目立つことは、集落内での活発な経済活動を想起させる。

2調査区の東に接する1調査区は、南北走向の14溝を境界にして以東は遺構や遺物が希薄である。このことは、当溝が居住空間の境を示していることと関係していると思われる。微地形を顧みても、当調査区は標高が最も低い。14溝の東側から16落ち込みが広がり、東西端では約0.3m程度のレベル差がみられ、さらに中世の面は下降することがわかる。この辺りにて、微高地が終焉していくようである。当中世集落が旧玉串川の自然堤防の微高地上を中心に展開した可能性を示唆し、このあたりが中世集落の東端部に当たると考えられる。また、この一段と低くなった地域には第4面、第5面において素掘の小溝が存在する。耕作地としての利用が想定できる。遺構の希薄な第3面も、東端の低地部分は同様の土地利用が考えられる。

これら上述の2箇所の調査区より85mと、やや離れて西側に位置する3調査区では、近現代の攪乱により大きく破壊されていたが、僅かながらも遺構面が残されていた。一部柱根も遺存し、やはり建物が存在したと思われる。また、当調査区の西端で検出した南北走向の2溝は1調査区、2調査区の溝群と同様、屋敷地を区画する溝で、集落が広がっていたと考えられる。

今回の調査と同時に、花屋敷遺跡06-1の調査を、3調査区の北側にて行っている（図2）が、同一面と考えられる遺構面においても、やはり正方位をとる中世の溝が検出されている。これらの溝も屋敷地を区画する溝と考えられる。さらに2溝の埋土には粗い砂の堆積が古層に見られる。先述の2調査区の20溝、3調査区の2溝と同じく、本来流れのある自然流路ないしは溝であった可能性が高い。

このように、もとは自然流路であったものを、人の手を加えて区画溝としたものが多く見られることも特徴的である。当地の住人が旧大和川分流の治水管理を如何に行ったかを知る手がかりとなるかも知れず興味深い。ただ残念ながら、これらの溝はいずれも調査区の端で検出されており、片方の肩が調査区外へ出るため、その明確な変遷を明らかにすることができなかった。

さて、周辺の土地区画をみると、正方位をとる条里地割がよく残り、当遺跡で検出された溝（流路）がこれと平行していることがわかる。

また、2調査区にて見られるように溝の間隔が3分の1町で企画されていたとするなら、屋敷地の区画が条里地割に規制されていたと言えよう。中世の集落において、区画溝を伴う例は多いが、周辺地域にみられる例としては、岩田遺跡があげられる。花屋敷遺跡の西約2kmに位置するほぼ同時期の遺跡である。ただし区画は当地の条里地割である正方位をとる以外に、近接する式内社石田神社の主軸と並びを一にする区画もある。当遺跡は玉串川を越え、若江郡の位置に当たり、花屋敷遺跡の位置する河内郡とは異なると思われる。土地開発における計画性の規範が地域や性格により異なるかもしれない。なお、当地の屋敷地の溝に関しては懐疑的な見解もあり、今後の評価を待ちたい。

このほか、主要遺構面以外にも部分的に下部に遺構面が存在する場所があるが、いずれも中世の遺構面である。なお古墳時代から古代の遺物も若干各調査区から出土している。近隣にはこれらの時代の遺構があった可能性が考えられ、今後の周辺の調査に期待したい。

16世紀代の明確な遺構は見つかってはいないが、当地では集落に関する遺構の直上で耕作における堆積がみられることから、早い段階で耕作地へと変化していったようである。上位の層や面は近代の攪乱により大きく乱されてはいるが、明治時代の測量図を見ると、周辺はすべて耕作地である。その後、大正3年の近鉄奈良線の開通により近鉄花園駅が開設され、以後、駅前として発展し現在に至ったと考えられる。今後は近鉄の高架事業に伴う当駅前の再開発により、更なる変貌を遂げていくことであろう。

注) 東大阪市遺跡保護調査会1973「吉田条里小字図」『池島町の条里遺構—調査概要—』をもとに作成した。

参考文献：金村浩一編1999『都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』財団法人東大阪市文化財協会
川瀬貴子2004「瓜生堂遺跡集落周辺の中世集落環境の変遷」『瓜生堂遺跡Ⅰ』財団法人大阪府文化財センター

網目部は中世の遺構集中地、
黒塗部分は溝を表す。
破線部は区画想定ラインを表す。

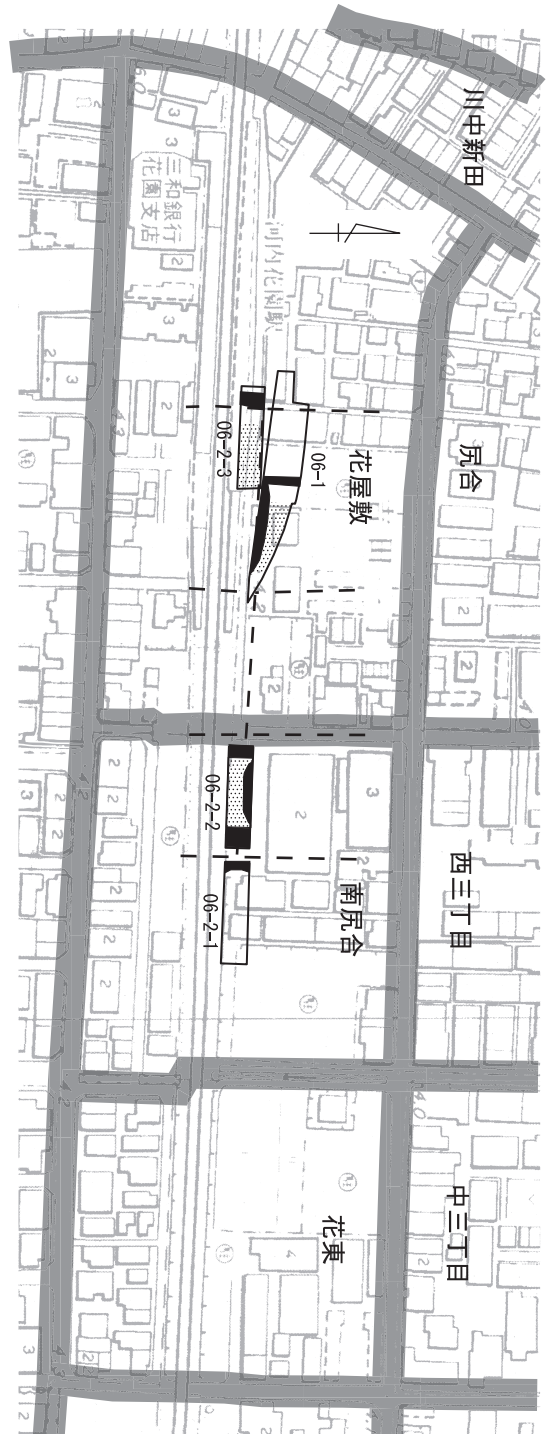
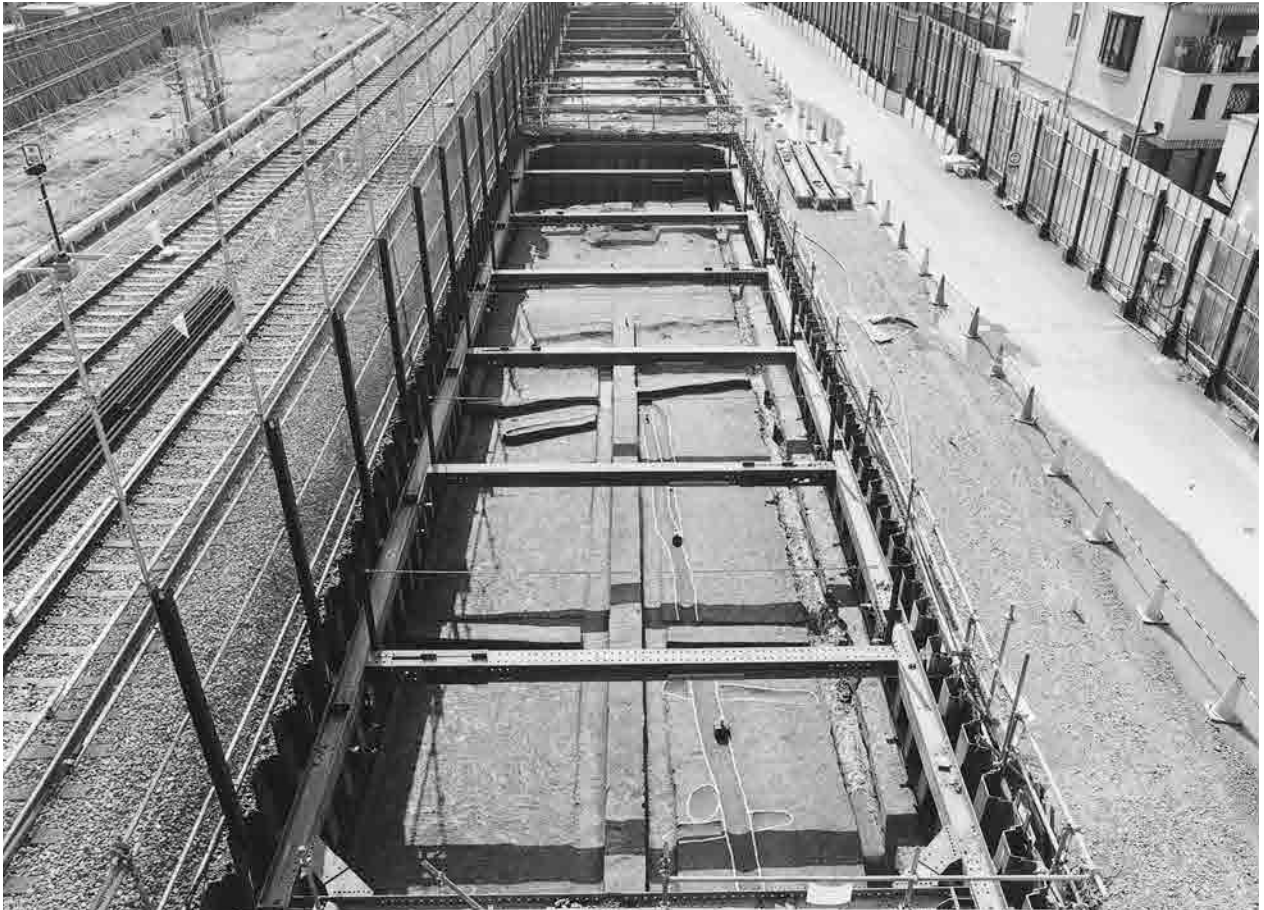


図52 調査区周辺の字名と
主要遺構模式図 (S = 1/2500)

写真図版

図版1 06-2-1 調査区



1. 調査区全景 (東から)



2. 調査区全景 (西から)

図版2 06-2-1 調査区 第3面



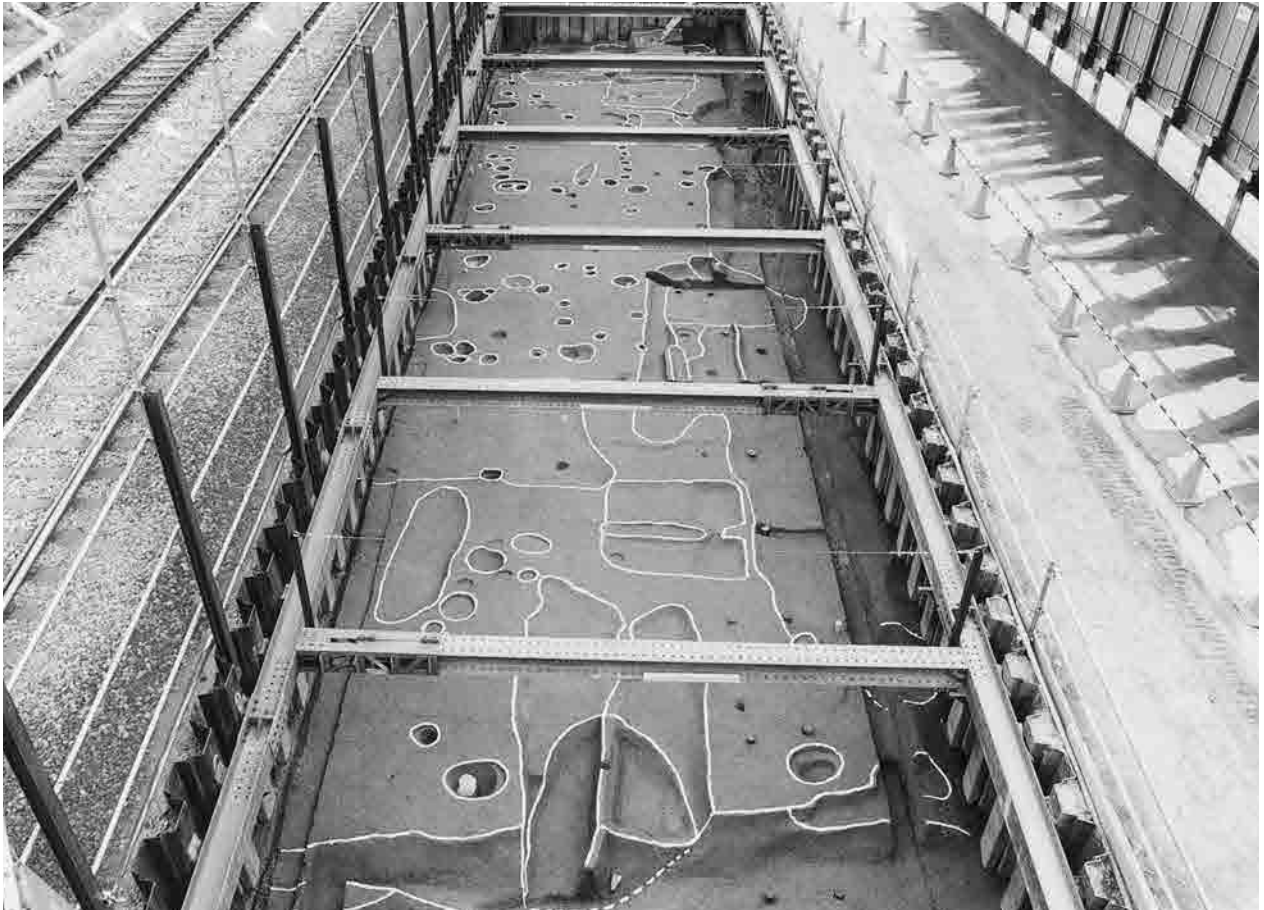
1. 14溝断面 (南から)



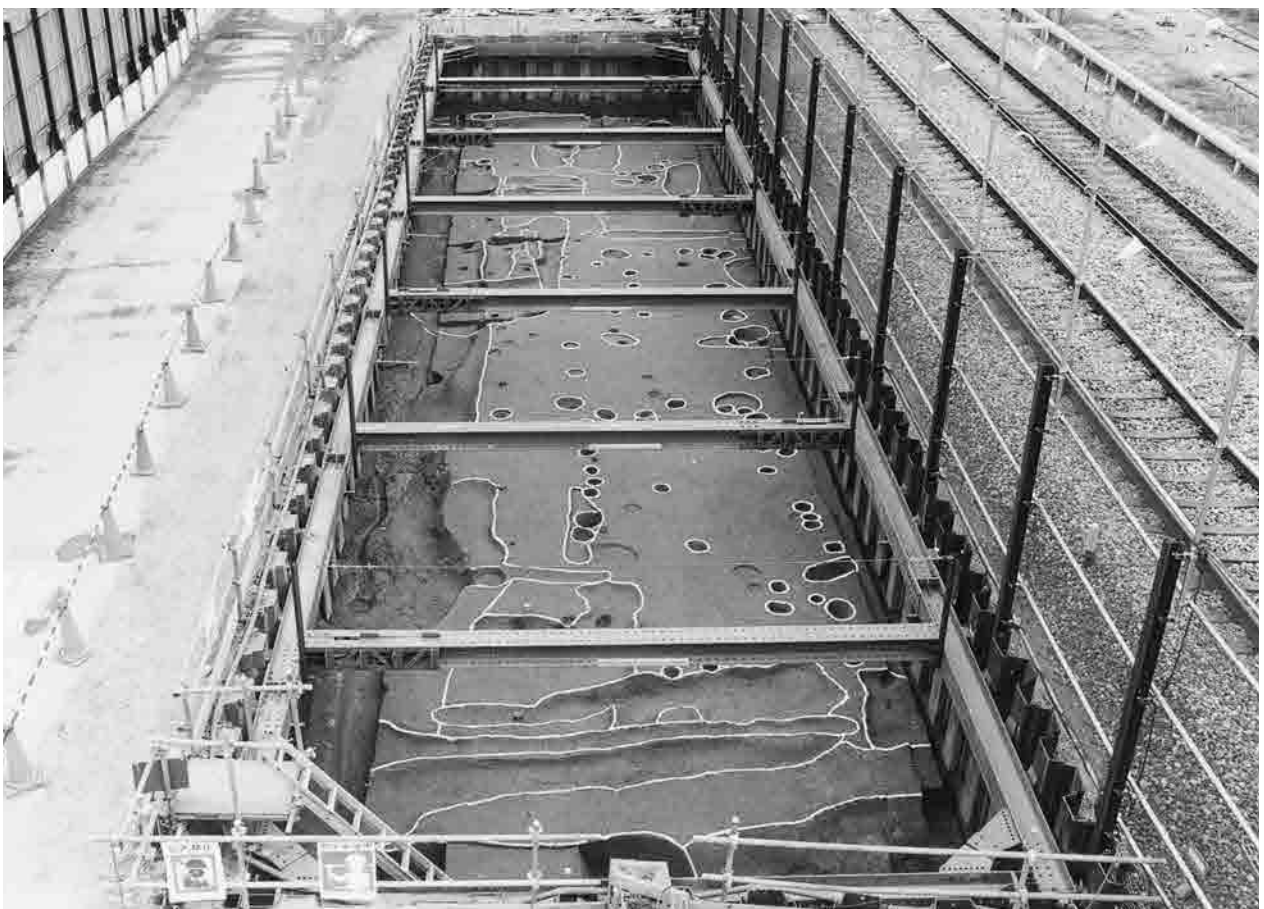
2. 14溝漆器椀出土状況 (南から)



3. 1溝断面 (南から)



1. 第3面全景 (東から)



2. 第3面全景 (西から)

図版4 06-2-2調査区 第3面



1. 30流路断面（北から）

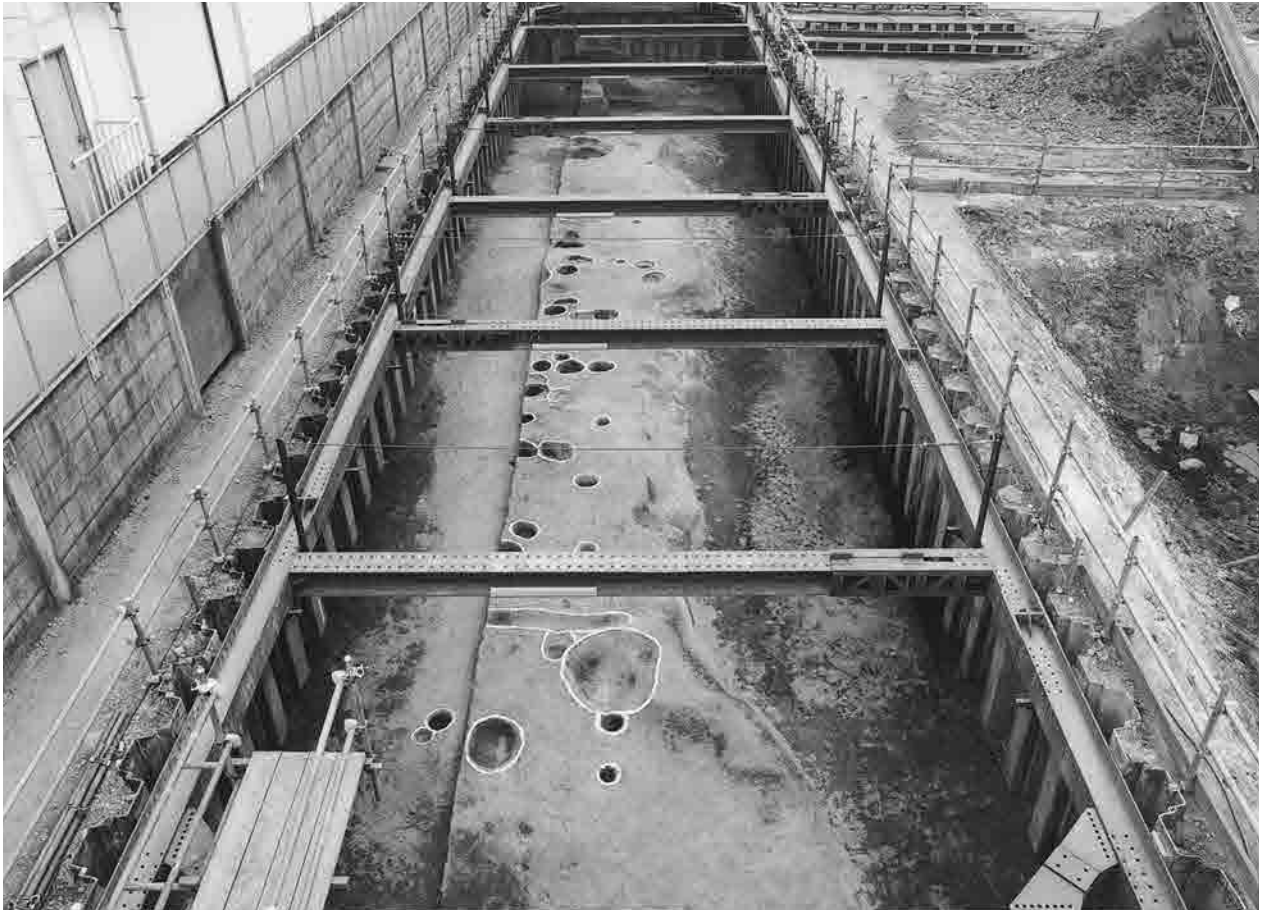


2. 67ピット根石検出状況



3. 123ピット遺物出土状況
(貨銭・瓦器碗)

図版5 06-2-3 調査区 第1-2面



1. 調査区全景 (東から)



2. 調査区全景 (西から)

図版6 06-2-3調査区 第1-2面



1. 2溝断面（北から）

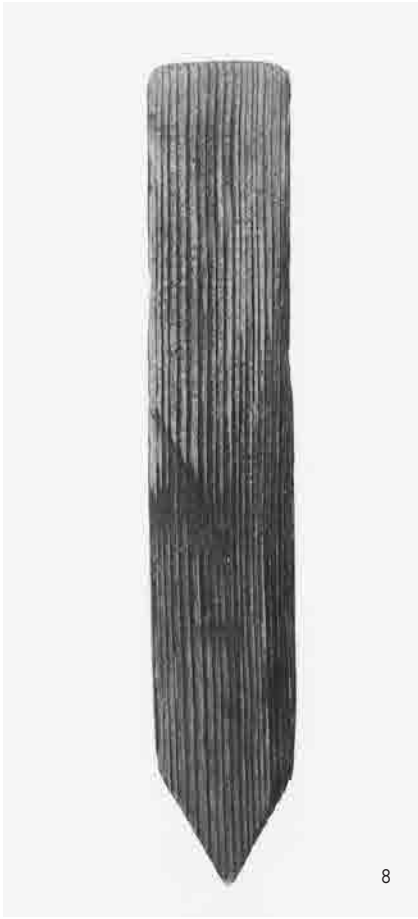


2. 19土坑遺物出土状況

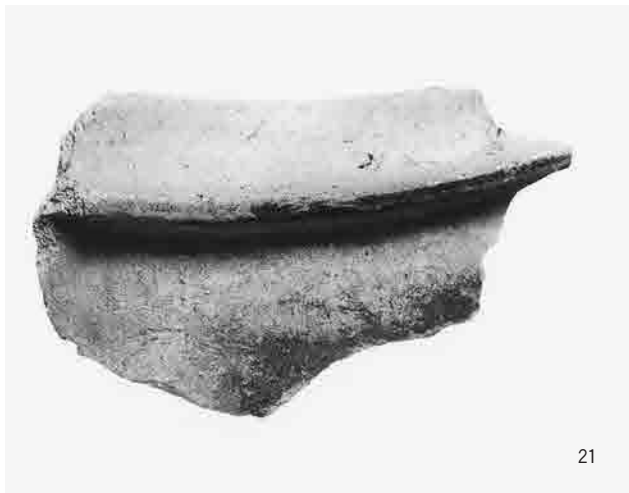


3. 15ピット柱痕検出状況

図版7 06-2-1 調査区 出土遺物

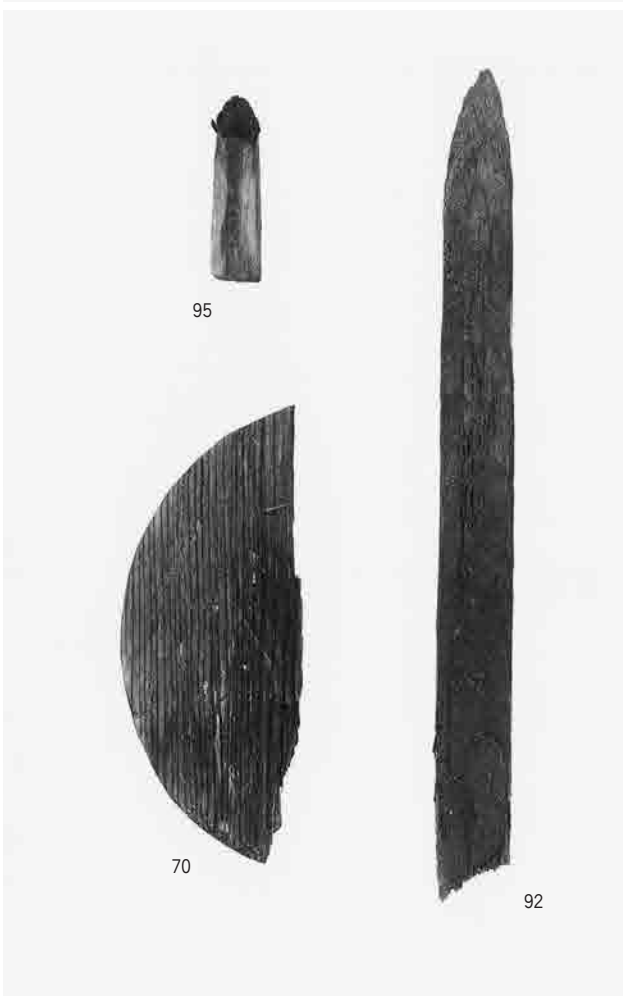
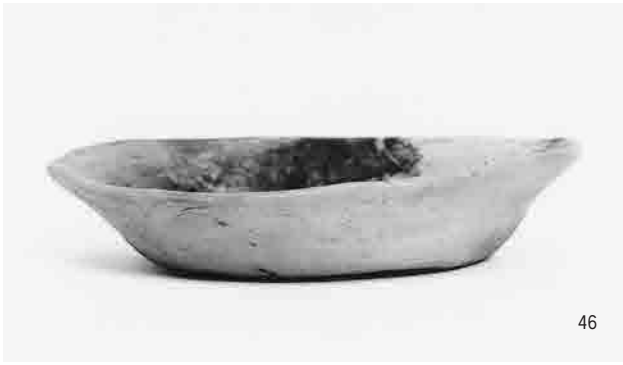


図版8 06-2-2調査区 出土遺物1

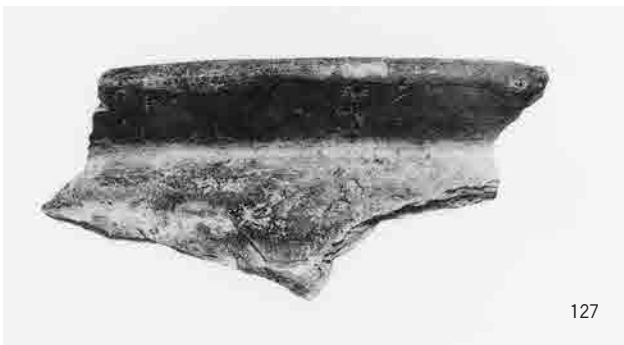
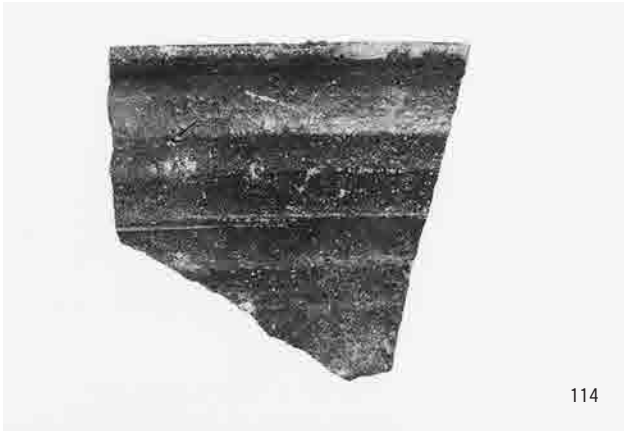


10溝・11溝（第3面）出土遺物

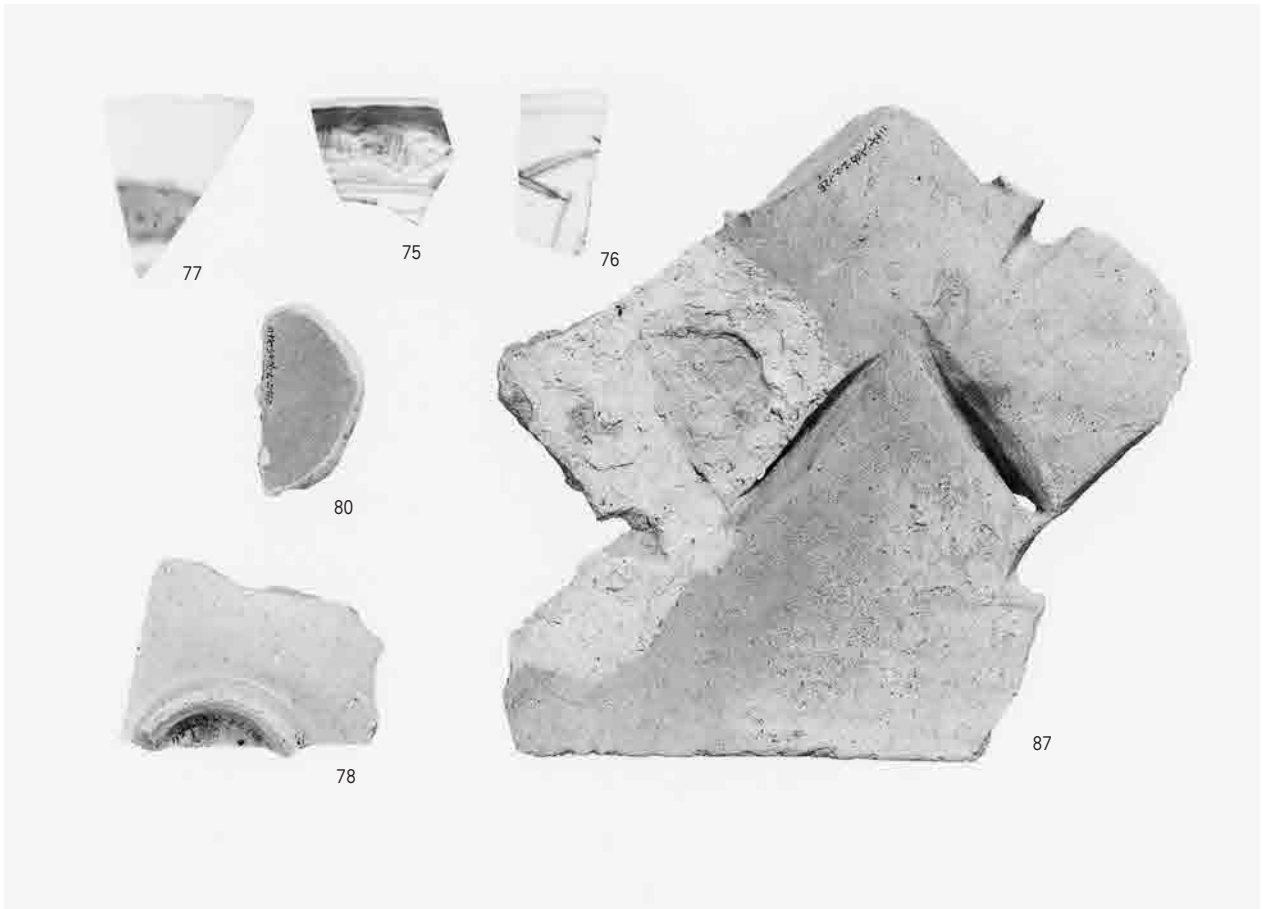
図版9 06-2-2調査区 出土遺物2



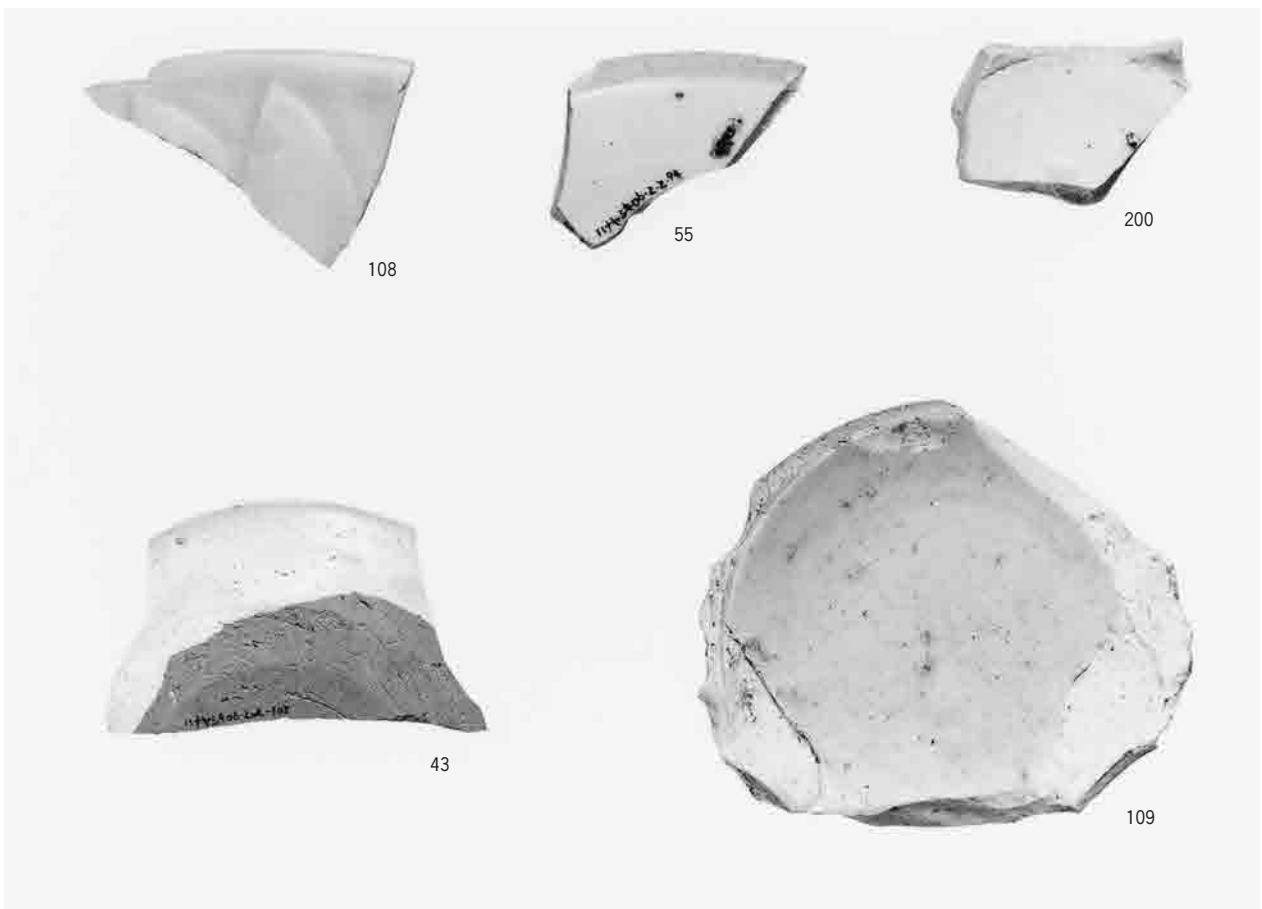
図版10 06-2-2調査区 出土遺物3



図版11 06-2-2 調査区 出土遺物 4

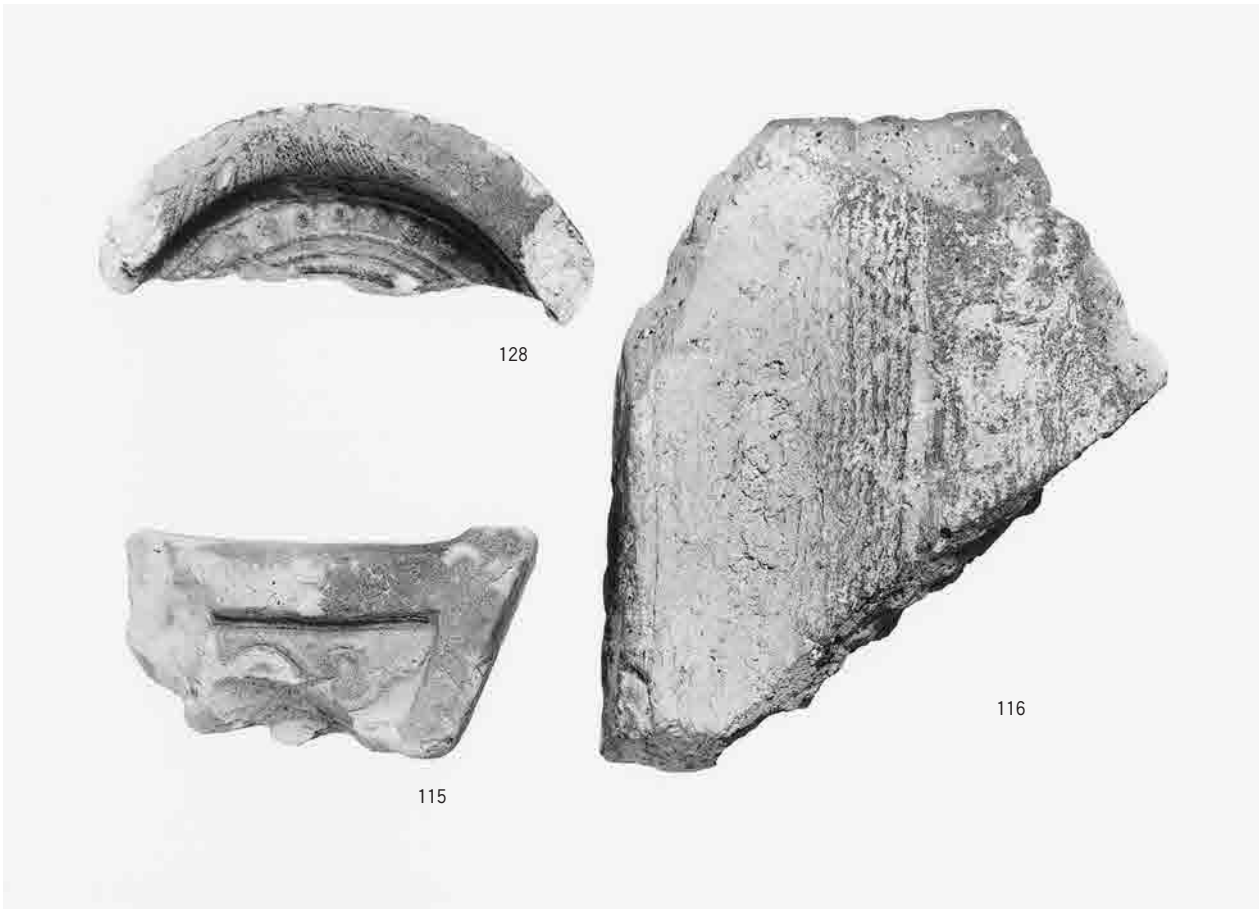


1. 142井戸（第3面）出土遺物

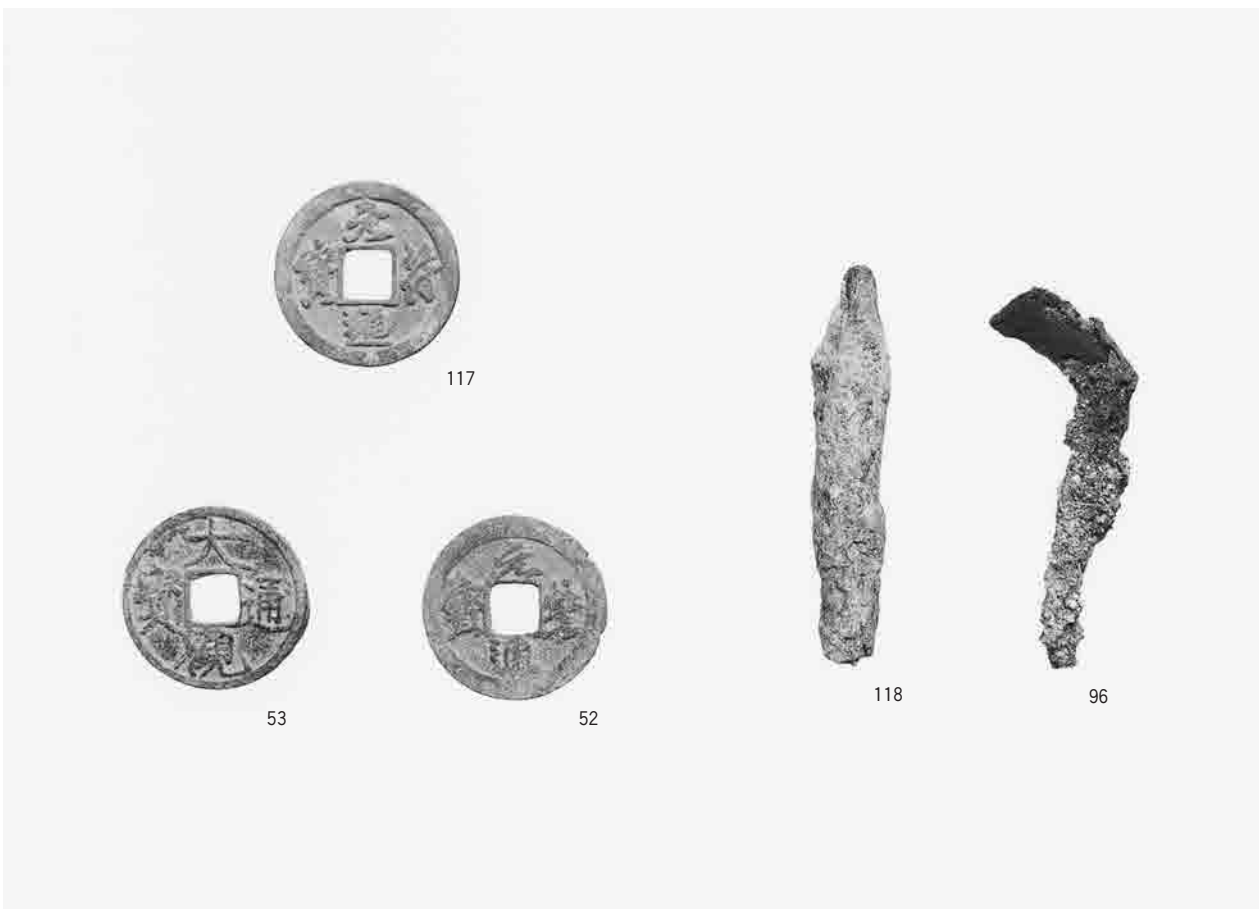


2. 調査区内出土青磁・白磁

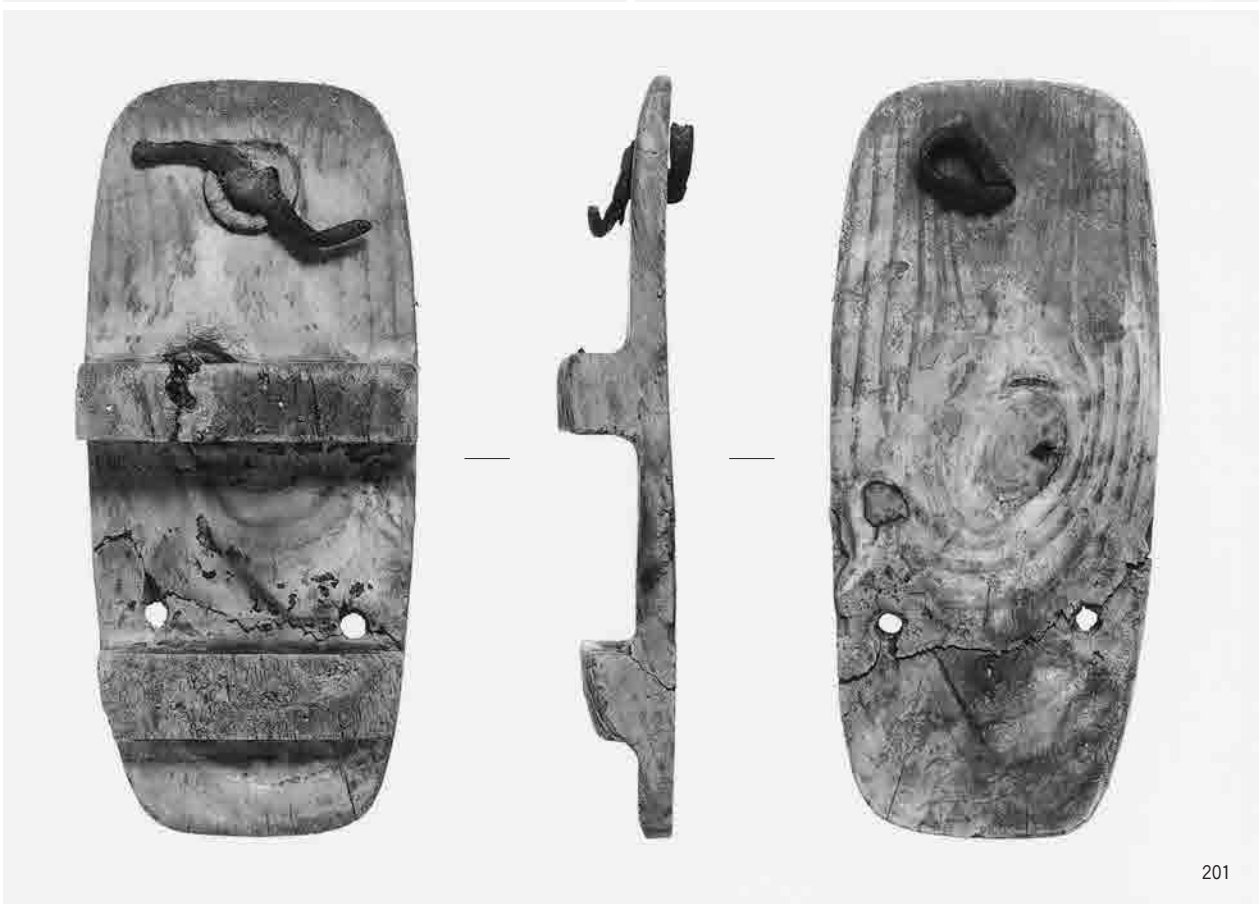
図版12 06-2-2 調査区 出土遺物 5



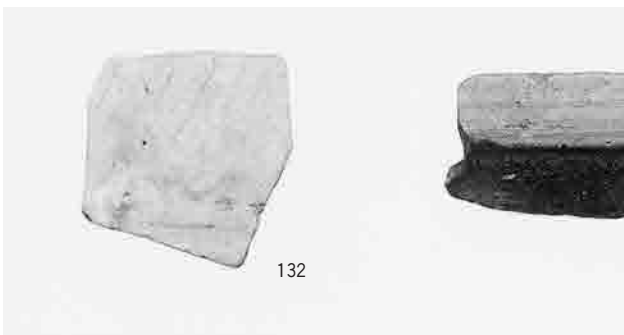
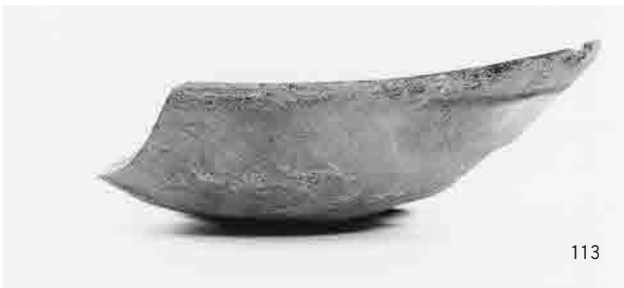
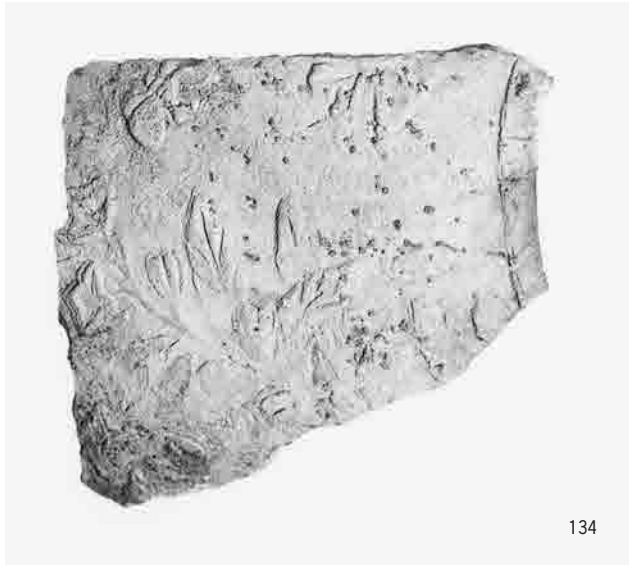
1. 第1・2層出土瓦



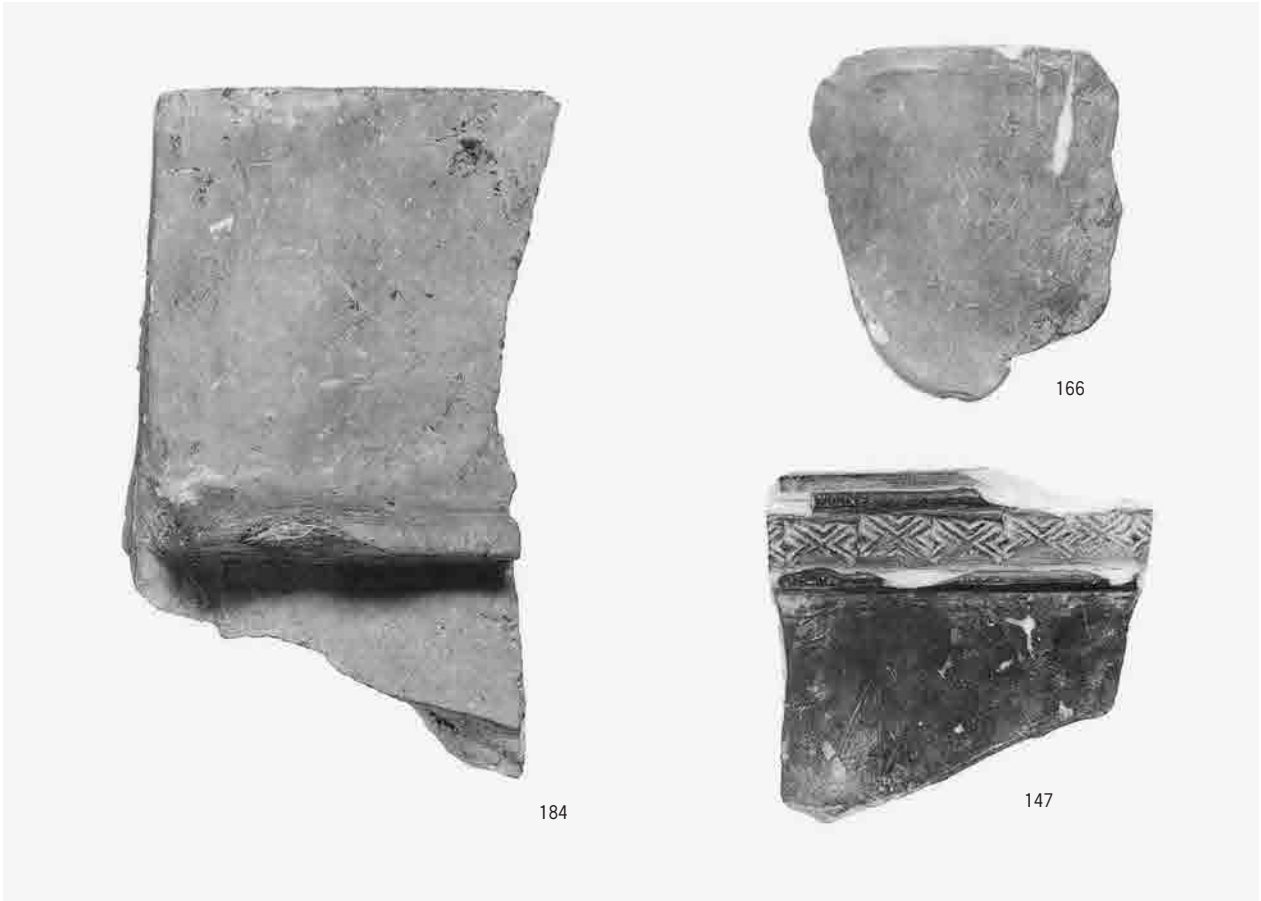
2. 調査区内出土金属製品



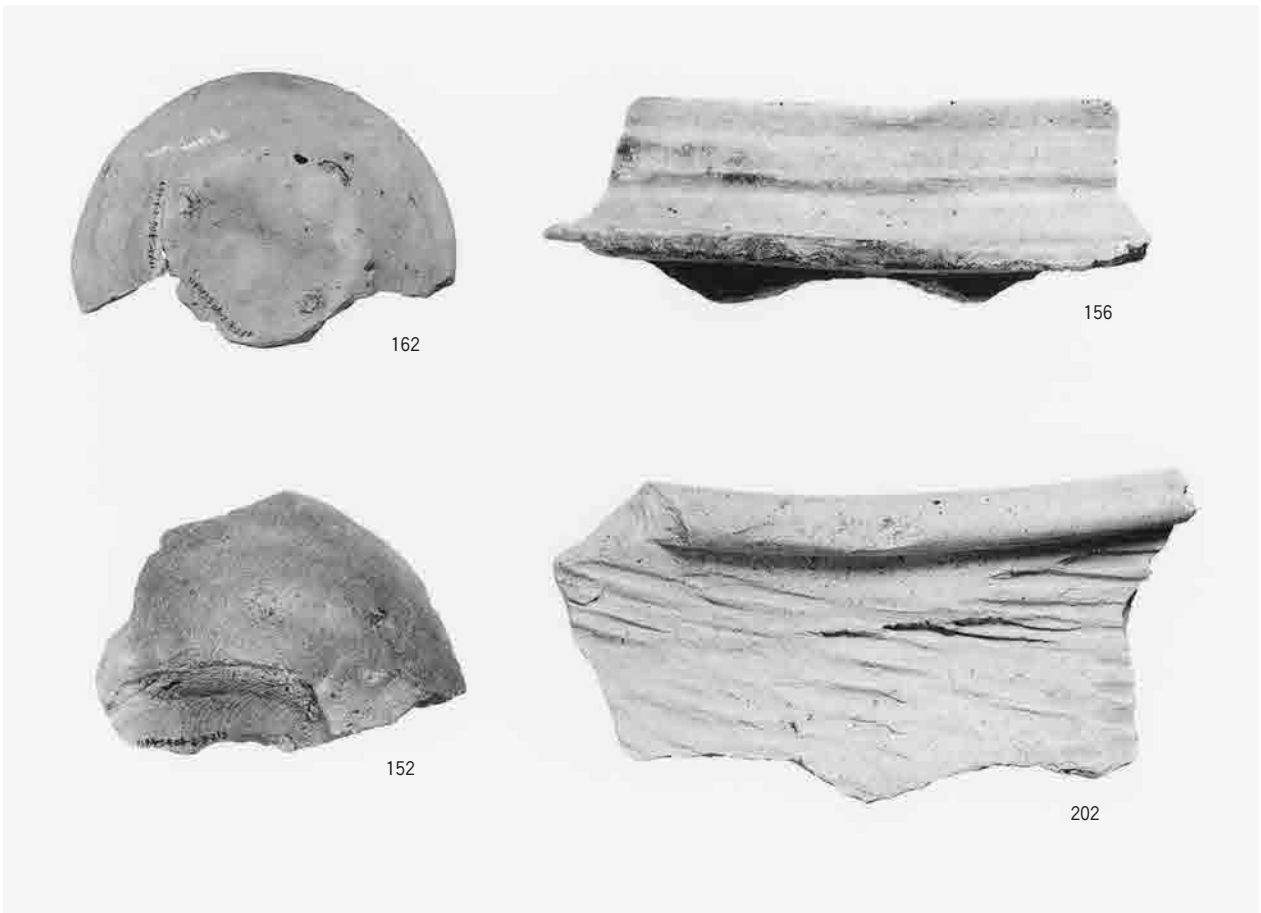
図版14 06-2-3調査区 出土遺物1



図版15 06-2-3調査区 出土遺物2

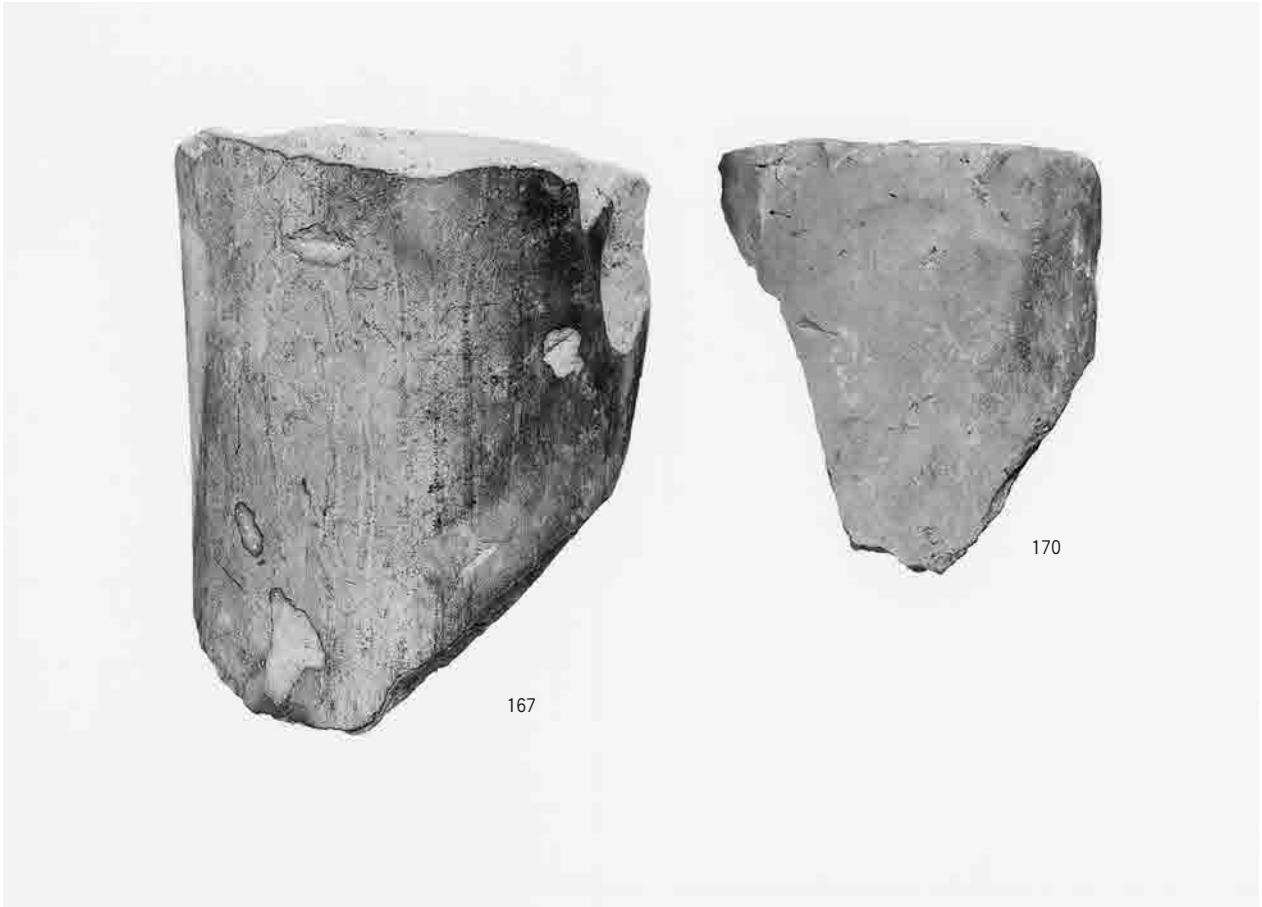


1. 2溝 (第1 - 2・3面) 出土遺物1

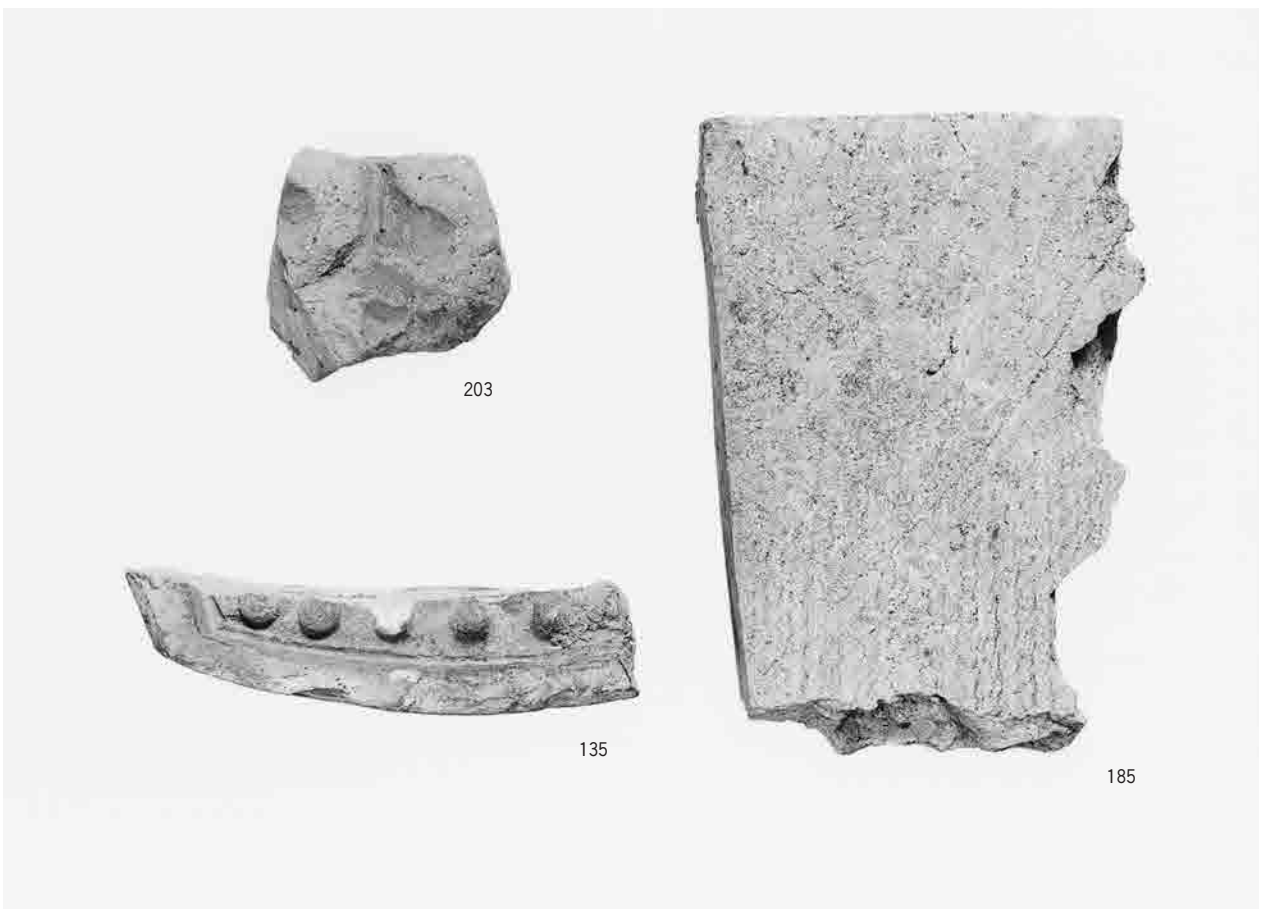


2. 2溝 (第1 - 2・3面) 出土遺物2

図版16 06-2-3 調査区 出土遺物 3



1. 2溝 (第1-2・3面) 出土遺物 3



2. 第1・1-3層出土瓦

報告書抄録

ふりがな	はなやしき いせき に						
書名	花屋敷遺跡Ⅱ						
副書名	近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第162集						
編著者名	岡本圭司、影山美智与						
編集機関	(財)大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区3丁21番4号 TEL072-299-8791						
発行年月日	2007年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
はなやしき いせき 花屋敷遺跡	おおさかふ ひがしおおさかし 大阪府東大阪市 よしたいつちょうめちない 吉田1丁目地内	27227	87	北緯 34° 39' 46" 東経 135° 37' 11"	2006. 05. 12 ～2006. 07. 31	792㎡	近畿日本鉄道奈良線 連続立体交差化
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
花屋敷遺跡	集落	室町時代 前半	建物・柱穴・ピット・土坑 ・井戸・溝・流路・素掘小溝	土師器・瓦器・瓦質土器 ・瓦・木製椀・獣骨	耕作に関連する遺構の検出		
	集落	室町時代 後半	ピット・土坑・溝	土師器・瓦器・瓦質土器 ・瓦・青磁・陶器	溝に区画された掘立柱建物の 検出。		
	集落	江戸時代	井戸	土師器・瓦質土器・瓦 ・陶器・磁器			
要約	平成17年に新たに発見された遺跡である。主に13世紀後半から15世紀の集落跡を検出した。06-2-1調査区では、集落の区画溝と思われる南北走向の溝を検出し、それ以东では極端に遺構・遺物ともに減少する傾向が見られた。その西隣の06-2-2調査区では、土師器・瓦器・瓦質土器を多量に含む南北走向の溝2条と、東西方向の溝1条を検出した。これらに挟まれる形で建物群を検出した。旧玉串川の自然堤防による微高地の上に、居住空間が展開することが判明した。最も西に位置する06-2-3調査区でも、同様のピット群・区画溝を検出した。						

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第162集

花 屋 敷 遺 跡 Ⅱ

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2007年 3月30日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3丁21番 4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南 2丁目 6番 8号